

キリスト信仰の87の疑問に答える

問い合わせ

塙田多三郎

Shioda Tasaburo



伝道出版社

推薦のことば

月刊「みちしるべ」に長年にわたって掲載された「問い合わせ」が、このたび選集として出版されることを、心から喜び感謝しております。

本書では、「人生に関する疑問」や「聖書に関するいろいろな質問」に的確に答えられており、初めての方にも非常に理解しやすい説明となっています。

したがつて、人生の悩みを持つておられる方、聖書に興味を持つて初めて読まれる方に、神を知るための良き案内書として読んでいただきたいと心から願っています。また、私たち信者も、まことの神さまを知らない多くの方に伝道するための案内書として、活用させていただきたいと思います。

本書は、敬愛いたします塩田多三郎兄がご老体にむちを打つて執筆された著作の中から、代表的な記事を選び出し、編集したものです。出版にあたり、ご指導を賜った藤本光夫兄に感謝申し上げます。

どうか、神さまが本書を祝用してくださり、この本を読まれた一人ひとりの方々の上に神さまの恵みが豊かにありますように祈っております。

木野田 信道

目 次

1	人生、苦しみ、宗教、キリスト信仰について（Q1—Q5）	1
2	聖書への疑問について（Q6—Q15）	2
3	キリスト信仰への疑問について（Q16—Q24）	3
4	神について（Q25—Q36）	4
5	死について（Q37—Q45）	5
6	罪について（Q46—Q53）	6
7	キリストのみわざについて（Q54—Q65）	7
8	救いについて（Q66—Q75）	8
9	救いの確信を持つために（Q76—Q80）	9
10	その他（Q81—Q87）	10
	質問一覧	

1 人生、苦しみ、宗教、キリスト信仰について

問1

むなしさを感じながら毎日を過ごしています。人は何のために生きているのでしょうか。

の意思であり、それこそ万物の創造主である神の意思でなくて何でしょうか。

神が人間を創造されたことについて、聖書は次のように語っています。

これは人生の根本的な問題と言えるでしょう。私たちの周囲には、目的や用途のないものはありません。ところが、「あなたは何のために生まれてきたのですか」と問われると、そう簡単には答えられません。それに、このような疑問を感じている人は少ないようと思えます。それどころか、現実の多忙な生活の中で、自分の欲望を満たすことに熱中しているように見えます。

さて、私たちは、だれひとりとして自分の意思で生れてきたわけではありません。自分の意思とはかかわりのない他者の意思によつて存在させられているのです。それがいつたい何者であるのか、また、私たちが何のために生かされているのかを知ることが、つまり、人生の目的を知ることなのです。他者の意思とは、人間を創造したお方

「神は仰せられた。『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて』。神は人をご自身のかたちとして創造された」(創世記一・26、27)。

神が人間を創造された目的については、次のように記されています。

「わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造つた」(イザヤ四三・7)。

すなわち、「神は、『自分の御名がほめたたえられるために、ご自分のかたちに人間を創造された』と聖書は語っているのです。造られた者が造つた者の意思に服従し、それに仕えるのは当然のことです。神は、私たち人間が神を知り、心から神を愛することを望んでおられるのです。

「神を愛する」とは、具体的には、神の戒めを守ることです。「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません」(Iヨハネ五・3)。

神の命令については次のように記されています。

『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』。これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです」(マタイ二三一・37ー39)。

これは、律法(旧約聖書の教えや戒め)の専門家が尋ねたとき、イエスさまがお答えになつたみことばです。

神を愛し、隣人を愛する人間が眞の人格者です。人が眞に「愛の人」となるとき、その人の人格は完成したと言えます。この愛が、いわゆる男女間の愛とか恋愛とかいったものではなく、神の愛であることは言うまでもありません。人間が生

来持つてゐる愛は、肉的な愛、自己中心的な愛であり、神に喜ばれる純粹な愛ではありません。眞の愛は、神を深く知り、神に仕えることによつてのみ知ることができます。人生の目標を神に置く者だけが、意義ある人生を送ることができるのです。

「あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい」(Iコリント一〇・31)。

これこそ人生の究極の目的です。神と人とのために生きることこそ、人生の目的です。

どうかあなたも聖書を読まれ、イエス・キリストの愛をお知りになりますように。そして、この救い主を信じて、たましいの救いにあずかり、意義ある人生、生きがいある人生を送られますように心からお勧めします。

問2

「生きがい」とは何でしょうか。その日その日を大切に過ごすことでしょうか。

国語辞典には、だいたい次のように記されています。「生きている意義。また、生きる張り合い。生きるに値するだけの価値。生きていることの喜びや幸福感」。ですから、「生きがいを感じる」という言い方をしますし、それをもたらしてくれる

あなたは、生きがいのある、満たされた生活を毎日送つておられますか。何となくむなしく、心が満たされないようにお感じになることはありますか。たとえあなたが、物質的な面で人並み以上に恵まれているとしても、それだけでは、心から満足した生活を送ることはできません。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」（マタイ四・4）というのは永遠の真理です。

あなたの心の中には、人間としての深い欲求があります。それが満たされなければ、本当の意味で満たされた生活を送ることはできません。それはいつたい何でしょうか。

それは愛です。あなたの心は愛を求めています。愛し愛されることがなければ、人生は、荒れ果てた野原のように、さびしく味気ないものになってしまいます。愛を得、愛を注ぐことによつて、あなたの生活には生き生きとした張り合いが

以上は論理の面からの一般論ですが、次に、聖書からの視点によって説明しましょう。

出てきます。

私たちの愛の対象は何でしょうか。あなたは、自分以外の人をお考えになるでしょうが、人間の愛だけでは不十分です。人間の愛は不完全なもの、不安定なものです。「愛の悲劇」ということばさえあります。

しかし、ここに、あなたを絶対的に愛しておられる方がおられるのです。それは、あなたをお造りになつた神です。神は次のように言われます。

「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない」(イザヤ四九・15)。

「神は、実に、そのひとり子(キリスト)をお与えになつたほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ三・16)。

神は、きのうも今日も、永遠に変わることなく、あなたを愛しておられます。この事実を知つたとき、私たちの心は喜びに満たされ、この愛に応え

たいという気持ちが生まれてきます。そして、神を愛する愛が原動力となつて、人を愛するようになります。この愛を心に持つた人は、いつも相手の立場に立つて、本当の愛を注ぐことができるようになるのです。

「惜しみなく愛は奪う」とある作家は言いましたが、神の愛は「惜しみなく与える愛」です。あなたも、このように深い「神の愛」をお知りになり、それに応えて生きようとなさるなら、いつも心が満たされ、生きがいあるすばらしい生活が展開されていくのではないかでしょうか。

問3

物欲にとらわれ、快樂を追い求めるこの時代の中で、時々むなしさを感じます。でも、宗教にも抵抗を感じます。クリスチャンの友人は「いつも平安だ」と言っていますが、キリスト教に入ると本当に平安な心になりますか。

おっしゃるとおり、今日ほど多くの人が富や快樂を追い求めている時代は、今までなかつたと思います。

では、欲望を満たした人が、生きる張り合いや心の安らぎを持つて生活しているかというと、決してそうではありません。高度成長がもたらしたひずみに対する反省も含めて、物質的な豊かさに価値を見いだすことへの懷疑、いわゆる「モノ離れ」が生じていることも事実です。聖書には、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」(マタイ四・4)というキリストのことばが記されています。人間が生き

ていくためには確かにパン(食物)が必要ですが、神のことばによつて養われて初めて、人は眞のいのちに生きるのであります。

ところであなたは、「宗教にも抵抗を感じる」と言つておられますかが、その理由は何でしようか。「宗教は阿片である」と言つたマルクスの思想や、科学的真理と思い込まれてゐる進化論などの影響を受けておられるのでしようか。それとも、宗教は「世の弱者」や「人生の敗殘者」が頼るものであると考えておられるのでしようか。

しかし、聖書の教えは真理であつて、宗教ではありません。旧約聖書の「伝道者の書」の著者ソロモンは榮華を極めた王でしたが、快樂の限りを味わつてみた結果、「何とむなしいことか」と言つています。また、自分が手がけたあらゆる事業と、そのために骨折つた労苦とを振り返つて、「何とすべてがむなしく、風を追うようなものだ」とも述懐しています。そして、結論として次のように記しているのです。

「神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとつてすべてである。神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ」(伝道者の書一二・13、14)。

クリスチャンである友人が「いつも平安だ」と言つているとのことです。それは、すべてのクリスチヤンにとって真実の経験です。クリスチヤンが持つている平安は、難行苦行や善い行いを積んだ結果与えられるものではありません。キリストを信じて救われた者に、キリストが直接お与えになるもので、神の恵みによるものです。

この平安は、状況や境遇に関係なく、どんな時にも信者に与えられます。キリストご自身、いつもこの平安を持っておられました。十字架にかかるつて私たちの身代わりの死を遂げられる前にも、次のように言されました。

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたくしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのと

は違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません」(ヨハネ一四・27)。

よみがえられた後も、キリストはたびたび弟子たちに現れて、「平安があなたがたにあるように」(ヨハネ二〇・19、21、26)と言わされました。

その後、天に上つて行かれたキリストは、ご自分を信じる者たちのために、今も天でとりなしでおられます。

あなたもキリストを信じて、この平安を、ご自分のものとなさいますよう心からお祈りします。

問4

長い間、不治の病に悩まされていますが、キリスト信仰によつて病が治る望みはありますか。

すべての人が、何らかのかたちで幸福を追い求めています。その最も基本的な条件は健康ではないでしょうか。しかし、あなたは不治の病で悩んでおられるとのこと、心のお苦しみはいかばかりでしよう。その苦悩を本当に知つておられるのは、あなたと、全知の神と、そして神の御子イエス・キリストだけです。

さて、お尋ねにお答えします。人間は自分の力で生きているのではなく、生きるのも死ぬのも、また、病気が治るものも治らないのも、すべて神の御手のうちにあると、私たちクリスチヤンは信じています。聖書に次のように記されています。

「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」(使徒一七・28)。
「あなたがたはこう言うべきです。『主のみここ

ろなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう』(ヤコブ四・15)。

神のみこころならば、たとえ不治の病であつても、治ることがあると思います。かつて、江原素六という人のことを、ある本で読んだことがあります。彼は明治時代の政治家で、教育や社会事業、矯風運動に尽力したクリスチヤンですが、当時、死病と言われていた肺結核にかかりました。いよいよ危篤という夜、信者たちが集まつてともに祈つたところ、彼は奇跡的に助かり、その後、大いに活躍して八十歳の長寿を全うしたそうです。

さて、星野富弘さんをご存じでしようか。彼は中学校の体育の教師でしたが、クラブ活動の指導中に誤つて頸椎を折り、全身の機能が麻痺するほどの重度身体障害者になつてしましました。そのような中で、彼はキリストを信じる信仰に導かれ、たましいの救いを経験し、それからの日々は、筆を口にくわえて絵を描き、詩を書くようになりました。彼の描いたある絵に、「私は、あなた(神)

のみおしえを喜んでいます。苦しみに会つたことは、私にとつてしまわせでした」(詩篇一一九・70、71)という聖書のことばを書き添えたものがあります。生涯、決して治らないかも知れない重度身体障害者の星野さんの、これが信仰の境地なのです。ここに、苦難を神の恵みとして受け取つた彼の心境を見る事ができるのではないでしようか。

また、野村伊都子さんという人は若い日に重症の腎臓結核にかかり、膀胱結核を併発、その激痛が夜も昼も彼女を休ませなかつたそうです。そんな苦しみの中で、彼女がしたことは、目の不自由な人のための点訳でした。その姿はどれほど多くの人を力づけたことでしょう。彼女は苦しみの中で「主(キリスト)よ、今日の重荷は何ですか」と詩の一節にうたい、「どんな、重荷でも、神よ、お受けいたします」と書いています。これこそ、苦難に打ち勝つた謙虚な姿です。しかし、ついに肝硬変を病み、苦しみのうちに神のみもとに召され

ました。
あなたの不治の病については、すべてを神にお任せしてください。そして今、あなたは何をすべきでしようか。

神は、あなたがキリストを信じて永遠のいのちを得ることを願つておられます。救い主キリストは、私たちすべての人間の罪のためにみずから進んで十字架にかかり、三日目によみがえられました。このお方を信じ受け入れてください。罪の赦^{ゆる}しと永遠のいのちが与えられます。

問5

キリスト信仰のことを考へると、クリスチヤンのような「弱い者」にはなりたくない、という思いが先に立つてしまうのですが……。

世間には、「クリスチヤンは弱い者」といった先入観にとらわれておられる方も多いようです。キリストが「あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい」(マタイ五・39)と言われた有名なことばを皮相的に解釈している人は少なくありません。ロシヤの文豪トルストイが金科玉条とした、いわゆる絶対無抵抗主義と結びつけてしまっているのです。

さて、観点を変えて考へてみたいと思います。人間が弱々しいかどうかということは、いつたい何によつて決めるのでしょうか。「世の中で頼りになるのは自分だけだ。自分の健康、自分の能力だけが頼りだ」といった人生観を持つてゐる人がいますが、聖書には次のようなことばが記され

ています。
「あすのことを誇るな。一日のうちに何が起るか、あなたは知らないからだ」(箴言二七・1)。「あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いつたいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎません」(ヤコブ四・14)。

これらの聖書のことばを深く考へれば、人間のいのちがいかにはかないものであるかがおわかりになると思います。若いときは元気で働いていても、やがて年を取つて死んでいくのです。人間はそのことを知つていますが、非常に恐ろしいことなので、なるべく考へないようにしているのです。肉親の死や自分の病気などで、時々死を身近に感じ、恐怖に襲われても、なるべく早く忘れ去ろうとします。

ご存じのとおり、人間には良心がありますが、古来、聖人君子と仰がれた人ほど、心の汚れを感じ

1. 人生、苦しみ、宗教、キリスト信仰について

じ、良心の呵責に悩みました。善と知つてはいても、それを行う気概に乏しく、悪とわかつてはいても、それを行つてしまふのが人間の弱さです。聖書には、使徒パウロの次のようなことばが記されています。

「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえつて、したくない惡を行つています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行つているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です」(ローマ七・19、20)。

このような弱さを持つてゐる人間に對して、「そういう強がりを言って、自分の弱さから目をそらそうとしないで、自分の弱さをじつと見つめてご覧なさい。神の恵みによつて本当に強くなりなさい」と聖書は呼びかけているのです。

あなたがキリスト信仰のことを考えておられるなら、ぜひ今日という日に、神に對して悔い改め(罪を認めて、心を神のほうへ向けること)、キリストを信じ受け入れてください。「キリストにあつ

て自分の弱さを知る者こそ強い者であり、神から祝福される者である」との逆説の中に真理があることを知つていただきたいと願うのです。

2

聖書への疑問について

問6

私は聖書に興味を持ち、旧新約聖書を買い求めましたが、どこから読み始めようかと迷っています。

ず「まえがき」を読み、それから本文、そして「あとがき」を読むでしよう。

世の中には万巻の書がありますが、「書物の中の書物」と言われている聖書に興味を持ち、お読みになろうとしておられるとは、実に神の恵みであります。万人がどんな場合にも必読すべき書物は、聖書をおいてほかにはありません。それゆえ私たちは、何を読んでも、今一つ、聖書を読まなければなりません。また、何を読まなくても、少なくとも聖書だけは、ぜひとも読まなければなりません。こんなに価値ある書物を読み始めようとしているのですから、いわゆる三日坊主ではなく、どうか強い意志をもつて、最後まで読み通してください。

次に、どこから読み始めたらよいかについてですが（人それぞれ考え方があるようですが）、私の意見としては、新約聖書から先にお読みになることをお勧めします。正直なところ、旧約聖書は、特に初めての方にはむずかしく、意味がわからにく箇所もたくさんあり、途中で挫折してしまいがちです。新約聖書の初めの四巻は福音書となつており、救い主であるイエス・キリスト

さて、ご質問いただいたとおり、分厚い聖書を手にして、どこから読み始めようかと迷うことには、多くの人が経験することです。ふつうは、ま

2. 聖書への疑問について

を四つの面から示していますから、キリストを知るうえできわめて大切です。まず「マルコの福音書」、次に「ルカの福音書」、「マタイの福音書」、そして最後に「ヨハネの福音書」を読まれたらいがでしよう。その次は、「使徒の働き」、そして、二十一通収められている書簡（「ローマ人への手紙」から「ユダの手紙」）の順に読んでみてください。「ヨハネの黙示録」はわかりにくいですが、繰り返し読めば、意味が少しずつわかつてくると思います。

新約聖書全体を二回くらい通読したあとで、旧約聖書の「創世記」から順に、少なくとも一章ずつ、読んでみてください。「箴言」は三十一章ありますから、日課として、毎日一章ずつ読むのに適しています。「詩篇」は百五十篇もありますが、就寝前に少しずつ味わいながら読まれたらよいと思します。こうして、旧新約を敬虔な心で読んでいかれると、心に響く聖句が必ず示されることでしょう。

あなたが、健全なみことばの真理を説き明かしているキリスト集会（教会）に導かれ、聖書を深く学ばれ、キリストの御名を信じ受け入れて、たましいの救いを経験し、真に幸いな生活を送られますようにお祈りします。

問7

聖書を初めて手にしました。「聖書を読む心得」といつたものは、あるのでしょうか。

まず、「みことば（聖書のことば）の真理を悟らせてください」という祈りの心をもつて読むことが大切です。幼子のように素直な、へりくだつた心を持つて読むことです。

初めのうちは、わかりにくいところが多くあると思いますが、わかつても、わからなくても、根気よく読み続けることが大切です。昔から、「読書百遍意おのずから通ず」と言っています。「どんなむずかしい書物でも、何度も読めば、意味は自然にわかつてくるものだ」という意味ですが、この原理は、聖書を通読する際にも当てはまると思います。

また、聖書を毎日読むことです。からだの健康を維持するために毎日食事をするのと同じように、心の糧も毎日必要です。イエスさまは、「人

はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」（マタイ四・4）と言われました。

それに、時間を決めて読むことも大切です。できれば毎朝、人と交わる前に、たとえわずかな時間でも読むことをお勧めします。読む時間は、各自の事情によって異なることでしょう。就寝前にも三十分くらい読むことができれば、一日の反省も兼ねて、有益であると思います。

そのうえ、最終的には、聖書全体を読み通すことを目指すべきです。ある文筆家は、「聖書全体が神のことばであり、一つの物語であり、キリストを中心とした、深遠かつ壮大な文学作品である」と語りました。キリストが聖書の主題であり、中心です。キリストの降誕以前の部分（旧約聖書）は、彼を待ち望み、降誕後の部分（新約聖書）は、キリストを説き明かしています。このように、聖書全体がキリストの物語なのです。（旧約聖書はキリストの来臨に道を備え、四つの福音書（マタイ

2. 聖書への疑問について

の福音書からヨハネの福音書まで)はキリストの地上生活を語り、弟子たちの手紙(ローマ人への手紙からユダの手紙)はその教えを伝えています。そして、ヨハネの默示録には、キリストの究極の勝利が記されています。

以上、基本的なことを説明しましたが、さらにつけ加えて説明すると、次のとおりです。

聖書の各書卷の名前とおもな内容を覚えるようにしてください。聖書は六十六巻あり、それぞれの書が別々の主題を扱っています。聖書の中身を知的に学ぶ際には、それらの書がどんな種類のものであり、どんな順序で書かれているのか、また、何について書かれているのかを学ぶようにしてください。

みことばを暗記することも大切です。聖句を暗唱することができれば、神はみことばを思い起こさせ、折りにかなった導きを与えてくださいます。

最後に、聖書を正しく読むためには、聖書が書

かれた本来の目的にそつて読むことです。まず何よりも、キリストをよく知るために。「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます」とが大切なことです。

「このみことばをしつかり心に刻み込んでおくこ

問 8

私はたまにキリスト集会(教会)の伝道の集まりに行つたり、家で少しずつ聖書を読んだりしていますが、ほとんど意味がわかりません。また、興味もわいてきません。聖書を楽しく読むことができれば、また、自分の人生にとつて有益なものにできればと願つているのですが。

お気持ちを正直に打ち明けてください、うれしく思います。ごいっしょに考えながら、ご質問にお答えしたいと思います。

まず、あなたが聖書をお読みになる目的は何でしょうか。欧米の文化や文学を理解するために、単なる興味本位でお読みになるのではないでしょう。このような目的で聖書を読み、知識を身につけたとしても、肝心な「たましいの救い」を経験することはできません。次のみことばをお読みください。

「これらのことことが書かれたのは、イエスが神の

子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によつていのちを得るためである」(ヨハネ二〇・31)。

「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です」(IIテモテ三・15、16)。

つまり、「イエスは神の子キリストである」と私たちが信じて救われるために、神は聖書記者に働きかけて、みことばを書かせてくださったのです。聖書が書かれた目的をよく心に留めてください。そして、現在のご自分を静かに反省してみてください。おそらく、眞の喜びも平安もなく、また、満足もないご自分を発見なさることでしょう。たましいが救われなければならないことが、おわかりいただけるでしょう。

救われることによって、あなたの心は、ことば

に尽くすことのできない、満ち足りた喜びに満たされます。また、イエス・キリストはあなたの心に真の平安をお与えになります。このすばらしい救いは、素直な心をもつて聖書を読み、イエスを救い主として信じ受け入れることによって得られるのです。

ですから、あなたは、ご自分が救われなければならぬ者であることを悟り、救いを切に求める心から、聖書を学び始めなければなりません。聖書研究は、真剣な求道の精神から出発し、心からの祈りが込められてこそ、初めて実り豊かなものとなるのです。あなたにさつそく実行していただきたいことは次のとおりです。

救い主であるキリストご自身を知るために、新

約聖書から、それも、キリストの生涯が記されている福音書から丹念に読み始めてください。新約聖書をどのような順序で読み進めるかについては、(本書の18ページにある)六番目の問い合わせをご参考ください。中でも、特に、「ローマ人への手紙」

をじっくりお読みになることをお勧めします。毎日、規則正しく聖書を読む習慣を身につけてください。

聖書を学んで、正しく、また深く教えられる秘訣は、キリスト集会(教会)で開かれている定期集会、特に福音集会(伝道集会)に出席し、まことに神の前に謙遜に、かつ熱心にみことばを聞くことです。そして、教えられた真理に従う決心が大切です。これらのことと積み重ねていくとき、聖書を学ぶ喜びを経験することができます。詩篇一一九篇を朗読することをお勧めします。

あなたが救われ、真理をお知りになり、喜びと平安と力ある生活を送られますように心からお勧めします。

問9

聖書は、いつごろ、だれによつて書かれたのですか。

旧約聖書は、紀元前千四百年ごろから紀元前四百年ごろまでに、約三十人の人々によつて書き記されました。一方、新約聖書は、紀元五十年ごろから百年ごろまでに、約九人の著者たちによつて書き記されました。

聖書は不思議な書物です。著者は約四十人いますが、王、政治家、学者、医者、漁師、羊飼い、取税人など、実にさまざまです。彼らは同じ時代に生きていたのではなく、最初のモーセから最後のヨハネに至るまでの期間は、約千五百年にわたっています。ほとんどはユダヤ人でしたが、中には、ユダヤ人以外の人もいました。このように、時代や背景、生い立ちが違つていた人々が書いたものであるにもかかわらず、聖書は、その内容において、すべて調和が取れているのです。矛盾しているところは一つもありません。調和、一致があ

るということは、いったい何を意味しているのでしょうか。書いた人たちの背後にあつて、彼らを動かし、導かれた唯一の神がおられるということ以外には説明のしようがありません。

キリストは、聖書の内容について次のように言われました。

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです」(ヨハネ五・39)。

この場合の「聖書」とは旧約聖書のことですが、旧約聖書にも、救い主であるキリストのことが記されています。新約聖書についてはなおさらで、ヨハネは福音書の中で次のように記しています。「これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によつていのちを得るために」(ヨハネ二〇・

パウロも聖書の内容について次のように記しています。

「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです」(Ⅱテモテ三・15)。つまり、聖書は、イエス・キリストによる救いを示している書物なのです。

紙面に余裕があるので、もう少し掘り下げて説明してみましょう。

聖書は英語で「バイブル」と言います。これはギリシャ語「ビブロス」の訳語で、ビブロスとは「書物」という意味です。それに「聖」という字をつけて聖書と呼んでいるのです。聖書は著者や執筆年代を異にする六十六の書物を集めたもので、そのうちの三十九巻が旧約聖書、二十七巻が新約聖書、両者を合わせて単に聖書、あるいは旧新約聖書と呼ばれています。「旧約聖書はユダヤ教の經典であって、キリスト信仰には無用なものだ」と考えるのは、はなはだしい誤解です。キリスト

の教えを学ぶためには、ぜひとも旧新約聖書を一體として学ばなければならないのです。旧約聖書の原語はヘブル語ですが、その中のダニエル書の一部分だけはアラム語で記されています。旧約聖書のギリシャ語訳は「七十人訳」と呼ばれ、キリスト降誕のころは、ユダヤ人の間で広く用いられていました。

宗教改革以後、ギリシャ語の原文から世界各国の近代語に翻訳されるようになりました。今日では二千種類以上の国語、地方語、方言等に、聖書の全部もしくは一部が翻訳されています。地球上の有力な諸民族はもちろん、共通の言語を語る人がきわめて少ない発展途上国の奥地の人々でさえ、自分の言語で聖書を読むことができます。翻訳されている言語の種類が多いことと、発行部数の多いことで、聖書ほど全人類に行き渡っている書物は他に類例がないことを知つてください。

聖書はなぜ旧約聖書と新約聖書に分かれているので
すか。

旧約聖書と新約聖書はいずれも、イエス・キリストの救いのみわざについて記したものでした。したがって、この二つは別種のものではありません。相互に密接な関係があり、二つが合わさつて一冊の「聖書」となっているのです。

旧約は「古い契約」、新約は「新しい契約」という意味です。これらのことばは新約聖書にも出てきますが（Ⅱコリント三・6、14）、「旧約聖書」、「新約聖書」という言い方が始まつたのは二世紀ごろのことです（ちなみに、イエスを救い主と認めないユダヤ教徒は、今でも旧約・新約ということを使いません）。

聖書全体の主題は「イエス・キリストによる救い」であり、旧約聖書はキリストの来臨を預言した書物、新約聖書はその実現を述べた書物です。

「旧約聖書はユダヤ人の歴史文書が集成されたものだから、読む必要はない」とか、「旧約の教えは、キリストが来られたことによってすべて不要になつた」とか言う人もいるようですが、そのようなことを言う人は、聖書をよく学んだことのない人です。

旧約聖書全体を満たしているのはキリストご自身です。キリストはユダヤ人を前にして次のように言われました。

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです」（ヨハネ五・39）。この場合の「聖書」は旧約聖書のことです。

また、次のようにも記されています。

「イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書（旧約聖書）全体の中でのご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた」（ルカ二十四・27）。

神はイスラエルをご自分の民として選び、み

2. 聖書への疑問について

こころを彼らに示し、そのみこころに従つて歩めば大いに祝福しようと約束されました。神は、イスラエル民族をとおして、全人類に救いと祝福を与えるとされたのです。しかし、彼らは神の律法（教えや戒め）を守ることができませんでした。喜んで神への忠誠を誓いましたが、結局、その契約を破つてしまつたのです。けれども神は、彼らの不眞実にもかかわらず、人類の救いのためにメシヤ（救い主）を遣わされました。旧約聖書のことを「律法と預言」と呼ぶのは、古い契約を示す律法と、救い主を与えるという神のみこころが、おもな内容だからです。

一方、新約聖書は、キリスト信仰の正典である聖書（旧新約聖書六十六巻）の第二部と言えるでしょう。「信仰と生活の誤りのない規範として、権威あるものとされた文書」が一つにまとめられたものです。分量は、第一部である旧約聖書のほぼ三分の一です。原本はすでに失われており、写本だけが残っています。写本の数は、断片も含め

て約四千五百に上ると言われています。

新約聖書の中心主題は「罪の赦しによる救い」であり、それは、神と人の間の唯一の仲介者であるイエス・キリストによるものです。「新しい契約」とは、古い契約（神の律法を守ることによつて救われる）に対して、「救い主を信じるだけで救われる」というものです。この福音、この恵みの契約は全人類に対し与えられたものです。

古い契約の下では救いを得ることができない人類のために、神は、ご自分のひとり子イエス・キリストを世に遣わし、御子の十字架の血による贖い、身代わりの死による救いの道を備えてくださりました。そして、それを信じるだけで救われるという恵みの契約を全人類と結ばれたのです。

「聖書を買い求めて少しづつ読んでいますが、書いてあることは、すべて真実なのでしょうか。誤りはないのでしょうか。」

「聖書はすべて、神の靈感によるもので……」(II テモテ三・16)。

「(聖書の)預言は決して人間の意志によつてもたらされたのではなく、聖靈に動かされた人たちが、神からのことばを語つたのだからです」(IIペテロ一・21)。

聖書は、神に起源を持ち、神がお書きになりたいことを聖書記者たちに正確に書き記させたものです。聖書は、その本当の著者が神であると主張しています。神は常に真実な方です。ですから、

聖書に出てくるさまざまな教えはもちろん、自然や歴史に関して記述されている事柄も真実なのです。

ここで、「靈感」ということばの意味について

説明しましょう。世間一般では、「よい思いつき」といった程度の意味で使われていますし、「インスピレーション」も同様です。けれども、聖書に関する場合は、このような世間的な通念を一掃しなければなりません。靈感とは、「聖書がそれぞれの記者たちによつて書かれたとき、誤りなく記されるようにと働いた聖靈の働きである」と言つてよいでしょう。「神の靈感による」ということばは、原語のギリシャ語では「神の息(靈)による」ということであり、「神の息(靈)の創造的産物」という意味です。ですから、このことばは、(しばしば誤解されるように)人間が書いたものに神が息を吹き込むといった意味ではなく、神が息を吹き出されたことによる産物という意味です。

それでは、どうしてこのようなことがあつたのでしょうか。私たちは、神のことについては、神の啓示によらなければなりません。ふつう私たちには、理性によつて物ごとを知ることができると考

2. 聖書への疑問について

えます。しかし、理性だけではどうしても知ることができないことがあります。神のこと、神についてのことはすべてそうです。神がご自分のほうから人間にそれらのことを示されて初めて、私たち人間はそれらを知ることができます。この啓示が客観的なものとしてとどめられるために、神はそれを書物となさったのです。そこで、神の啓示が記されたときに、その啓示が誤りなく記されるように働いてください、いつさいの誤りから守つてくださいのです。

しかし、神の靈感によつて書き記されたのは原本に關することであり、その後の写本（昔は印刷機がなかつたので、筆写されました）や、さまざまな翻訳にまったく誤りがないとは言えません。しかし、全知全能の神がご自分のみことばを純粹に保存してこられたということを堅く信じ、現在用いられている聖書を、眞実のことばとして安心して用いることができるのです。

聖書はすべて人間の手によつて書かれたのに、神のことばであると、どうしてわかるのですか。

聖書は確かに人の手によつて書かれましたが、書くように促し、その内容とことばを与えてくださつたのは神です。このように、神がすべてを導いていかれたので、神のことばと言えるのです。「聖書はすべて、神の靈感によるもの」です(Ⅱテモテ三・16)。

「預言(神の靈感を受けた人「預言者」)が語ることば」は決して人間の意志によつてもたらされたのではなく、聖靈に動かされた人たちが、神からのことばを語つたのだからです」(Ⅱペテロ一・21)。

これらの聖句のとおり、聖書は神に起源を持つています。神がお書きになりたいことを、聖別された人々、すなわち聖書記者に正確に書きとどめさせたものなのです。

聖書が神の啓示の書であり、權威ある神のこと

ばであるという証拠を三つの面から述べてみましょう。それは、外的証拠(歴史的証拠)と内的証拠と実驗的証拠です。

まず外的証拠。つまり歴史的証拠ですが、聖書はその起源において、他の一般の書物とはまったく違つた成り立ちを持つています。旧約聖書三十九巻、新約聖書二十七巻、合わせて六十六巻という膨大な書物で、しかも、約四十人の聖書記者によって記されたものです。それぞれの執筆年代は約千六百年も隔たつており、彼らの生まれも生活環境もすべて異なっています。それにもかかわらず、彼らが書いた六十六巻の書物は、全体的に調和と統一が取れているのです。これは、ただひとりの著者であられる神ご自身が、聖書記者を動かして書かせた証拠と言えます。また、これだけ古い歴史を持つ聖書が、多くの時代に多くの人々によつて迫害され、攻撃されてきたにもかかわらず、それに耐え、今日に至るまで純粹に保存されてきたのです。このことは、聖書が神の書物

2. 聖書への疑問について

である何よりの証拠と言えるでしょう。

次に内的証拠について述べましょう。聖書自身が、神によって書かれた書物であることを明瞭に証ししています。その内容が他に類のない天的性質を帶びていること、主題においても、教理においても、あらゆる点において統一が取れ、完全で

あること。何よりも、主イエス・キリストがそのことを主張しておられること（マタイ五・17、18 参照）。また、主の弟子たちも、それについて証言しています（Ⅱテモテ三・16、Ⅱペテロ一・21 前掲）。そのうえ、預言の成就という驚くべき証拠があるのです。特に、救い主に関する預言について言えば、その誕生（処女降誕）、出生場所、十字架上の御死、葬り、復活など、驚くべき正確さで成就しました。

最後に、実験的証拠について説明します。聖書の中に記されていることを、自分自身に適用してみるとことによってわかります。つまり、自分自身に当てはめることです。そうするとき、聖書のこ

とばにどれほど力があるかということを体験し、そのことは、自分のうちに確信をつくり出すのです。聖霊が私たちの心の中に、みことばとともに働いて、確信を与えてくださるのであります。

聖書が神の靈感によつて書かれたとは、どういうことですか。

聖書は、紀元前千五百年ごろから約千六百年にわたつて、三十六人以上の記者たちがそれぞれの書物を書き記したもので、記者たちの身分や職業はさまざまで、執筆年代にも大きな隔たりがありますが、その内容には驚くほど調和と統一があります。なぜなら、記者たちの心の背後に、(すべての者を真理に導く)神の聖靈の偉大な働きがあつたからです。彼らは神の直接のご支配の下に書き記したので、その原語の一つひとつのことばが神に導かれて書き記されたのです。つまり、聖書は、その記者たちがそれぞれの書物を書き記した時に、神が十分かつ完全な靈感の働きによつて導かれたものなので、人間の救いを啓示したものとしてまったく誤りがなく、神の權威を持った書物なのです。

ふつう人間は、理性や経験によって物ごとを知ることができます。しかし、理性や経験だけでは知ることができない神や神についてのいつきいのことは、神が超自然的な方法によって伝達される行為、すなわち啓示によらなければなりません。つまり、神が、ご自分のほうから人間に向かってそれらのことを示されて初めて、私たち人間はそれらを知ることができるのです。しかし、事実、神は啓示されたのです。その啓示は、単なる事実だけでなく、その意味も示すものでした。

こうした神の啓示には、それを受ける人間が正しく理解できるよう配慮がなされていたと思します。しかし、人間がそれを正しく受けたとしても、誤謬と忘却に陥りやすい人間の知識と記憶力に任されていたら、正しい神の啓示も、おそらく時間の経過とともにゆがめられたものとなつてしまつたことでしょう。すべてを見通しておられる神は、ご自分の啓示が客観的なものとしてとどめ

2. 聖書への疑問について

られるために、それを書物となさつたのです。それで神は、ご自分の啓示が記された時に、その啓示が誤りなく記されるように働かれ、いつさいの誤りから守られたのです。それが聖書です。

それゆえ、聖書六十六巻（旧約三十九巻、新約二十七巻）は、最初から神のみこころの中につたものです。神が必要に応じて人（旧約時代の預言者や新約時代の使徒たち）を選んで書かせたものであつて、人間が書いたものを適当に集めたものではないのです。靈感とは、神の啓示が記されたとき、それが誤りなく文書としてとどめられるために、働く神の働き、すなわち聖靈の働きであると言えるでしょう。

終わりに、靈感に関する聖書のみことばを記して説明してみたいと思います。

「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です」（Ⅱテモテ三・16）。

聖書が權威を持つてゐるのは、それが誤りのな

い啓示の記録だからです。言い換えれば、聖書は神のことばだということです。これは、旧約聖書の初めから新約聖書の終わりまで、すべて神が語られたことばかりだという意味ではありません。聖書の中には、人間が語つたことばや御使い（天使）が語つたことばもあり、惡魔が語つたことばさえあります。それがどうして神のことばと言えるのでしょうか。それらを含めて、神はご自分の意思を、また、ご自分の立場からの見解を人間に啓示されたからです。

ぜひ聖書をお読みくださるよう心からお勧めします。

聖書にある啓示について説明してください。

国語辞典で調べると、だいたい次のように書いてあります。「①明らかに表し示すこと。②（キリスト教で）人の力では知り得ない真理を、神が人に教え示すこと」。

さらに聖書的観点に立つて説明しましよう。人間が神を知ろうとするとき、まず覚えておかなければならぬことは、人間の側から理性的に求めているても、神を知ることはできないということです。神を知るには、神の側からの啓示による以外にはありません。つまり、神の自己啓示です。

その啓示は二つに分けて考えることができます。それは一般啓示（自然啓示）と特別啓示（超自然啓示）です。

一般啓示とは、具体的には、「自然界」や「人間の良心」のうちに神が啓示されているということです。これは、聖書自身が教えているように、だ

れの目にも明らかであつて、言い訳などできないところから（ローマ一・19、20、二・14、15参照）、一般啓示と言います。この一般啓示は、ことばという伝達手段によつて示された特別啓示とは違つて、自然の種々さまざまな事実や力や法則、および人間の良心によつて示されています。

自然界を見るとき、ただ美しいというだけではなく、そこには驚くべき秩序があることを知ります。その秩序は自然法則というかたちで捉えることもできます。秩序ばかりでなく、その精緻な仕組みにも驚くばかりです。自然界を眺めるとき、そこには神の御手のわざがあることに気づきます。つまり、神が自然界にご自身を現しておられるのです（詩篇一九・1、ローマ一・19、20参照）。しかし、神を知ることができるのは、自然界をとおしてだけではありません。私たちが持つていい良心も神を証ししています。自然界が単に神の壮麗さ、雄大さを表しているのに対し、良心は神の道徳的性格を示しています。私たちは、何が

善であり、何が悪であるかということを生まれながらにして知っています。他人の物を盗むことが悪であり、人を殺すことが罪であることは、だれに教えられなくとも知っています。それが良心の働きによることは言うまでもありません。

このように、神は自然界や人間の良心によつて、さらには世界の歴史において啓示しておられるので、それをとおして、だれでも神を知ることができます。永遠の神の力と神性をそこに見ることができますし（ローマ一・19、20）、生まれながらの人間であつても、律法（旧約聖書の教えや戒め）が命じ正在理解できるのです（同二・14）。

一般啓示には、罪に陥つた人間の救いのために必要なものは示されていません。一般啓示は、神の美しい創造のみわざに依存しているわけです。が、それは、人間を罪から救うために必要な啓示ではありません。天地万物の創造主である神の御手によって示された自然啓示は、そのすべてが消

し去られたわけではありませんが、人類の罪の影響で不明瞭なものになつてしましました。人類が罪に陥つてからは、特別啓示が必要になつてきました。旧約聖書を調べると、神が自己顕現というかたちでご自分を啓示されました。たとえば、火の柱や雲の柱によつて、ご自分がそこにおられるということを示されました。この神の特別啓示は新約聖書に十分明らかに示されています。ですから、旧新約聖書というみことばによる啓示、こそ特別啓示の重要な中心であると言えます。

マタイの福音書を読み始めましたが、無味乾燥に感じるこの系図には、どんな意味があるのですか。

新約聖書の最初から読み始めた人の大半は、意味のわからない人名が長々と書いてあるのを見て、つまらない書物であると思い、聖書を閉じてしまいます。けれども、この系図には、深い意味や真理が含まれているのです。紙面の許容範囲でお答えいたします。

この福音書はユダヤ人を読者として書かれたもので、したがって、ユダヤ民族の先祖であるアブラハムを出発点としていることは当然のことでしょう。このアブラハムがどのような人物であったかは、創世記一二章一一四節、一七章一一八節、一八章一八節、二二章一五一一八節を参照してください。彼の厚い信仰は神に喜ばれ、神は、彼の子孫によつて全世界を祝福するという約束を与えてくださいました。イエス・キリストこそ、その

約束の成就であり、ユダヤ人たちが待ち望んだメシヤでした。

ダビデはイスラエルの歴史上最も偉大な王であり、その子孫によつて、王座が永遠に確立されると神は約束されました(IIサムエル七・12-16)。その子孫とはイエス・キリストのことです。

なお、注目すべきことがあります。それは、アブラハムからソロモンに至るまでの系図の中に女性の名前が記されていることです。三節の「タマル」、五節の「ラハブ」、「ルツ」、六節の「ウリヤの妻(バテシエバのこと)」です。この四人については、創世記三八章をはじめ、旧約聖書の該当箇所を詳しく調べることによつて、まことに恥ずかしい、また忌まわしい事件の当事者であつたことがわかりります。

この福音書の記者マタイ、そして、彼を導かれた神は、この系図によつても福音を説き明かされたのです。罪人を先祖に持たれたイエス・キリストは、罪人の友となることを少しも恥とは思わ

2. 聖書への疑問について

れずに、その罪を赦し、罪から救つてくださる真の救い主です。聖書は事実をすべてありのままに告げており、この系図もそのことを物語つているのです。この系図には、イスラエルの族長（アブラハムたち）をはじめ、異邦人、遊女（ラハブ）、善人、悪人、知恵のある人、有名な人、有名でない人などの名前が記されていますが、それぞれが関連を持つています。「人の子」であるイエス・キリストが、すべての人の代表となるために、あらゆる階級の人々が含まれていることを物語つているようです。

終わりに次のことを説明しておきましょ。図示してみるとよくわかりますが、この系図は、五人の人物の名を省くことによって、十四代ずつ三つに区分されています。マタイは、どうしてこのように記述したのでしょうか。聖書では、七日で一週間となるといったように、「七」という数が「完全」を意味する象徴的な数として用いられています。「十四」は七の二倍であり、まったく完全とい

うこと意味するのでしょうか。つまり、マタイは、アブラハムからダビデ王まで一つの完全な期間、ダビデ王からバビロンに移された時までが、これまた完全な一期間であり、バビロンへ移された時からキリストの降誕までが、もう一つの完結した期間であるということを示したかったのでしょうか。

3

キリスト信仰への疑問について

キリスト教、ユダヤ教、イスラム教は旧約聖書でつながっていると聞いたことがあります、説明してください。

ユダヤ教は、ユダヤ人のバビロン捕囚（紀元前五八七年ごろ）後、発達した民族宗教です。このユダヤ教の聖典には律法（ヘブル語でトーラーと言い、旧約聖書に当たる）とタルムード（口伝伝承）があります。この律法について詳しく説明すると、旧約聖書の最初の五巻である創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記（モーセの五書とも言う）を彼らは律法と言っています。このほかに預言書（前預言書四冊、後預言書四冊）、諸書（詩書三冊、卷物五冊、歴史書三冊、計十一冊）などと分類され、二十四巻ですが、一般に広く読まれている旧約聖書は三十九巻あり、配列と数え方が違うだけで、内容はまったく変わっていません。配列と数え方が今のようになったのは、七十

人訳聖書（ヘブル語をギリシャ語に訳したもの）以来の伝統です。

ところで、ユダヤ教徒は律法を最も重んじています。ユダヤ教には「旧約」ということばはありません。言うまでもなく、旧約とは、新約（新しい契約）という考え方があつて初めて成り立つ概念ですから、「新約」を認めないユダヤ教に旧約がないのは当然です。彼らは正式には旧約聖書を「律法・預言書・諸書」と呼び、ヘブル語聖書も、「背」の部分にこの三つの単語が記されているだけ、旧約ということばはありません。しかし、通常、彼らはこの三つの単語を口にせず、総称的に「律法」と呼び、これが「旧約」を意味することばになっています。

次に、イスラム教について説明します。イスラム教の神はアラー（またはアッラー）と言い、唯一であり、全知全能であり、天地万物いっさいのものは、この神によつて創造され、その支配下にあります。イスラム教では六つの基本的

3. キリスト信仰への疑問について

信仰箇条（六信とも言う）があり、その三番目に、「神の諸啓典を信じること、特に、最も完成した『コーグラン』を信じること」とあり、この諸啓典とされるものの中に、モーセの五書（律法の書）、詩篇等があります。これらが旧約聖書と関連があるわけです。ところで、イスラム教徒は、「コーグランは、天使（ガブリエル）を通じて預言者（マホメット）に啓示された神（アラー）のことばを集めたものである」と、最高の権威を認めています。

最後にキリスト教（正しくはキリスト信仰）ですが、これは、ご承知のとおり、正典として旧約三十九巻、新約二十七巻、計六十六巻あります。キリストの教えを正しく理解して純粹な信仰を持つためには、旧約、新約をとおして聖書を読み、中心的主題として示されているイエス・キリストについて知り、その御名を信じ受け入れなければなりません。ユダヤ教徒やイスラム教徒は、敬虔な心を持って祈禱や祭事を実行していますが、たましいの救い、永遠のいのちを得ることはできません。

せん。この二つのものは、イエスの御名を信じることによつてのみ与えられるからです。

「神は、実に、そのひとり子（キリスト）をお与えになつたほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」（ヨハネ三・16）。

「イエスは……言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません』」（同一四・6）。

私は法華経の信者です。聖書の話を聞くと、法華経の教えと同じように思うのですが、どう違うのですか。

「お經も聖書も、共にすばらしい人生の指針であり、どちらも真理であり、どちらを信じても同じことだ」と思つておられる方も多いようですが、紙面の許容範囲で説明したいと思います。

法華経の内容は多岐にわたつており、一言でその教えを尽くそうとするなら、「すべてに仏性は宿る」、「諸法（現象）の真実を悟る」と言える」と仏教学者の松原泰道氏は「法華経入門」に記しています。彼は、仏性とは、「人間の心の奥底に埋みこめられている、純粹にして真実な人間性である」と説明しています。つまり、法華経は、限りなき人間贊美の思想が根本となっているのです。

しかし、人間を贊美する事が、はたしてできるでしょうか。神の靈感によつて書かれた聖書は、人間はみな、ひとり残らず、生まれながらに

して罪人であると教えて います。人類の祖先であるアダムは、彼個人として罪を犯したのではなく、彼から始まるすべての人間を代表して罪を犯してしまつたからです。聖書には次のように記されています。「そういうわけで、ちょうどひとりの人（アダム）によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がつたのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです」（ローマ五・12）。これを原罪と言います。イエスも弟子たちに次のように言われました。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人々を汚すのです」（マルコ七・20—23）。

人の心の中には悪の要素がいっぱい詰まつてお り、この心が原因となつて、混乱や悲惨な事件や実際的犯罪が起ころうのです。人間社会の現実を見

3. キリスト信仰への疑問について

つめるとき、聖書の主張の正しさを認めないわけにはいかないでしよう。

仏教の輪廻の思想によると、生命は宇宙とともにあって、死んでは生まれ、生まれては死に至ると言います。聖書は、一つのたましいは一つのたましいとして、創造主（神）の前に永遠に責任が問われると教えています。仏教（お経）とキリストの教え（聖書）では、生命観がまったく違うのです。

終わりに、人類の最大にして最後の敵である死について、そして、その後のさばきと救いについて聖書だけが教えていることについて説明します。人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている（ヘブル九・27）。なぜ人は死ぬのでしょうか。仏教は因果律を唱えます。聖書はその原因がアダムの反逆にあると教えています。彼が神にそむき、それによって神（生命の創造主）との関係が絶えてしまい、その結果、人間に死がもたらされた、と言うのです。人は死

によって終わるのではありません。人間はいつか必ず死にますが、そのあとに、二つの道があります。それは、永遠の祝福か、永遠の刑罰です。永遠の祝福とは、永遠に神との交わりにあずかることであり、主イエス・キリストを信じる者に賜物として与えられる神のいのちを表します。一方、永遠の刑罰によって、人間は永遠に神から離れ、うじが尽きず、火が消えることがない地獄で永遠を過ごすことになります（マルコ九・48 参照）。人間には自らを、罪とその窮状と永遠の滅びから救い出す力はありません。神が介入してくださらないかぎり、人間は永遠に滅びるのです。

キリストは私たちの罪のために死なれました。墓に葬られましたが、三日目によみがえられ、永遠に生きておられる方として、今も天においてとりなしをしておられます。キリストの「十字架」と「復活」こそ真の福音なのです。

私は若いころから仏教やキリスト教に関心を持つていますが、人間の救いということについては結局同じように思えるのですが、違うとすればどう違うのでしょうか。

世界の二大宗教とも言われる仏教とキリスト教に、若いころから関心を持つておられるとのこと、「人の人たる所以は、宗教心を持つていることにある」と言つても過言ではないでしよう。平穀無事なときは無神論を主張していたのに、思ぬ出来事に見舞われたり、自然の脅威にさらされたりしたときに、神仏を呼び求めたという人はたくさんいます。

さて、あなたが持つておられるような考え方は、「別け登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな」という歌に表されている日本人の宗教観、すなわち汎神論（万物が神であるという考え方）か多神論（多くの神の存在を認める考え方）

なのです。ところが、このような宗教觀による救いと、キリストの福音による救いはまったく違うものです。仏教の教えはいろいろあります、端的に言うと、むさぼり、怒り、愚痴、そしり、無慈悲といった煩惱を、座禅や難行苦行をしたり、念佛を唱えたりすることによつて除き去り、自己の中に本来備え持つてある仮性を顯現し、仏となる道、すなわち悟りを開いて仏陀になることを目的としています。仏教でいう罪とは、「我」にとらわれる愛欲（我執我欲）を指しています。ゆえに、仏教でいう救いとは、無我の境に徹して初めて現れる眞実の自己に生きることです。この境地を涅槃寂靜と言い、仏教の究極の目的を表します。つまり、このことが体得されれば、それで仏となることができるというわけです。仏教の立場から言えば、人間も絶対者になることができるということになるのです。

ところで、この悟りは困難なので、後世、大乗佛教の中において、聖道門に対しても淨土門が開

3. キリスト信仰への疑問について

かれました。聖道門が自力、難行道であるのに対して、淨土門は他力、易行道です。この淨土門に属する宗教は、淨土宗、淨土真宗などがあります。これは、簡単に言えば、衆生（すべての生物）をもれなく救おうという阿弥陀仏の本願（誓願）を信じ、その名を唱え念佛する（南無阿弥陀仏）ことによって、阿弥陀仏がいる淨土に行くことができるという信仰に基づくため、しばしば、キリスト信仰と比較されてきました。確かにこの教えには、自力の聖道門に比較して良いところもありますが、この阿弥陀仏は歴史上の実在者ではありません。弥陀の本願というのも、美しい詩的表現だけであって、衆生を救うための方便にすぎません。その他、大日如来、觀音、菩薩、地藏なども、すべて架空の宗教的産物にすぎないのです。

クリスチヤンの信仰対象であるキリストは、実在者なので、同じく信仰によって救われると言つても、両者はまったく異なるわけです。キリスト教でいう救い、正しく言えばキリストの福音による救いとは「罪からの解放」です。根本的罪とは、造り主なる神を離れて生きること、すなわち、神に対する不信仰を言うのです。創造主なる神を信頼しないで、自らを信頼し、あるいは自然（太陽や月）や、人間が作った像を神として礼拝することは偶像礼拝であり、まことの神に対して最大の罪を犯していることになるのです。その結果は永遠の死です。聖書には、すべての人は罪を犯したので罪人であると記されています。それゆえ、どんなに修業しても、努力しても、自分の力では罪から救われないのでです。ただ完全にして聖なるまことの神のみが、人を罪と永遠の死、すなわち滅びから救い、永遠のいのちを与えることができるのです。この神は、私たち罪人のために、唯一の救いの道を備えてくださいました。それは、ひとり子なるイエス・キリストの十字架の血による贖いと、キリストの復活を信じる信仰による救いであります。行いによるのではありません。このことを信じ受け入れて救いにあずかられますように。

クリスチャンでなければ救われないのですか。

現世で授けられる「ご利益」を救いと教える宗教はたくさんあります。救いということばの宗教的な意味を、人間の内面的な観点から考えますと、キリスト信仰においてだけでなく、仏教をはじめ、さまざまな宗教でも用いられています。けれども、聖書の用い方と他の宗教の使い方とは、まったく違っています。たとえば、仏教などで「悟りを開く」とか「安心立命の境地に入る」とかいふたものと、聖書が言う救いとは、決して同じものではありません。聖書に記されている救いとは、罪からの解放なのです。

聖書に次のように記されています。

「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。……ですから、それを行っているのは、もはや私では

なく、私のうちに住みついている罪なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私は善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することができないからです。……私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか」(ローマ七・15-24)。

神に対する反逆の罪から私たちを解放するのには、神の御子イエス・キリスト以外にはありません。聖書は、はつきりそのことを告げています。「この方以外には、だれによつても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです」(使徒四・12)。

また、イエスは謙遜の徳を完全に身につけておられた真実なお方でしたが、そのイエスが次のよう言われたのです。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなの

です。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」(ヨハネ一四・6)。

このみことばを信じるとき、イエス・キリスト以外に真の救い主はいないことがおわかりいただけるでしょう。ですから、イエス・キリストを信じない者が救われるのは当然のことです。罪が赦さされていないからです。罪人であるかぎり、どんな人でも、死んだ後、神の正しいさばきを受け滅んでしまうのです。

さて、クリスチヤンとは信仰によつてキリストに結びつけられた者のことです。キリストは私たちの罪を背負つて十字架上で死なれました。私たちが信仰によつてキリストに結びつけられると、私たちの古い人は、キリストとともに十字架で死んでしまうのです。また、キリストは死者の中から復活されましたから、信仰によつて、私たちにも新しいいのちが与えられるのです。ですから、キリストとともに古い人に対して死んで、キリスト

トとともに新しい人として生きているわけです。古い人とは、生まれながらの古い人間性のことです。それは自己中心的であり、「人を欺く情欲に従つた」生き方となります。新しい人とは、救われて、キリストにある新しい生き方をしている自己を意味します。ですから、クリスチヤンとは、みなこの新しい人として生まれ変わった人のことです。これは決して我田引水的な考え方や、独善的思想で説明しているのではありません。罪の赦し、罪の力の解決こそ真の救いです。しかも、この救いは人間の行いによるのではなく、イエス・キリストの十字架上における犠牲のみわざのゆえであることを知つて、キリストを信じ受け入れ救われますように。

純粹で汚れのない人でないとクリスチャンになれませんか。

世間では、「クリスチャンは酒を飲まず、タバコを吸わず、そのうえ低俗番組も見なければ、ギャンブルもしない、品行方正で誠実な人」というイメージが定着しているようです。

さて、ご質問の中に「純粹で汚れのない人」とあります。聖書によれば、そのような人はひとりもいません。聖書は、人間の心の中に宿つている罪や汚れを徹底的に明らかにしています。そして、完全に聖い方である神の前では、すべての人が罪を犯していると告げています。

「義人はいない。ひとりもいない。……すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となつた」。

「すべての人は、罪を犯した」(ローマ三・10、12、23)。

イエスは次のように言われました。

「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え方、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです」(マルコ七・20-23)。

悪い考えがすべての悪い行いの源であり、あと十二は悪のリストです。人間は、外側は美しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。まず自らを省み、そして周囲の人々を観察すれば、イエスが言われたとおりであることがおわかりになるでしょう。イエスは神の御子ですから、罪は犯されませんでした。聖書は心のX線のようなものですから、みことばの光に照らして心の中を見れば、いかに罪深く、汚れ果てているかがわかります。生まれながらの罪人なのです。だれに教えられなくとも、赤ん坊は自己中心的で、わがままです。それがそのまま成長していくとき、他人を

3. キリスト信仰への疑問について

害し、自分も傷つける者となるのです。詩篇五一篇五節には、「ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました」と記されています。これは、すべての人が、母の胎内にいる時から、その本質において汚れているということを意味しています。聖なる、そして義なる神の前に、純粹で汚れのない人など、ひとりもいないのです。

こんな罪深い者のために、愛なる神は、そのひとり子（キリスト）を、私たちと同じ人間の姿で地上にお遣わしになりました。御子は、私たち罪人の身代わりとして、十字架の上で血を流し、犠牲の死を遂げられたのです。キリストの死がなかつたならば、私たちは、神の公正なさばきを受けて滅びるほかありませんでした。

イエスは次のように言われました。

「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるため來たのです」（ルカ五・32）。

「自分が罪深い者であることをお認めになりますように。そして、へりくだつた心でキリストを信じ受け入れ、救いにあずかられますように。」

「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです」（I.ペテロ二一・22-24）。

問21

キリスト教に関心を持っています。キリスト教信仰かキリスト信仰か、どちらが正しい言い方ですか。

大変ユニークな質問ですが、これは信仰上大切なことですから、紙面の範囲でわかりやすく説明したいと思います。そこで、聖書によつて説明することをあえて後回しにして、傍系の觀点から説明します。世間では普通、「△△教」を信じている、と言つてゐることはご存じのとおりです。伝統的には仏教が多いと思うので、これを例として説明します。

仏教学者として有名な鈴木大拙氏（故人）は、「仏教信者は、仏陀（釈迦）を信仰の対象としているのではない」と、その著書で次のように述べています。

「キリスト教ではキリストを中心的としているのに反し、仏教では必ずしも、仏陀を信仰の対象とはしないで、仏陀自身も説いているように、仏

陀は真諦（平等無差別を説く、仏教の最高原理）の発見者であつて、発明者ではない。真諦は、歴史的仏陀の存亡いかんにかかわらず、無限の昔からあつて、無限の未来に至るものである。仏陀は、たまたま非凡の宗教的天才であつて、これを觀取し、これをほかの同胞に伝えたのにすぎない。ゆえに仏教では、仏陀を除いても、その教理は成立し、發達して行くであろう。しかし、キリストを除くことはすなわち、その教えの本体を除くことになるわけで、キリスト教会は、その立脚地を失つてしまふことになる。ゆえに、キリスト教では、全力を尽くしてキリストを宣べ伝えている。換言すれば、仏陀は仏教の開祖であり、キリストはキリスト教の本尊（中心的人物のたとえとしての意味）ともいるべき者である。キリストはその信仰の目當である。キリストがなかつたら、何もないものである」。

クリスチヤンでない鈴木大拙氏のことばは、宗教と信仰の違いを、その本質的なものに触

れて説明しているように思います。一般に、キリスト教、仏教、イスラム教などと並べて言つていますが、これは宗教という概念的な言い方で、信仰とは異なるものです。つまり、宗教とは概念的な問題を扱うものであり、信仰は主観的な問題を扱うものなのです。たとえば、果物という概念があるとして、この果物という捉え方を宗教にたとえた場合、信仰とはその果物の中のりんごであり、いちごであるといった、より具体的なものです。

さて、聖書から説明します。まず、イエス・キリストの言われたみことばを考えてみましよう。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(ヨハネ一四・6)。

「あなたがたは……わたしを信じなさい」(同一四・1)。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい」(マタイ一一・28)。

このみことばの中の「わたし」とは、キリスト

ご自身のことです。キリストは、ご自身が道であり、真理であり、いのちであると、また、ご自分を感じなさい、ご自分のところに来なさい、とおつしやっています。

キリストは聖書に記されているとおりに、私たち人間の罪のために血を流して、身代わりに死んでください、墓に葬られましたが、三日目によみがえられました。そして、今も生きておられるお方として天の神の右の座におられ、信者のために、また、すべての人のために祈つておられます。したがつて、キリスト教信仰ではなくて、「キリスト信仰」が正しい言い方です。

聖書と科学は矛盾していないのでしょうか。

従来、聖書と科学の間には、多くの矛盾があると考えられていました。進化論はこれらの「矛盾」の代表的なものと言つてよいでしょう。進化論は生命の発生を偶然と考え、創造論（神が全宇宙を創造したとする説。この説を科学的に証明しようと/orする学問を創造科学と言う）はそれを創造主の英知によるものと考へています。

進化論は学校でも教えられているので、ほとんどの人が、生命は自然に発生し、長い時間をかけて進化したと考えています。生命的起源については昔からいろいろな説があり、明確な一つの答えが出たわけではありませんが、自然発生説が何となく受け入れられているのです。しかし、その道の専門家たちが、自分が提唱する理論を立証するために種々の実験を試みた結果、次々に新しい疑問に直面しています。進化論は確立した真理のよ

うに見えますが、実は、内部的には、学説上の微妙で複雑な諸要因にからんで、先鋭な諸派の対立があると言われています。

これに対しても、創造論を根拠とする聖書には、地上のあらゆる生物は、神が初めに「その種類にしたがつて」創造されたと記されています。種とは生物を分類するうえでの基礎単位のことです。創造論では、生物の種は、一つの原生生物から進化して生じたものではなく、創造主が初めから種類にしたがつて造られたと説明されています。新しい生物を造り出す実験も試みられてきましたが、その結果わかつたことは、同じ仲間（種）の間で変わった形態のものは生まれても、まつたく別の種は生まれないということです。

次に天文学について考えてみると、旧約聖書のヨブ記の三八章には、自然界の現象がいくつも示されており、それらを支配なさる創造者、すなわち、まことの神の偉大さが記されます。特に三一節と三二節には、近代天文学によつて天体

3. キリスト信仰への疑問について

望遠鏡で初めて発見できた星座のことが記されていますが、約四千年も前に書かれたヨブ記の著者が、どうしてこのことを知っていたのでしょうか。「聖書は確かに神の靈感によつて書かれた書物であり、神のことばと科学的事実は、時代を超えて一致するのだ」と言わざるを得ません。

最後に奇跡について考えてみましょう。聖書には確かに多くの奇跡が記されています。たいていの人々はこれを読んで、聖書と科学は矛盾しているのではないかと考えます。奇跡は超自然的と思われる不思議な出来事ですが、奇跡を信じないという人が案外非科学的で、つまらない民間のまじないなどを信じたりしていることがあります。そのくせ、この宇宙の神秘と奇跡の驚異には盲目なのです。その点では、科学者のほうが宇宙の驚異をよく知っています。なぜ地球には空気があるのでしょうか。渡り鳥はある長い距離をどうやって渡るのでしようか。地球はなぜ二十三度半傾いて四季を生じるのでしようか。鳥はだれに教えられて

巣を作るのでしょうか。ちよつと考えただけでも、何と奇跡に満ちている世界ではないでしょうか。科学者は法則を探求し、宇宙の規則を主張しますが、法則自体が一つの奇跡であることを知っています。神が全知全能のお方であることを、正しく知るように努めていかれるならば、自然に、奇跡の正しい理解に導かれるでしょう。まことの神を信じましょう。

聖書に書かれている奇跡物語は本当にあつたことですか。非科学的なことに思われるのですが……。

聖書に書かれている奇跡は神のわざに依拠するものであり、科学に反するものではなく、むしろ、科学を超えた、超自然的なものというべきものであります。いかに科学が発達し、自然界に対する知識が深まつても、神秘というものはなくなるものではありません。むしろ、知識が深まれば深まるほど、自然界に対する驚異の念も深まつていくものです。聖書が語っている神は生ける神であり、みこころにかなつたことであれば、何事でも成し得る神ですから、自然の法則に制限されることはありません。自然の法則そのものが、神によつて造られたものですから、神はご自分の意思を行うために、新しい法則も造り出すことができるお方です。

身近な例で説明してみましよう。時計の長針

は一時間に一回転し、短針は一日に二回転します。時計がこのような法則に従つて動くのは、言うまでもなく、時計師がそう作ったからです。宇宙にも、時計のような規則正しい動きが見られます。たとえば、地球は太陽の周りを一日一回転しながら一年で一回転します。そのほか、いろいろな自然の法則が見られます。これらは、その背後にそれを造つたお方がおられることがあります。ちょうど時計の法則の背後に時計師がいるようになります。そして、時計師は時計の針を思いのままに進めたり、遅らせたり、止めたりすることもできます。るように、神は、自然の法則に従う動きを一時的に進ませたり、止めたりすることも、また、まったく新たに創造することさえできる全能のお方です。そして、この神の特異な、目に見える行為が奇跡と呼ばれるのです。

ところが、多くの人々は、「聖書は、どこを開いても奇跡だらけだ。こんな物語は、非現実的で、とても信じられない」と言います。「聖書は、ど

3. キリスト信仰への疑問について

を開いても奇跡だらけだ」ということばは、眞実ではありません。聖書に記された奇跡が起こったとされる時代を調べると、驚くべきことがわかります。奇跡は、いつの時代にも起こつたのではなく、五つの時代に集中して起こりました。詳細は紙面の関係で割愛します。

第一の時代 モーセとヨシュアの時代

(紀元前一四四〇—一四〇〇年ごろ)

第二の時代 預言者エリヤとエリシヤの時代

(紀元前八五〇年ごろ)

第三の時代 ユダ(南王国)の王ヒゼキヤの時代

(紀元前七〇〇年ごろ)

第四の時代 ダニエルの時代

(紀元前五五〇年ごろ)

第五の時代 イエスとその弟子たちの時代

(紀元三〇〇年ごろ)

ところで、他の時代にも奇跡的なことが起こつたことが記されていますが、この五つの時代に起つた奇跡と比べると、小さなものです。では、

奇跡がなされたこれらの時代は、どんな時代だったのでしょうか。特別な時代でした。すなわち、時代の転換期か、危機の時代かのいずれかでした。神はさまざまな奇跡をとおして、人間に對する深い愛とあわれみを示されたのです。ですから、人間の理解をはるかに超える奇跡について、私たちは科学をもつて説明し、納得することはできません。奇跡はあくまでも超自然的なものとして信じ、受け入れなければならぬのです。

聖書に出てくる奇跡を、もし目の前で見せられたら、私も神を信じようと思うのですが……。

奇跡は、一般的には、自然法則を超えた不思議な出来事や現象と考えられています。神の不思議なみわざを表現するものとして、聖書には奇跡の記事がいくつも記されています。

さて、これらの奇跡はそれぞれ目的があつて行われたものです。まず、旧約時代については、モーセの次のことばによつてその目的がわかるでしょう。

「あなたがたの神、主が、エジプトにおいてあなた目の前で、あなたがたのためになさつたように、試みと、しるしと、不思議と、戦いと、力強い御手と、伸べられた腕と、恐ろしい力とをもつて、一つの国民を他の国民の中から取つて、あえてご自身のものとされた神があつたであろうか。あなたにこのことが示されたのは、主だけが神であつて、ほかには神はないことを、あなたが知るためであつた」(申命記四・34、35)。

このように、奇跡は神の民のためになされたものであり、神の救いの啓示(神が真理を示されること)として行われたものです。

新約時代の奇跡の大半は主イエスご自身がなされたものですが、使徒たちによって行われたものも記されています。新約の奇跡の目的は次のように記されています。

「この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行われた。しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によつていのちを得るためにある」(ヨハネ二〇・30、31)。

イエスご自身が行われた多くの奇跡はみな、自分が救い主であることを立証するためのわざとして行われたものです。個人的栄誉のために行わ

3. キリスト信仰への疑問について

れたものは一つもありません。主イエスは多くの奇跡によつて、ご自分が自然界に対して、病気に対する対して、罪に対する対して、さらに対しても支配権を持つておられることを示されました。

新約聖書が完成している現在は、神の啓示を立証するために行われる奇跡は必要ありません。聖書に記されている奇跡と同じような不思議なわざが行われたとしても、それは、聖書に示されている「しるし」としての奇跡ではありません。むしろ、悪霊が超自然的な力をもつて不思議なわざを行っている場合もありますから、注意しなければなりません。ですから、それが、聖書に啓示されているまことの神からのものか、悪霊によるものかを識別しなければなりません。奇跡的な出来事を見聞きして、それをただちに神のみわざとみなすのは非常に危険なことです。今日、新興宗教が次々と起こり、多くの人が惑わされ、それに引きつけられていますから、誘惑に陥らないように注

意してください。

「聖書に出てくる奇跡を、もし目の前で見せられたら……」と言つておられますか、すでにご説明したとおり、聖書が完成している今日では、神が奇跡を行う必要はありません。神の靈感によつて書かれた聖書をとおして、神がご自身を、そしてひとり子なるイエス・キリストを啓示しておられるのです。したがつて、私たちは、へりくだり、碎かれた心をもつて、「救われるためには、何をしなければなりませんか」と問わなければなりません。そのとき、神の御靈みたまは私たちを真理に導き、信仰によるたましいの救いを得させてくださいます。

「信じない者にならないで、信じる者になりなさい。……見ずに信じる者は幸いです」(ヨハネ二〇・27、29)。

4

神
に
つ
い
て

神さまは本当にいるのですか。

これは人生において一番基本的な大事な問題です。紙面の許容範囲でお答えします。

ここで、いるかどうかと問う神は、聖書が教えている神、すなわち、天地の創造主である、生きておられるまことの神という意味でなければなりません。ある学者が言つたように、貨幣のない国、法律のない国はあっても、宗教のない国はありません。どんな未開の地に行つても、何かしら拝むものを持っています。人間以上のものを畏れ、礼拝するという観念は、すべての民族に共通するものです。「何も困ることがない時は、神も仏もない」、「宗教など、用がない」と偉そうに言つてゐる人でも、本当に困り果てた場合には、何かの神に頼る人は少なくありません。「苦しい時の神頼み」と昔から言われていることばがあります。これを宗教心と言います。この宗教心があるという

ことは、すべての人が拝むべき神が存在するという一つの証拠にもなるのです。

人間に目があるのは、光があり、見るべき物があるからで、肺があるのは、空氣があるからであり、赤ちゃんが生まれながら吸う本能があるのは、母親の乳があるからであるように、人類に宗教心というものが先天的にあるのは、人類すべてが帰依すべき神があるからです。しかし、この眞の帰依すべき神を見いだすことができないために（この神を知ることができなくなつたのは、人間の罪のためです）宗教心を満足させようとして、さまざまの神を作り出すようになつたのです。いろいろな物や人を神として拝むのですが、偽物があるからといって、本物を捨ててはなりません。偽物があるというのは、本物があるという証拠です。今まで、神ではないさまざまのものを神として拝んできたために、知識が進んできて、それらのものが神でないことがわかつてきただので、今度は、「神なんか、あるものか」、「聖書の神も、人

間が作り出した観念にすぎない」などと言うのも正しくありません。

最後に、自然界のことを考えてみましょう。私

たちに少しでも研究心があれば、この自然界のありさまを觀察して不思議に思い、その原因を探求する考えが起ころるはずだと思います。天地は無始無終だの、自然にできたのだなどと、簡単に断定することができるでしょうか。天地には秩序があります。毎年、春夏秋冬があり、毎月、新月満月があります。月は二七・三日、正確に言えば、二七日と七時間四三分一四・八八秒（ただし、公転、月齢周期は二九・五日）で地球を一周し、地球は太陽を三六五日と五時間四八分四六・〇八秒で一周しています。一年の間に生じる端数を整理するためには、四年ごとに三六六日の閏年が設けられたのです。天文学の発達により、暦の上できちんとものが言えるのは、要するに、天地日月の運行に整然とした秩序があるからです。それは、そこにある大きな意思が加わっている証拠ではありません

か。

「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」（詩篇一九・1）。

「神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は……被造物によつて知られ、はつきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです」（ローマ一・19、20）。

これらのみことばを深く味わつてください。神の存在を認めることができるでしょう。神の存在を証明してほしいと望むのではなく、心を低くして、その存在を認めるべきなのです。

神が存在しているということが、どうしてわかるので

すか。

神は確かに存在しておられます。神は靈ですから、肉眼では神の御姿を見ることはできませんが、三つの面からわかると思います。自然界を観察することによつて、人間の良心によつて、また、歴史をとおしてです。まず、自然界を観察しますと、そこには、天体が規則正しく運行する大宇宙、地に花咲く樹木や草、顕微鏡下にのぞく微小世界。これらに思いをはせるとき、その整然たる秩序に驚異の念を覚えます。この秩序が保たれているのは、そこに大きな意思が働いている証拠です。すべて偶然だと言えるでしょうか。

「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」(詩篇一九・1)。

「それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。……神の、目に見えない本性、すな

わち神の永遠の力と神性は……被造物によつて知られ、はつきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです」(ローマ一・19、20)。

また、私たちは、自分自身の「良心」によつても神を知ることができます。健全な良心は正邪善惡の別をささやきます。そして、その声に逆らうなら責められます。これは、背後に、さばき主である神の存在を暗示するものではないでしようか。良心とは、新約聖書の原語(ギリシャ語)では、「神とともににある心」という意味である、ということです。正しくないこと、不道徳なことを考えたり、行つたりしたとき、私たちの良心は痛みを感じ、警告を発します。私たちの生活は、この良心によつても規制されています。

「律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行いをする場合は、律法を持たなくとも、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良

心もいつしょになつてあかしし、また、彼らの思
いは互いに責め合つたり、また、弁明し合つたり
しています」(ローマ二・14、15)。

「良心が痛む」という表現は、人間が紛れもなく
道徳的な存在であり、神が良心をとおして私たち
の心の中で証しをしておられることを示すもので
す。

それに、歴史（特に古代史）をとおしても、神を
知ることができます。旧約聖書の中には多くの預
言がなされていますが、それらの預言は、これま
での歴史においても成就されてきました。この歴
史を学ぶことによつても、私たちは、この歴史の
背後にも神がおられ、この神こそが歴史を支配し
ておられるお方であることを知るのです。

以上お答えしたように、神は自然界や人間の良
心や歴史においてご自身を啓示（人知ではわから
ないことを、神があらわし示すこと）しておられ
ますが、人間の堕落はひどく、その罪のゆえに、
まことの神に対する私たちの畏敬の念は薄く、神

を十分に知るには不十分なのです。神が私たちの
救いについてどのようなお方であり、またどのように
うなことをしてくださったかを知るために、神
の靈感によって書かれた聖書によらなければなり
ません。聖書こそ、神を正しく知る唯一の方法な
のです。ある人のことばに、「神の存在は、それ
自体において究極の事柄であり、公理であり、あ
らゆる思想の根拠である」とあります。確かに
そのとおりであると思います。聖書は、「初めに、
神が天と地を創造した」(創世記一・1)と告げて
いるのです。

聖書には神が宇宙を造ったと書いてあるそうですが、その神はだれが造ったのでしょうか。

聖書の一一番最初に次のように記されています。「最初に、神が天と地を創造した」。

この「最初に」は「時の初め」を意味しています。すなわち、宇宙の時間、宇宙の歴史の発端です。「世界は時間の中に創造されたではなく、時間とともに創造されたのである」(アウグスティヌス。三五四—四五〇年。初代キリスト教会最大の哲学者、神学者)から、時間は、この神の天地創造とともに存在し始めたのです。したがって、「この天地を創造した神は、天地創造以前に、だれによつて創造されたのか」とか、「天地創造以前に何があつたのか」といった質問は、まったく無意味であり、質問自体が矛盾しています。

というのは、時間というものは、神が天地を創造した時から始まつたのであり、創造されない時

には、宇宙もなく、時間も場所も何もなかつたからです。そこには、永遠から永遠まで神であられるお方だけが存在しておられたのです。旧約聖書の詩篇九〇篇二節には、「山々が生まれる前から、あなたが地と世界とを生み出す前から、まことに、どこしえからどこしえまであなたは神です」と記されています。これは、詩篇記者が神の靈感によって神の永遠性を歌つたことばです。

このように神は、永遠なるご存在です。永遠とは、変化していく時間の流れの中にはないということです。時間の中にあるものはすべて因果法則に支配され、始まりと終わりがあります。しかし、永遠なる神には始まりも終わりもありません。造られることも生まれることもなければ、死ぬこともあります。神は、この宇宙の変遷とは関係なく、ただ、存在されるのです。この神は唯一の神、すなわち、ただおひとりです(旧約、新約聖書の中に記されている大切な教えです)。

この唯一の神を造ったのはだれかと問うのは、

前記の質問と同じように、実に無意味であり、質問自体が矛盾していることになります。唯一の神を創造した創造主がいるとすれば、もはや、唯一の神は唯一とは言えなくなるのではないでしょうか。仮にそのような創造主を認めたりすると、「では唯一の神を創造した創造主を創造したのはだれか」と問わなければならなくなります。そして、この質問は際限なく続くことになります。出エジプト記三章一四節には、神がご自分の名前に關して、「わたしは、『わたしはある』という者である」と仰せられたことが記されています。このことばは神の本質の一つである自存性を意味しています。神は存在そのものであり、その他のすべての存在をあらしめた根源的存在です。神は創造主であり、神を造った者はいないのです。これがお尋ねに対しての答えですが、もう少し、他の観点から説明してみたいと思います。

実際、世の中には、あまりにも多くの宗教があり、多くの神々（仏も含めて）があり、ある宗教学

者の話では、日本だけでも十九万の信仰対象の神仏があるそうです。なぜこんなにたくさんあるのでしょうか。それは、人間が自分好みの神々を心に持ち、創作するからです。その神々は、人間の都合によつて創作された神、人間の恐れや不安から生じた神、すなわち、自然現象への畏敬や、暗やみ、病気、災いなどへの恐れから、人の心に生まれた神、罰を与える神、人間存在の矛盾や苦悩を解消するために、その存在が必要とされた神、これらすべては偶像です。

進化論があるのに、なぜ「人間は神によつて創造された」と言つのですか。

このご質問の前提には、生命の起源や人間の由来に関する唯一の科学的説明として、進化論が正しいというお考えがあるよう思います。ある生物の教科書には次のように記述されています。「現在わかつてゐることは、生物は、今から三五〇四〇億年前に自然発生したらしいことと、その後、生物は進化して現在まできたことです。しかし、どのように進化してきたか、また、何が進化の原因となつたか、すなわち、進化の要因を明らかにすることは大変むずかしい。四〇億年も前の進化の歴史を実験室で再現し、実証することはほとんど不可能である」。また、ある百科事典には、「生物が不变なものではなく、時とともに変化してきたということは、今日もはや疑いのない事実である」、「進化がどのようにして実現

されたかという進化の機構論、すなわち進化論になると、多くの盲点が見られる」とも書いてあります。

日本では、今や学校の教科書ばかりでなく、種々の科学文献までも、「進化の要因は説明できないけれども、進化は事実である」と教えたり、論述したりしています。あたかも進化論は確立した真理のように見えますが、実は、内部的には、学説上の微妙かつ複雑な諸要因にからんで先鋭な諸派の対立があるのです。もちろん、根本原理については、明確に共通した主張を持つています。ところが最近、欧米では、進化論に反対する創造論（神が全宇宙を創造したとする説。この説を科学的に証明しようとすると学問を創造科学といふ）を主張する科学者が増え始め、進化論を捨てて創造論を受け入れる人々が多く出ているとのことで、これは、進化論は科学的事実の一解釈であり、証できる科学的事実そのものではないという証拠です。科学上のすべての資料は、創造論的解釈

で合理的に説明できることが判明したからです。では、進化論の盲点というか、説明が困難な点を少し述べてみましよう。一般に知られているダーウィンの説に、自然選択（自然淘汰）の法則、つまり適者生存の法則があります。わかりやすく言えば、生物の世界においておびただしい数の生存競争があり、不利な器官や種は、生存に適さないものとして滅び、一番強い生物や適したものだけが生き残っているという説です。一見学問的に見えますが、人体の器官、たとえば目だけを見てみても、理論的に無理があるのです。

人類という種も、サルから進化したものであると説明されていますが、進化論が言うように、生物が少しずつ変化して別の種になつたのだとすると、当然、一つの種から別の種に進化中（これを中間種という）の化石が発見されるはずです。ところが、いまだにそのような化石は発見されていません。サルと人間の中間の化石が発見されたというニュースを聞くことがあります、一つひと

つを厳密に検討していくと、そのような化石も、多くの仮想をまじえた作品であつたことが判明しましたとのことです。進化論は、研究が進むにつれて、壁にぶつかり、現在、内部で激しい対立と論争があるのです。

唯物論、無神論に立脚した進化論の先入観念を捨てて、創造論の根拠をなす聖書のことば、「初めに、神が天と地を創造した」（創世記一・1）を受け入れ、創造主なる神を信じてください。創世記一、二章をお読みになつて、地上のあらゆる生物は、種類に従つて神が創造されたことを知つてください。また、人間は神ご自身のかたちに創造され、いのちの息を吹き込まれました。ですから人間は、肉体のいのちだけでなく、霊的ないのちも与えられた者であることを知つてください。ただ一度しか人生を、無神論的人生観で生きるか、創造主なる神が存在し、いつさいを支配なさるという有神論的人生観を持って過ごされるか、その選択はあなた自身の選択にかかるといいます。

神は何のために人間を創造され、自然を造られたのですか。

私たちが未知の人を認識する方法を考えますと、まず、相手の著書があれば、それを熟読吟味することによって、それがなくとも、自分あての手紙があれば、それを読むことによって、ある程度、相手を認識することができます。ある人は、「聖書は神が人間にあてた手紙のようなものである」と言いました。したがって、聖書を素直な心で読むならば、神がどういうお方であり、どのようなご計画とお考えによって、人間と自然（広大な宇宙を含めて）を創造されたかがわかります。聖書は人間に對する神の啓示であり、絶対的權威のある書物です。

それでは、お尋ねについて、二つに分けて、聖書のみことばを引用しながら解説します。

1. 何のために人間を創造されたのか。
 「神は仰せられた。『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように』。神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」（創世記一・26、27）。

「われわれ」と複数形になつてゐるのは三位一体の神を意味してゐます。神は、人間が自分勝手に生活するために造られたのでしょうか。私たちが神を愛し、神に仕え、神に服従することを求めておられるのです。人間が神のかたちとして、神に似せて造られたとは、人間が知的存在であるとか、道徳的存在であるとか、自由意志を持つ者であるとかいった以上の意味があります。それは、人間には神と交わることのできる靈を与えられているということです。動物は、からだとたましい（いのち）は持っていますが、さらに高い次元の靈

は持つていません。

2. 何のために自然を造られたのか。

「神の、目に見えない本性^{ほんせい}、すなわち神の永遠の力と神性は……被造物によつて知られ、はつきり認められる」（ローマ一・20）。

自然界を見てみると、それはきわめて美しい世界です。ただ美しいというだけでなく、そこには驚くべき秩序があります。秩序ばかりでなく、自然の仕組みの精緻^{せいち}なことにも驚嘆せざるを得ません。太陽と地球の距離がもし少しでも違ついたら、人間は凍死するか、あるいは焼死しなければなりません。雨が降つて植物を育て、また雨となつて降つてくるという繰り返しも不思議です。そのほか、渡り鳥や鮭^{しゃけ}の産卵などの習性を考えてみると、この自然界には、人間の能力を超えた驚くべき知恵が働いていることがわかります。自然界は神の御手^{みで}のわざなのです。神は自然界をとおしてご自身を明らかにしておられるのであり、

神の壯麗さ、雄大さが、自然界にいかんなく表されています。神はご自分の栄光のために人間や自然を造られたのです。

私は、神が（人間も含めて）すべてのものを創造したということは信じができるようになりましたが、その神が、今の私とのようななかわりがあるのかわかりません。それを知りたいのですが……。

古来、日本では、「万物が神である」といつたきわめてあいまいな汎神論^{はんじんりん}、あるいは八百万^{やほんぜん}の神といった多神論的な宗教觀が、一般にしみ渡っています。その中で、あなたが、神が（人間も含めて）すべてのものを創造したということを信じることができるようになられたことは、信仰の本質について、認識を多少なりとも深めたせいだと思います。日本の教育界では、人間について、進化論を絶対的な真理のように子どもたちに教えているのが現状です。

なお、イスラム教とユダヤ教も創造主なる唯一の神を信じている一神教に属する宗教ですが、私が確信を持つて言えるのは、本当のたましいの救

いは彼らには与えられていないことです。これは単に私の考えではなく、聖書に次のように記されているからです。

「この方（キリスト）以外には、だれによつても救いはありません」（使徒四・12）。

キリストご自身も、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父（万物の創造主なる神）のみもとに来ることはありません」（ヨハネ一四・6）と言われました。

私たちは、あなたや私がこうして地上に生存しているのは、偉大な神の恵みとあわれみによることを知らなければなりません。あなたはよもや、ご自分の力で生きているとは思つておられないと思いますが、聖書に次のように記されています。

「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使徒一七・28）。

「あすのことを誇るな。一日のうちに何が起ころか、あなたは知らないからだ」（箴言二七・1）。

すなわち、生殺与奪の権は神ご自身の御手中にあるのです。また、「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたし（全知全能の神）はあなたを忘れない」（イザヤ四九・15）とも記されています。このように、神はあなたの一挙手一投足もご存じであり、あなたの心の思いも知つておられるのです。ですから、神を畏れるべきです。神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかるからです。また、この神は、私たち一人ひとりをどれほど愛しておられることでしようか。次のみことばを素直な心で信じ受け入れてください。

「神は、実に、そのひとり子（キリスト）をお与えになつたほどに、世を愛された。それは御子（キリスト）を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」（ヨハネ三・16。これは、「聖書の富士山」とも言われるほど有名な聖句です）。

神は、私たち罪人を救うために、ご自分のひとり子を人間の姿をもつて世に遣わされました。御子は、私たち罪人の身代わりとなつて、十字架の上で御血を流して死んでくださいました。このキリストを仲保者として神に立ち返り、神との交わりを回復することを望んでおられるのです。信仰はこの点で、あくまで神とあなた個人との関係と言えるでしょう。

「キリスト教では、神はただひとりである」と聞いていますが、私たち日本人の神々とかなり違います。説明してください。

日本人が長いあいだ抱いてきた神觀は多神教的なものです。その証拠に、昔から、八百万の神を信じています。医者がそれぞれの専門医に分かれているように、わが国の神さまはそれぞれに分かれています。目が悪いと言えば新井薬師(あらいやくし)に、とげが刺さつたと言えば抜け抜き地藏(ぬきぬきじぞう)に、交通事故から守ってもらいたいと思えば成田山(なるたさん)に、さらに、安産の神さまや商売繁盛の神さま、入試合格の神さまに至るまで、何でもあるという具合です。そもそも、神がこのようにたくさんいるということ自体、おかしいとは思わないでしょうか。たくさんいるというのは、それが不完全である何よりの証拠です。もし完全なものなら、一つしかないはずです。絶対というものは二つとないからです。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない」。

これは多神教に対する戒めです。新約聖書のテモテへの手紙第一・二章五節には次のように記されています。

「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であつて、それは人としてのキリスト・イエスです」。

「神とは何か」——日本では、神と取り組む積極的な教育がなされていません。ですから、ほとんど人が神については無知なのです。そして、昔ながらの伝統が、信仰の名で行事として残っています（実際に神について教えられるものは、わが国の教育の中にはほとんどありません）。ことわざ集の「神」という項目に、「神も仏もみな心」とい

ですか、多神教の神というのは、それだけ相対的な神ということを意味しています。

旧約聖書の出エジプト記二〇章三節に次のよう記されています。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない」。

うのがあるくらいです。今、私たちは、（神のメツセージとも言われている）聖書を開いて、初めて、神の存在、神のご性質を学ぶことができるのです。

宇宙は神ではありません。人の心も、死者も神ではありません。自然法則が一つのよう、神は

います。創造主こそ神と呼ぶべきであって、自然法や宇宙、あるいは人の心などを、神とみなすべきではありません。創造の神は観念の産物だと言えます。しかし、この意見に従わず、創造の神を十分に信じることができるので、追求をやめなさいでください。

「ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることのできない方です。誉れど、とこしえの主権は神のものです。アーメン」（Iテモテ六・16）。

キリスト教という宗教の観点からではなく、神のことばである聖書をとおして、まことの神、イエス・キリストを知つてください。

宇宙でただひとりで、日本の神、西洋の神などではあります。自然法則に西洋の自然法則、日本の自然法則といつた区別がないのと同じように、神は唯一です。神は宇宙の神、いや宇宙の創造主です。この点の理解が十分でないと、聖書の理解も正しくできません。宇宙は神ではなく、神によつて造られたものです。ですから、聖書の神は宇宙を超越した、超自然の神です。時間も空間も神が造られたもので、自然法則もそうです。くれぐれも間違わないでください。神はいつさいの創造主です。旧約聖書の創世記一章一節から三一節を参照してください。

この創造主なしでは、いつさいが混乱してしま

キリスト教では神はただひとり（いわゆる唯一神）であり、また、三位一体の神であるとの教えであると聞いています。三位一体の神についてわかりやすく説明してください。

一般に「三位一体」ということばが使われることがあります。これはもともとキリスト信仰において使われたものです。それは、神は唯一のお方でありながら、父と子と聖霊という三つの人格を持つておられるということです。これは、「神の本質が存在する三つの形態のことを言っているのである」と言つたほうがわかりやすいと思います。ただし、この三位一体ということばそのものは聖書の中には出でません。

人間は、ひとりの人に一つの人格しかありませんが、神はひとりのお方に三つの人格があります。それは、三つの仕方で存在していると言つたほうがよいのです。そして、人格というものは、

いつもほかの人格を必要とします。人格的交わりが必要だからです。人間の場合でも、必ず、ほかの人格を持った人、また、神と交わりを持たずにはいられません。

神は、人間を創造される前に、どのようにして人格的な交わりを持つことができたのでしょうか。それは、神ご自身の中において、三つの人格が交わりを持っていたのだと聖書は教えています。主イエスさまが父なる神に祈られた祈りの中で、「あなた（父なる神）がわたし（子なる神。すなわちイエス・キリスト）を世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を……」（ヨハネ一七・24参照）と言つておられるのは、まさに、そのことにほかなりません。神が愛であるということは、この三位一体の教理なしには理解できなくなってしまいます。

このように、神が愛であるということは、神の三人格が複数であることなしに理解することはできませんが、二でも四でもなく、三であるという

ことは、神の啓示である聖書による以外にはわからりません。神の啓示とは、神が自らを人間に開き示すこと、すなわち、隠され、覆われていた神の真理、神の愛などが神の側よりあらわにされることを言います。そして、その聖書の啓示は、決して私たちの理性と矛盾するものではなく、私たちの理性も満足させてくれます。

さて、この三位の神は、その本質と力と永遠においてはまったく等しく、上下優劣の差はありません。ただ、この三位の神は、唯一の神の本質の中で統一されていて、そこには秩序があります。「Person（位格）」という英語を辞書で調べると、もとのラテン語ではペルソナであり、ペルソナとは「仮面」、「マスク」という意味であることがわかります。だから、神に三位あるということとは、神は三つのお面をつけておられるという意味です。だから、どこまでも唯一の神が三つの違った役割を演じられるということです。

したがって、この三位の位を、神の存在の仕方、

あり方、あるいは働き方と解するのが、現在の聖書学者の間で行われている解し方であると言われています。神は唯一の神だが、三つの働き方をしておられます。しかも、別々にするのではなくて、常にいっしょにしておられます。主イエスさまの最後の宣教命令、「父、子、聖霊の御名によつてバプテスマを受け……」（マタイ一八・19）を「覧になつてください。

聖書には「主」ということばがたくさん出でますが、どんな意味があるのでですか。

国語辞典で調べると、その意味の一つとして、「キリスト教で神またはイエス・キリストの称」と記されています。聖書から、もう少し詳しく説明しましょう。

主は、（支配者、教師のような）地上の権威者や実力者に対して用いられています。新約聖書では、奴隸がその主人を指して「主」と言つてゐる場合もあります。しかし、「主」の聖書的特徴は、それが神とキリストに対して使用される場合で

聖書には「主」と翻訳された単語が三つあります。旧約聖書ではおもに二つのヘブル語を用いていて、そのうちの一つは「ヤハウエ」と言い、このことばは神とイスラエルとの密接な関係を示しています。これは新改訳聖書では太字で「主」と書

かれています。ヘブル語（旧約聖書の原語）の学者の研究によると、このヤハウエという名の語源は「存在」や「いのち」に関連があり、絶対的に自立自存する「存在者」としてのヤハウエ、つまり、ご自分の中に根源的ないのち、永遠の存在を持つておられる方、という意味があるそうです。参考までにつけ加えると、このヤハウエは、文語訳聖書ではすべて「エホバ」となっていますが、「これは伝統的に誤った発音であり、おそらく、ヤハウエと発音されるべきであろう」と旧約学者、故浅野順一氏はその著書の中で述べています。

二つ目は「アドーナーイ」です。イスラエルの民は「わが主よ」と呼びかけて神に祈りますが、それは、神の絶対主権に対するしもべとしての信頼を示しています。この「アドーナーイ」は、主がご自分の名として示された「ヤハウエ」を口にすることを恐れた民が、その名に代えて用いた名称です。なぜ恐れたかというと、いわゆる「モーセの十戒」の中に、「あなたは、あなたの神、主の御名

を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せんにはおかない」(出エジプロト二〇・七)と記されているからです。

新約聖書(原語はギリシャ語)で主を表すことばは「キユリオス」です。新約聖書では、主という名称はもっぱらイエスを指して用いられています。これはイエスに与えられた最高の名称です。初代教会の信仰告白の中心は「イエスは主」であつたことが、次の聖書のみことばによつてわかります。

「もしもあなたが口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくれさつたと信じるなら、あなたは救われるからです」(ローマ一〇・9)。

「聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です』と言うことはできません」(Iコリント一二・3)。

イエスが主であるということは、彼がすべての権威を持つてゐることであります(マタイ

二八・18)、天地のすべてのものが、彼にひざをかがめなければならぬことを意味しています(ピリピ二・10、11)。元来、主という名は「すべての名にまさる名」であり、イエスが十字架の死に至るまで従順であられたので、神から賜つたものであります。主という名には、このような大きな意義があることを知つてください。イエスをご自分の救い主として信じ受け入れ、救いにあずかられますように。

神は愛だとよく言いますが、神の愛とは何ですか。私はそのようなものを感じたことがないのですが……。

新約聖書の原語はギリシャ語です。ギリシャ語で「愛」ということばは四つありますが、聖書に出てくるのは「アガペー」と「ファイレオー」の二つです。アガペーは神が一方的に与える愛を示し、神の愛とクリスチヤンとしての愛を表現することばです。ファイレオーは家族愛、友愛、愛情などの感情的な愛を示します。私たちが素直な心で聖書を読むとき、神の啓示により、神ご自身の本質と属性を理解することができます。お尋ねの神の愛は属性の一つです。では、神の愛について説明します。

神の義は厳しいものです。ですから、だれひとりとして神の前に出られません。「義人はいない。ひとりもいない」(ローマ三・10)、「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることがで

きず……」(同23節)と聖書に記されています。しかし、神は義なる方であるとともに、愛なる方でもあられます。それゆえ、神に反逆し続ける人間のために、ご自分のひとり子イエス・キリストを世に遣わされました。彼は神たるお方でしたが、人間の姿をとつてこの世に来られ、罪を犯したことのない絶対聖なる方であられるのに、私たち人間の罪の罰を受けて、十字架で死なれたのです。この十字架に、神の愛と義が現されています。義は十字架の刑によつて、愛は身代わりの死によつて。

反逆し続ける者を救うために、いたいだれが自分のひとり子のいのちを与えるでしようか。ところが神は、人間に永遠のいのち(不滅の靈魂や地上の生命の延長のようなものではなく、まったく新しいいのち)。さらに明確に言えば、イエス・キリストがよみがえられたことによつて与えられたいのち)を与えるために、イエス・キリストを身代わりとされたのです。このことが、次に記す

みことばに示されています。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになつたほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ三・16)。

こう記したヨハネは、彼の手紙に次のように書いています。

「愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。神はそのひとり子を世に遣わし、その方によつて私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物（十字架の身代わりの死）としての御子を遣されました。ここに愛があるのです」(I ヨハネ四・8-10)。

新約聖書にはこのほかにも、神の愛を示しているみことばがたくさんあります。いま記したみことばの中に、神の愛がはつきりと示されていま

す。神の愛は最初から感じるものではありません。聖書のことばを信じることによつて、すなわち、キリストの十字架の身代わりの死と復活を信じ受け入れるとき、たましいの救いを経験することができ、その結果として、ことばに近くすることのできない喜びに満たされるのです、十字架にこそ神の愛が豊かに現されています。

「愛なる神が存在するなら、なぜこの世にたくさんの苦しみや悲しみがあるのでしようか。

「神は愛である」ということが前提になるなら、この世の不幸は、確かに多くの疑問を引き起こすことでしょう。しかし、この世の不幸が、即、神の存在を否定することになるでしようか。私たちには、個々の不幸な出来事について、すべてを解明することができなくとも、聖書をとおして、基本的ないくつかのことを知ることができます。

まず聖書は、この世の不幸は、人間自身の罪の結果であると教えています。神に対する不従順の罪が、人間を苦難と悲惨の状態に陥れたのです。つまり、女には産みの苦しみが、男には生活のための労苦が伴う被害を被らせました（創世記三・14—19）。ですから、この意味では、全人類に苦しみや労苦は存在し続けるでしよう。

しかし、一人ひとりがこの罪から救い出された

ときに、この世の苦しみや不幸から解放されるとも、聖書に約束されています。救いにあずかり、罪を赦された者にとっては、もはやこれらの不幸や苦しみは、単なる不幸や苦しみではなくなります。この世の不公平、不平等ということで、その人の人生はおしまいになつてしまふのではありますせん。この世がすべてなのではなく、救われた者は、永遠に神の祝福を受ける御国に入ることができるからです。聖書には、この世の終わりがやって来て、すべての事柄が公平にさばかれる総決算の時があることも記されています。

「神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこででもすべての人にお悔い改めを命じておられます。なぜなら、神は、お立てになつたひとりの人（キリスト）により義をもつてこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになつたのです」（使徒一七・30、31）。

不幸の起こりは人間の罪にあるのですから、もちろん不幸の第一の意味は、罪の直接の結果として起くる刑罰でしょう。しかし、いつもこの世の不幸が罪の刑罰なのではなく、その人を訓練し、鍛練するという意味も持っています。聖書に、「訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱つておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか」(ヘブル一二・7)とあるとおりです。

また、不幸の第二の意味は、「神の栄光が、その人の上に現れる」ためでもあります。私たちから見ては、不幸の原因や理由がわからなくとも、その不幸は必ず一つの目的を持つているのです。前世の因果やばらなどではない、神の栄光がその人に現れるという目的です。神を信じることによって罪から解放され、神のものとなつた者たちにとって、もはや不幸が不幸でなくなるというこの証が、すなわち神の栄光を現すことになるのです。

イエス・キリストは、人間としてこの世に来られ、十字架の犠牲の死をとおして救いのみわざを成就されました。最高の苦難です。たとえどんな苦難が与えられたとしても、神に対して不平を言ふことが、私たち人間にできるでしょうか。十字架の死という現実の前に、ただ神の愛を知らされるでしよう。

問36

キリスト教だけが救われるのですか。ほかの宗教も神さまを信じているのですから、救うべきだと思いません。キリスト教しか救わないなら、キリスト教の神さまは愛がないと思いますが。

まず、あなたが言つておられる救いとは、何からのかの救いでしょうか。医者からも見離されるほど重い病気がいやされることでしようか。あるいは、突然の災害に見舞われ、その災難を免れたりしたとき、「△△さま（偶像の神）を信じているお陰で救われた」などと言つたりするような救いではないでしょうか。けれども、病気が治つても、災難を免れたとしても、人間はいずれ死ななければなりません。聖書が教えている死は、ただ肉体の死だけではありません。人間が神を拒み続けるならば、たましいの死、すなわち、永遠の死（滅び）を刈り取らなければなりません。滅びるとは、存在がまったくなくなってしまうということでは

ありません。神ののろいを受け、神から引き離され、永遠にもだえ苦しむのです。それは神の恐ろしい公正なさばきの結果なのです。

あなたはほかの宗教も神さまを信じているのですから、と言われますが、生きておられるまことの神は唯一です。これが真理なのです。八百万の神ということばもあり、事実、多くの人々は、数え切れないほどの神があると思ってそれを信じています。しかし、よく考えてみると、それは昔からの伝説に基づいたものや、人間が考え出し、祭り上げたもの、または、人の手によつて造られたものばかりです。聖書はそれらを偶像と呼んでいます。偶像を拝むことは、神に対する最大の罪です。神の律法には、次のように明記されています。「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。あなたは、自分のために、偶像を造つてはならない。……どんな形をも造つてはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない」（出エジプト二〇・三一五）。

人間は神によつて創造され、神の主権的支配の下に置かれてゐるので、神の御旨^{みねぢ}、すなわち律法（その中心は十戒）を行う義務があるので。律法を完全に守らない者は罪人とされ、のろいと刑罰が与えられます。以上、説明したことによつて、私たち人間は、どんなに神の前に罪深い者であるかがおわかりになつたことと思います。「罪から来る報酬は死です」（ローマ六・23）。生まれながらの罪人である私たちは、神の御怒りを受け、さばかれ、永遠の滅びに定められて当然の者たちです。しかし、神は義であられる方であるとともに、愛なるお方であることが聖書に明記されていました。

「神は、実に、そのひとり子（イエス・キリスト）をお与えになつたほどに、世（罪に汚れた世界と人々）を愛された。それは御子（キリスト）を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」（ヨハネ三・16）。罪を犯し、さばかれ、永遠に滅ぼされて当然の

世の人々を、罪から、滅びから救うために、キリストは本来、天（神の御座）におられる方なのに、神のあり方を捨てて、人間の姿となつて地上に来られ、神の愛を現すために、罪を犯したことのない聖い方であられるのに、私たちの身代わりとして、みずから十字架（ローマ帝国時代で一番重い刑罰）にかかり、血を流して死んでくださつたのです。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物（私たち罪人を贖^{かぶな}うための代価）としての御子を遣されました。ここに愛があるのです」（ヨハネ四・10）。

聖書が啓示している神の愛は、何と計り知ることができない愛ではありますか。どうかあなたもへりくだつた心を持って、この神の愛を素直に受け入れ、キリストをご自分の救い主として信じ、救いにあづかられますように心からお勧めいたします。

5

死
に
つ
い
て

聖書は死についてどのように教えていますか。

大胆かつ真摯なご質問に敬意を表します。普通、人は死を忌み嫌い、それを口にすることさえいやがります。日常の会話で死の話題が取り上げられると、縁起でもないと言つて避けようとします。「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか」と(Ⅰコリント一五・32)。このように、人々は死を当然のこととして認めはしますが、生まれながらの欲望を満たすことに心を奪われているのではないかでしょうか。

人が死を忌み嫌おうが、死に無関心であろうが(というよりも、無関心を装おうが)、死ぬことは普遍的かつ確実なことはありません。死という問題は、一回限りの人生において、すべての人が確実に迎えなければならない問題です。聖書はこの問題について何と教えているか、紙面の許容範囲で、ともに考えてみましょう。神のみことば

(聖書)が、それに対する備えについても語つてることを知つていただきたいと思います。

「そういうわけで、ちょうどひとりの人によつて罪が世界に入り、罪によつて死が入り、こうして死が全人類に広がつたのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです」(ローマ五・12)。

なぜ人は死ぬのでしょうか。死の起源は何でしようか。聖書は、人類の先祖アダムが神に反逆したことにあると教えてます。その結果、神(いのちの創造主)との関係が断絶し、人間に死がもたらされたというのです。死は神のさばきであり、のろいなのです。

「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナ(永遠の刑罰の場所)で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」(マタイ一〇・28)。

「しかし、おくびよう者、不信仰の者、憎むべき

者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である」(黙示録二一・8)。

聖書には、肉体の死以外にも死があることを教えています。それは「永遠の死」です。イエスは、

第一の死よりも第二の死を恐れなければならぬ、と私たちに警告されました。彼は、第二の死とは、ゲヘナ(地獄)で永遠に苦しむことだと述べておられます。それは神から永遠に分離されることです。イエスは、「たましいが意識のあるままで神から永遠に切り離されることに比べれば、からだの死は取るに足りないことだ」と指摘されたのです。聖書は、「人間の死とは、からだとたましいが分離することである」と教えています。からだは地(土)に帰りますが、靈魂はどこへ行くのでしょうか。ルカの福音書一六章一九一三二節は、死後の世界のことを示しています。アブラハムのふところ、すなわち永遠の安息に入るか、

ハデス、すなわち苦しみの場所へ行くか、二つしかないと教えています。わかりやすく言えば、天国か地獄かなのです。ちなみに、カトリックの教えでは、煉獄(れんごく)という中間状態の所もあると言っていますが、そのようなことは聖書にはまったく記されていません。

実は、もう一つ別の死についても記されています。それは「靈的な死」です。たましいが神から離れていることです。聖書に「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であつて……」(エペソ二・1)とあるのがそれです。イエスを遣わされた方、すなわち父なる神を、イエスのことばを聞いて信じる者は、靈的な死から永遠のいのちへと、ただちに移されるのです。死後の靈の行き先は何によつて決まるのでしょうか。この世に生きていたときにキリストを信じ受け入れて、罪の赦しを受けていたかどうかにかかっているのです。たましいの救いを得られ、死に對して勝利者となれますようにお勧めいたします。

人間は死んだらどうなるのですか。

聖書によつて説明します。人間は三つの部分から成るひとりの「ひと」として創造されました。人間には靈とたましいとからだがあります。たましいは人間にも動物にも共通のものです。たましいは、感情、願望、本能などをつかさどる「生まれながらのいのち」です。動物はからだが死ぬと、たましいも死にます。人間のたましいはそれとは違ひ、靈と結びついています。人間は死ぬと、靈とからだとの結合が解かれ（靈とからだ、すなわち肉体が解かれるのが死なのです）、肉体はちりに帰つて朽ちてしまいますが、靈は朽ちることなく、神の御手の中に帰つて行きます。聖書に「ちりはもとあつた地に帰り、靈はこれを下さつた神に帰る」（伝道者の書一二・七）とあるとおりです。

肉体を離れた私たちの靈はどこへ行くのでしょ
うか。骨を埋めてある墓場にいるのではありません。
肉体を離れた私たちの靈はどこへ行くのでしょ
うか。骨を埋めてある墓場にいるのではありません。
信者（の靈）がすぐに行く所は、パラダイスで
す。ルカの福音書で十字架上のキリストを信じた

ん。また、仏壇の陰に潜んでいるのでもありません。そういう所に人間の靈はいません。聖書には次のように記されています。

「この貧しい人は死んで、御使いたちによつてアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちは死んで葬られた。その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた」（ルカ一六・22、23）。

キリストを信じている者（ここではラザロ）は死後、幸いな「アブラハムのふところ」へ行きました。信じないで死んだ者（ここでは金持ちは、ハデス（苦しみの場所、よみとも言う）にいたことがわかります。

この世に生きていた人々が死ぬことによつて、靈と肉体が分離し、靈だけになる中間状態と考えられます。

5. 死について

ひとりの強盗は、パラダイスに行くことを主イエスから約束していただきました。「あなたはきょう、わたし（キリスト）とともにパラダイスにいます」（同二三・43）。私たちのために尊いのちを投げ出してくださった愛する主イエス・キリストとともにいる所、それがパラダイスです。次に、

キリストが天からもう一度おいでになるとき、からだが復活して、靈と再び結合し、永遠の天（天国）に入ります。そこが、信者が行く最終的な所です。

それに対して、ハデスとはどのような所でしょうか。そのことについては、私たちの生も死も支配しておられる主イエスが、「ラザロと金持ち」の話の中で、苦しみがあるだけの所と、はつきり語つておられるることは前述のとおりです。死んでも、なお意識があつて苦しみ続けるのです。信じないで死んだ者（の靈）がすぐに行く所はこのハデスです。そして、やがてもう一度肉体が復活し、今度は靈とからだが結合して神のさばきの所、す

なわちダヘナ（地獄）に入り、もうそこから永遠に出て来ることはできません。実に恐ろしいことです。イエス・キリストは、すべての人を救うためにおいでになりました。どうかキリストを信じて救われますようにお勧めいたします。

私は若いころは健康でしたが、年を取つてからは何度も入院を繰り返しています。入院すると、死のことについて真剣に考えますが、退院すると考えなくなります。考えても答えがないためですが、聖書には答えがあるのでしようか。

真摯なお尋ねに敬意を表します。以下、聖書に基づいてお答えします。もし私たちが死後の世界をもつとはつきり知ることができたら、私たちの人生は変わってきます。いろいろなことに迷わされることなく、確信を持つて人生を歩むことができるはずです。しかし、死後の世界は本当にありますでしょうか。この問題は、今日まで、神秘家たちによつて神秘的に語られ、哲学者たちによつて、あるとかないとか決めつけられ、宗教家たちによつて幻想的に語られてきました。このことによつて、多くの人々が確信を持てず、迷い、悩み、苦しんできたのです。しかし、聖書によつて死後にも死があることを示しています。

の世界を確信した者はみな、死を恐れなくなり、死に打ち勝つてきたのです。聖書の解答こそ、私たちの心の目を開き、心に平安と確信を与えてくれるもののです。

「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」（ヘブル九・27）。

もし私たちの存在が肉体の死で終わるものなら、死はそれほど恐ろしいものではありません。「もし、死者の復活がないのなら、『あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか』ということになるのです」（Iコリント一五・32）。

しかし、実は、死の向こう側に永遠の世界があるのですから、私たちは敬虔に今の生活を送るべきです。私たちが話し、恐れている死とは、通常、肉体の死のことです。死と言えば、このことだと思つているようです。これは生命活動の停止ですが、もつと正確に言うと、たましいが肉体を離れることなのです。ところが聖書は、肉体の死以外

「あなたがたは自分の罪過と罪の中に死んでいた者であつて、……生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」（エ。ヘソニ・1-3）。

これは肉体の死のことではなく、靈的な死のことです。からだは生きていて元気であつても、まことの神を知らず、神から離れた生活をしている人の内的な状態のことです。この靈的な死は、神から離れている結果生じるもので、さらに聖書（ヨハネの黙示録）を調べると、「第二の死」ということばが三回出てきます。これは永遠の死のことです。永遠の死とは、神から永遠に離されてしまうことです。この死は「消滅」ではなく、靈的な死の状態が永遠に続くことですから、思うだけでも身の毛のよだつ刑罰です。これを永遠の滅びとも言いますが、それは、私たちが地上で経験し得るどんな災難や苦しみとも比較にならないほど恐ろしいものである、と聖書は教えています。ともかく、神から離れ、自分勝手な道を歩んでいる私たち罪人は、本来なら、みな最終的に永遠の滅

びを経験しなければならないのです。

聖書は、この永遠の滅びからの救いのことを、最も大切な教えとして示しています。それは、キリストが私たちの罪のために十字架にかかり、身代わりとして死なれたこと、墓に葬られましたが三日目によみがえられたことです。このことを信じ受け入れるとき、すべての罪が赦され、永遠のいのちを賜物としていただくことができるのです。キリストを信じる者は、終わりの日によみがえらされます。この復活の信仰と希望によって、死に対する圧倒的な勝利者となれるのです。

新約聖書に記されている「よみがえり」、すなわち復活と、靈魂不滅説とはどう違うのですか。

人間には靈とたましいとからだがあり、人間は、三つの部分に分かれるひとりの「ひと」として創造されました。ですから、からだけが人間なのではありません。たましいだけが人間なのでもなければ、靈だけが人間なのでもありません。靈とたましいとからだが、ともにひとりの「ひと」を構成しています。

さて、一般には、キリスト信者は靈魂の不滅を信じていると考えられていますが、靈魂の不滅といふ思想は、キリスト信者の復活信仰とはまったく異なるものです。キリスト信者は「よみがえり」を信じているのであって、靈魂の不滅を信じているではありません。「よみがえり」にしても、人間が自分の頭で考え出して、それが一番納得できるから、というので信じているではありません

キリスト信仰の中心はキリストの福音で、その福音の内容は、言うまでもなく、キリストが自身とそのみわざ、中でも、十字架の死と復活です（コリント一五・3、4）。ですから、十字架と復活はキリスト信仰の中心と言つてよいでしょう。

ところで、復活とは、言うまでもなくからだの復活のことであり、いわゆる靈的な復活といったものとは違います。生きている状態では、靈魂と肉体が結合しているのですが、死によつて、その結合が解かれます。しかし、靈魂だけでは不完全で、どうしてもからだが必要です。そこで、もう一度、からだが与えられ、そのからだと靈魂が結合するわけです。この場合、もう一度与えられたからだが、元の肉体である場合、また死ななければなりませんが、福音書にはそのような三つの事例が記されています（マルコ五・35—43、ルカ七・12—15、ヨハネ一一・1—44を参照）。彼らの場合には、死ぬべき肉体を再び与えられたにすぎませ

ん。一時的に生き返らされたのです。蘇生^{そせい}、つまり生き返りと表現したほうがよいかもしません。

しかし、キリストの場合は、生き返りではなく、二度と死なない靈的ながらだが与えられたのです。使徒パウロは次のように書いています。

「今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました」(Iコリント一五・20)。

これは、クリスチヤンもやがてよみがえることの保証としての復活も意味します。新約聖書は、キリストの復活とともに、信者の復活も証ししています(ヨハネ一一・25参照)。終わりの日の復活については、同六・39、40、44、45参照)。聖書は、信者はもちろん、すべての人間が復活すると語っています(同五・28)。そして、よみがえる者がみな祝福されるわけではないことも明らかにしています。キリストは、よみがえつて「いいのちを受ける」者と「さばきを受ける」者がいることを語つてお

られます。

靈魂不滅説について、少し述べておきましょう。ギリシャ的人生觀(ギリシャ哲学)では、肉体は眞の人生にとつては邪魔になるものとみなされていました。靈魂が肉体という牢獄から解放される時、すなわち「死」を待ち望み、死後の生命を靈魂の不滅と考え、復活の思想を退けていたのです(使徒一七・32参照)。肉体と靈魂という二元論が靈魂不滅説の根柢であり、人間はあくまで一元的なものというのが聖書の基本的な考え方なのです。

聖書にある「地獄」の教えを信じることができません。仏教にも地獄の教えがありますが、本当に実在するのですか。

仏教で説く地獄は観念（現実に基づかず、頭の中だけで作り出した考え方）の範疇の思想なのです。開祖である釈迦自身は地獄を積極的に説かなかつたそうです。「往生要集」（高僧が書いた教え）に、地獄は「死後の遠いかなたの苦しみの世界」と書いてあるそうです。現在は、地獄は「思想」であり、心の問題であると教えているそうです。つまり、一貫性がないのです。

もう少し詳しく説明すると、仏教では、人間の心のうちにあるものを地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上の「六道」であると教え、天国も地獄もこの世の経験であるとします。そして、仏教独特の教えである因縁の法にしたがつて、すべての生物は、過去、現在、未来を、生まれ変わりながら、

果てしなく生死を繰り返し、とどまることなく循環するとします。これを「輪廻」と言うのです。ですから、仏教の教えにある地獄とは、あくまで観念の世界の思想であり、実在しません。では、聖書が教えている地獄について、紙面の許容範囲で説明しましょう。

聖書には地獄（新改訳聖書では「ゲヘナ」）のことが何回も記されています。聖書は神の靈感によつて書かれたものであり、絶対に誤りのない事実を告げている書物です。神であり、救い主であるイエス・キリストのみことばをいくつか記しましょう。

「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことができる方を恐れなさい」（マタイ一〇・28）。

「また、もし、あなたの一方の目が、あなたをつまずかせるなら、それをえぐり出して捨てなさい。片目でいのちに入るほうが、両目そろつてい

て燃えるガヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです」(同一八・9)。

これらのみことばは、地獄の実在を知つておられたイエス・キリストが弟子たちにお教えになつたものです。イエスさまのみそばに三年半ほど仕えた使徒ペテロは、次のように言い表しました。「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした」(Iペテロ二・22)。

私たちの罪のためにご自身をお捨てになつたお方が、実在していない地獄を、あたかも実在しているかのように言われたと思ひますか。絶対にそんなことはありません。聖書は地獄に関して確実な事実を教えています。それらの真理を否定することは、聖書のその他の教えに対しても疑問を抱くことになるのです。あなたは十字架と復活の真理を信じ受け入れているでしようか。地獄の存在を否定するのは、非常に危険です。そのようなことをすれば、聖書の明白な教えを否定し、聖書の

真実性と権威に異議を唱えることになるからです。また、キリストの教えを、偽りであるとして拒否することになります。キリストは、地獄が恐るべき現実であることを教えられたからです。もしキリストがこのことを無知のゆえに語られたのなら、キリストの全知は虚構であり、神ではありません。もし地獄がないとすれば、キリスト教会は二千年もの間、偽りの証しをして、明らかに真実でないことを宣べ伝えてきたことになります。

どうか聖書のみことばすべてを信じて受け入れ、救いにあずかられますように。

神は愛の神であり、全能の神なのですから、最終的には、すべての人をお救いになるのではないでしよう。聖書には、「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」とも、「小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではありません」とも記されています（「Iテモテ」一・4、マタイ一八・14）。ですから、永遠にわたる地獄の刑罰を下すとは考えられないのですが。

聖書には確かにそのように記されています。けれども、気をつけなければならぬことは、悪魔が人を惑わすために聖書のことばさえ悪用することです。ですから、聖書を全体的に読み、調和の取れた統一ある眞理を学び、聖書を正しく解釈しなければなりません（参考までに、マタイの福音書の四章六、七節をお読みください）。

このような疑問は、なぜ生じるのでしようか。

それは、聖書のことばを自分に都合よく解釈し、自分勝手に適用するからです。まことの救いにあずかっていない人々の中には、そのような人がたくさんおられるようです。「刑罰が存在する」としたら、それは人を改善するためでなければならぬ、「永遠の火で、永遠に人を苦しめるといふ」、「永遠の火で、永遠に人を苦しめるといふ」、「永遠の火で、永遠に人を苦しめるといふ」は、神の愛に矛盾している」と言うのです。

これは万人救済説（ユニバーサリズム）と呼ばれる誤った思想です。この思想は、古くは、教父オリギネス（一八九一二五四年ごろ）らが提唱した「万物復興論」に端を発しています。終末には、すべての被造物が究極的に救いの恩恵にあずかり、万物が本来の姿に復興させられるというのです。神の天地創造の目的は、罪と苦難によつて持ち込まれたいっさいの不調和が取り去られ、もとの楽園の調和が完全に回復することによつて遂げられる、と説くのです。そして、使徒の働き三章二節の「万物の改まる時」ということばを聖書的な根拠としています。しかし、この思想は、「神の

さばきを制限するものだ」とアウグスティヌスらによつて厳しく批判され、以来、教会はこの説に反対してきました。側聞するところによると、アメリカにはユニバーサリストという教派があり、信者もかなりいるようです。日本国内にこの流れをくむ集団があるかどうか、筆者は知りません。「万人救済説」を警戒しなければならないわけを簡単に言えば、この考え方を軽率に受け入れると、道徳的まじめさを失う恐れがあるからです。最終的には万人がひとり残らず救われるのだとすれば、自分は救いを得るのを先延ばしにしようとか、もう少しこの世の快樂を追求しよう、とかといった誘惑に陥りがちになります。信者になつても、福音を伝えることに対して熱心さがなくなります。あなたが掲げたみことばとは反対に、次のようなみことばも記されていることを深く心に留めて、主イエスを素直に信じ受け入れ、救いの喜びにあづかつてください。

「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子

に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる」(ヨハネ三・36)。「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」(ヘブル九・27)。

「また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立つていてのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であつた。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされていて、ころに従つて、自分の行いに応じてさばかれた」(黙示録二〇・12)。

クリスチャンは死んだら天国に行くと言いますが、天国はどこにあるのですか。

すべての人にとって大切な問題ですから、紙面の許容範囲でお答えしたいと思います。人間が三次元の世界に存在していることは、すでにご存じのことと思います。一方、お尋ねの天国は四次元にかかることがあります。つまり、時間と空間を超越した世界です。人間が認識できる空間は、普通は三次元までです。学者の説によるところ、「三」より大きい空間は、頭の中に思い浮かべることがむずかしいそうです。クリスチャンでない人が、親しい人がこの世を去ったとき、「天国に行つてしまつた」と言うような所や、仏教の教えにある極楽浄土といった観念的な場所ではないことを知つてください。

聖書では、「天」ということばが、三つの異なる意味で用いられています。まず第一に、雲のあ

る所が天と呼ばれており、第二に、月や星のあるあたりが天とされています。そして最後に、神の住んでおられる所が天といふことで記されています。新約聖書には、「第三の天」、あるいは「パラダイス」と記されている箇所もあります。主イエスさまは地上のすべてのわざを終えられて、弟子たちが見ている間に天に上つて行かれました。ルカの福音書二四章五〇、五一節、および使徒の働き一章九一一節をお読みになつてください。

さて、聖書が天国について教えてることは、それが実際の場所であるということです。キリストは、地上におられるとき、天国について弟子たちに次のように言われました。

「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしかつたら、あなたがたに言つておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行つて、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのものと迎えます。わたしのいる所に、あなた

がたをもおらせるためです」(ヨハネ一四・2、3)。

「わたしは場所を備えに行く」、「わたしが行つて……場所を備えたら」の表現で明らかなように、天国は現実の場所なのです。さらに、キリストは「もしかしたら、あなたがたに言つておいたでしよう」と言われました。このことばをよく考えてみると、防衛的に聞こえます。このように、キリストが「自分の主張の真実性を弁解されるのはまれなことです。おそらく、弟子たちは半信半疑でキリストのことばを聞いていたのでしょう。それでキリストは、「わたしは本当のことと言つているのです。もしこれが真実でなかつたら、このようなことは言わなかつたでしよう」と念を押されたのでしょう。キリストは「また来て、あなたがたを天国へ送り込みます」と言われたのではなく、「また来て、わたしのもとに迎えます」と言わされました。

このことから、天国のすばらしさの中心は、主イエス・キリスト自身であることがわかりま

す。つまり天国とは、主イエス・キリストと顔と顔を合わせてお会いすることができる現実の場所なのです。天国のすばらしさについては、新約聖書の最後の書、ヨハネの黙示録(ちくしろく)の二二章一節から五節までに記されています。それらの描写を神は次のことばで締めくくつておられます。

「これらのことばは、信すべきものであり、真実なのです」(黙示録二二・6)。

あなたも天国に行ける方となりますようにお勧めします。

問44

聖書が語る永遠のいのちについて教えてください。

永遠のいのちは、靈魂の不滅とか、地上の生命の延長とかいったものではなく、まったく新しいいのちのことです。さらに明確に言えば、主イエス・キリストによつてよみがえらされ、与えられたいのちのことです。

主イエスみずから次のように言されました。

「永遠のいのちとは、彼ら（弟子たち）が唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」（ヨハネ一七・3）。

この「知る」というのは、知識を得得るというよりも、むしろ生きた触れ合い、交わり、また信じるということです。このように、永遠のいのちは、主イエス・キリストを信じることによつて神との交わりに入り、体得するものなのです。

さて、聖書は、人間が「からだ」と「たましい」と

「靈」という二つのものから成つていると教えてあります（Iテサロニケ五・23参照）。たましいと靈とを区別するのはむずかしいことですが、この二つと肉体は簡単に区別できます。動物はからだとたましい（いのち）は持つていますが、さらに高い次元のもの、靈は持つていません。人間は靈を持つてゐるので、動物の世界には見られない信仰とか、宗教とかいった靈的な問題があるのです。靈は、神を知り、神と交わるために、神のかたちに造られた人間に与えられているものです。ですから、まことの神を知り、神が人に何を望んでおられるかを見いだして、それを行うことが最も大切なことです。

さて、この考え方によると、人間のいのちを次のように分けることができます。

- (1) からだのいのち（肉体的生命）
- (2) 精神的生命
- (3) 靈的いのち（靈的生命）

人はたましいであり、たましいが人そのものであります。肉体だけが生きているのではなく、その人のたましいが生きているのです。このたましいの生命を精神的生命とも言うのです。この生命によつて、人間の人格的活動が行われます。たましい、すなわち心には、知性・感情・意志という三つの働きがあります。ところが、始祖アダムの反逆（罪）によつて、靈的に死んだ者となつてしまつたのです。言い換れば、神との交わりが断たれ、引き離された者となつたのです。すべての人は生まれながらにして、アダムの性質を受け継いでいます。幼児であつてもやがて本性を現し、このことがよくわかります。人間は神と交わるために造られているのですから、神との交わりが断たれている間は、失われている状態にあるのです。イエスは、失われた人を救うために来られたのです。

永遠のいのちは、どのように受けることができるのでしようか。イエスを信じることによつて靈的ないのちが与えられます。次の聖書のことばを

味わい、そのまま受け入れてください。

「神は、実に、そのひとり子（キリスト）をお与えになつたほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」（ヨハネ三・16）。

難行苦行をしたり、修養に努めたりして得るものではありません。あなたの自由意志を働かせて、神のくださる賜物である永遠のいのちを選択し、あなたのものとなさいますように心からお勧めします。

問45

キリスト教の天国、仏教の極楽——これらのことばは、死後の世界についてまったく不明の人間の気休め、観念にすぎないと思うのですが。

同じような考え方を持つておられる方は多いことと思います。けれども、眞のクリスチヤンは、キリスト教という宗教の観点からではなく、神の靈感によって書かれた神のみことば（聖書）を学ぶことによって、天国とはどのような所であるかをはつきりと教えられています。そして、天国が單なる氣休めや観念的な場所ではなく、現実に備えられていることを確信しているのです。救い主イエス・キリストは次のように言されました。「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかつたら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行つて、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたし

のもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおさせるためです」（ヨハネ一四・2、3）。
天国について詳しく説明する前に、極楽について少し触れてみたいと思います。極楽こそ、あなたが言われるよう、観念の世界なのです。百科事典で調べると、次のようく書いてあります。「極樂淨土、または安樂・安養世界とも言い、阿彌陀佛の淨土の名。地獄の觀念と平行に、死者の國から發展した觀念」。また、ある文献には次のように記されています。「仏教には淨土という考え方がある。おのおのの仏陀はみんなそれぞれの仏国土、仏の國を持つてゐる。それが淨土である。阿彌陀の淨土が極樂淨土、極樂世界というわけで、極樂と淨土といつしょにされてゐるが、極樂といふのは固有名詞、淨土といふのは一般名詞である。藥師仏の淨土は東方にあつて、淨瑠璃世界と呼ばれている」。これを読んだだけでも、「極樂」が觀念の世界であることがわかるでしよう。「觀念」を国語辞典で調べると、次のように書いてあ

ります。「本来は、目を閉じ、心を静めて仏法の真理を思うこと」。

それでは、紙面の許容範囲で、聖書から天国について説明します。前記のイエス・キリストのみことばを中心に考えてみましょう。イエスさまはエルサレムの神殿を「わたしの父の家」と言われましたが、ここでは靈的な意味で天国のことと意味しています。「もしなかつたら、あなたがたに言つておいたでしよう」。このみことばをよく考えてみると、半信半疑で聞いていた弟子たちに、「わたしは本当のことを言つているのです。もしこれが真実でなかつたら、このようなことは言わなかつたであろう」と念を押されたように思いました。天国は一定の地域です。イエスさまが場所と言つておられるからです。偽りを言われたことのない方が、実際に存在しない架空のものを言わることは絶対にないと、クリスチヤンは堅く信じています。「また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます」と言われました。このことから、

天国のすばらしさの中心はイエス・キリスト、「自身であることがわかります。

つまり、天国とは、イエスさまと顔と顔とを合わせてお会いすることができる現実の場所なのです。イエスさまだけでなく、すでにこの世を去つた多くの親しい信者たちとも再び会える所なのです。ヨハネの黙示録には、天国の光景が永遠の都として記されています。クリスチヤンはこの望みを抱いて喜び、あらゆる患難に耐え、人生を送っています。あなたも、聖書のことばを信じて天国に行ける方となられますように。

「これらのことばは、信すべきものであり、真実なのです」(黙示録二二・6)。

6

罪について

聖書を読むと、あるいはキリスト集会（教会）に行くと、「罪」とか「罪人」とかいつたことばを見たり聞いたりしますが、その意味を知りたいのですが。

確かに聖書には、旧約・新約を問わず、数え切れないほど、このことばがたくさん出できます。また、キリスト集会（教会）で福音の話を聞くたびに、このことばを耳にします。ですから、罪に関する教えは、聖書の根本的な真理の中で重要な一部を占めていると言つてよいでしょう。

さて、「罪」と言うと、一般には「盗み」や「殺人」を連想しますが、聖書では、このような狂つた「的外れの状態」を罪と言います。人間が神という「的」を外して、とんでもない方向へ行つてしまつてゐるありさま——これが罪です。聖書には、罪ということばのほかに、咎（罪過）、そむき、反逆、不義、不法など、同義語がたくさんあります、いずれも、（聖書の言語である）ヘブル語や

ギリシャ語で「罪」に当たることばを訳したものです。罪とは、何よりもまず神に対するものです。「私はあなた（神）に、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪あることを行いました」（詩篇五一・4）。

「法律さえ犯さなければ、あるいは、他人に迷惑さえかけなければ、何をしても、あるいは、何を思つても自由だ」というのが世間の常識のようですが。しかし、まことの生ける神は完全に聖く、人の心の思いもご存じであり、その神の前に、次のようなことは罪であると、はつきり聖書は示しているのです。

その一例を申し述べましょう。不品行や好色は性的な罪です。酩酊や遊興は不節制の罪です。こられるの罪は対自関係の罪と言えます。憎しみ、ねたみ、争い、敵意を抱くこと——これらは対人関係の罪です。偶像礼拝（まことの生ける唯一神以外の神々を礼拝すること）、魔術——これらは対神關係の罪です。イエス・キリストは弟子たちに次の

ようになされました。

「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、人悪い考え方、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです」(マルコ七・20—23)。また、次のようにも言われました。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」(同二・17)。

イエスこそ、靈的に「病人」である私たち罪人

を招き、交わり、良き友となつてくださるために、この世に来られた方です。使徒パウロは、自分の経験をとおして、次のように確信を持つてイエスを証ししています。

『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその

罪人のかしらです』(イテモテ一・15)。

私たちは、自分で決心したことさえ実行できない弱い者です。しかし聖書は、そのような弱さも罪だと言います。聖書が言う罪は、的外れの方向に引つ張つて行く力を示します。そのような力が私のうちに入つていて、善を行わせないのだと教えているのです。「人の生まれながらの性質は善であるか、それとも惡であるか」ということがよく論じられますが、聖書は、「人には善をしたいという願いはあるが、その実行力はない」——結局は、惡の力に支配されているのだ、と教えていま

す。

罪と「原罪」の理解、およびその解決なしに、人生の問題は解決できません。それを教育によつて解決することもできません。ここに福音の尊さがあり、キリストの贖い、罪の赦しが必要になるのです。罪は自分の努力できよめることのできない、根深いものです。聖書が語る「罪」を理解することは、とても大切なことです。

人間を罪人呼ぼりしているのはキリスト教だけだと思いますが、人間をどうしてそんなに悪い者として見なければならないのですか。

世の中には、キリスト教に対し、あなたと同じような見方や考え方をしておられる方が、かなりおられることが多いと思います。つまり、キリスト教は必要以上に罪の問題を強調しすぎてはいないか、ということです。

しかし、聖書の教えに照らしてみると、私たちクリスチヤンは、罪の問題をどうしても強調しないわけにはいかないのです。罪こそが人間の不幸の元凶なのですから、罪をはつきり指摘することは、救いのために避けて通れない問題なのです。罪からの救いにあずからないかぎり、神のさばきを免れることはできません。そして、永遠の死、永遠の滅びを刈り取らなければならないのです。

イエス・キリストは次のように言われました。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです」（ルカ五・31、32）。

使徒パウロも次のように書き記しました。「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです」（Iテモテ一・15）。

律法に基づいて厳格な生活を送り、他人から非難されることはないと自負していたパウロが、やがて自らを「罪人のかしら」と言つたことに注目してください。

罪には、この世の法律に触れる犯罪や、人の道に反する不正や罪悪といった道徳的なものもありますが、聖書が言う罪は、もつと根本的なものであります。聖書で「罪」と訳されているギリシャ語「ハマルティア」には「的外れ」という意味があります。

6. 罪について

したがつて、聖書が「罪人」と言うとき、それは、的外れの生活を送っているすべての人を含んでいます。人間は神に造られた者ですから、神を信じ、神の教えに従うのが人間のあるべき姿です。まことの神を信じないで自分勝手な生活をしている人は、たとえ努力を惜しまないまじめな人であつたとしても、的外れ、つまり罪の中にいるのです。

罪は、私たちにとつて、否定することのできない、そして、避けることのできない現実です。人間社会の現実を見つめるとき、聖書の主張の正しさを認めないわけには行かないでしょう。罪の理解とその解決なしに、人生の問題は解決しません。ですから、キリストによる救いが必要になるのです。

原罪について説明してください。

聖書が言う罪については、お尋ねに答えて、何回かお答えしたことがあります。原罪というこ

とばでお尋ねをいただき、説明するのは初めてで

す。国語辞典を五冊ほど調べてみましたが、みな載っていました。注目すべきことに、どの国語辞典も、「キリスト教」あるいは「聖書」ということばを用いて説明していました。したがって、このことばは、キリスト教(聖書)独特の教理用語であると言えます。「original sin(オリジナル・シン)」という英語をつけ加えているものもありました。ただ、原罪という熟語は聖書(旧約・新約)にはありません。原罪を意味するみことばは、何か所かに記されています。以下、書面の許容範囲で説明します。

の祖先として、人間を代表して罪を犯してしまったのです。そのため、人間は、みなひとり残らず、生まれながらにして罪人となつてしましました。そのことについて、聖書は次のように教えています。

「そういうわけで、ちょうどひとりの人によつて罪が世界に入り、罪によつて死が入り、こうして死が全人類に広がつたのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです」(ローマ五・12)。

このことは、すべての人間が、アダムにおいて罪を犯したことです(もちろん、意識はありませんでしたが)。多くの人は、「他人の罪の責任を自分が負うのは理屈に合わないことだ」と言います。確かに今日の個人主義の立場から見れば、そう見えるでしょう。しかし、私たちは生まれながらにして罪人ではないでしょうか。だれに教えられなくとも、赤ん坊は自己中心的で、わがままです。それがそのまま成人になつていくと

6. 罪について

き、他人を害し、自分も傷つける者となつていくのです。そのような人生の現実に対して、私たちはそれをどう解決したらよいでしょうか。私たちのたましいは、この矛盾した現実の中で、何らかの解決を求めていきます。聖書が教える人間の原罪という事実は、私たちのたましいの真実な求めに答えるものなのです。

アダムの罪のため、人間はひとり残らず、生まれながらにして罪人となつてしまつたことは前述のとおりですが、さらにつけ加えておきたいことは、彼の罪深い性質も受け継いだことです。ですから、私たちの子どもも、善悪について教えられる前から、悪を行ふ方法を知つてゐるのです。この真理については、「私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました」(詩篇五一・5)と記されています。

原罪について総括して説明します。「人間における罪の根本性と普遍性の現実に対する表現である。パウロはアダムの罪とその罪の全人類への普

遍化を告げて、アダムにおける人類最初の罪が、すべての人間に入り込んでおり、死の支配を受けねばならないと語つてゐる。このアダムの最初の罪が原罪と言われ、遺伝的に普遍化したと言われる。こういう原罪についての聖書的説明は、人間が罪の支配下にあり、人間の肉をとおして媒介され、人間の性質的な要素と化していいる罪の現実への描写である。今の人類は、神ののろいを背負つて死に至る運命を持つて生まれてきています。原罪の理解は人生解決のために絶対必要です。

全知全能の神なら人間が罪を犯すことは知っていたと思うのですが、それなのになぜ善惡の知識の木をエデンの園に置いたのでしょうか。それがなければ人間は罪を犯さないで済んだと思います。神さまの愛が矛盾しているように思うのですが。

あなたは、創世記二、三章の話を聞かれたか、あるいは、ご自分で聖書を読んでおられる方のよう

に思われます。お尋ねの内容はあくまで仮定に基づいたものですから、聖書が答えていないのは当然のことです。

聖書は、人間が罪を犯してしまったという事実と、人間は聖なる神の前に罪人であるということと、その罪からの救いについて語っているのです。人間の頭で考えると矛盾に思われるところが聖書に書いてあることがあります、神の靈感によつて書かれた聖書には絶対に矛盾はないことを覚えてください。「神は、すべての人が救われて、

真理を知るようになるのを望んでおられます」(Iテモテ二・4)と記されているように、まず救われることによって、(聖霊のお働きにより)真理を悟ることができるようになるのです。この質問に答えるのは、この世の哲学をどれほど学んでも不可能ではないでしょうか。救いにあずかり、真理を知られた者のひとりとして、余白の範囲でお答えしましょう。

まず、旧新約聖書六十六巻を貫いている根本的な真理の一つは、神が愛であるということです。その具体的な現れが、ひとり子なるイエス・キリストをこの世に遣わされたことです。さて、神は人間を、愛の対象として、ご自身のかたちに、すなわち、神と交わることができる靈性を与えられている者として創造されました(創世記一・27)。人間に人格的な自由をお与えになったのです。つまり、人間は善惡を選択する自由を持つた者として造られました。神は愛なる方ですから、人間を自由意志、判断力、選択力を持った、生きた人

格者として、ご自分と交わることができるように造られたのです。これは人間の特権であり、光榮です。身近な例ですが、人は妻や子どもを愛します。その場合、妻や子どもが自発的に従い敬うとき、人は喜びと満足を覚えるのではないでしょか。神は人間が自分の意志をもって、神の命令を守ることを望んでおられます。いわゆるロボットのようなものに造られたのではないです。では、なぜ善惡の知識の木を生えさせたのでしょうか。

聖書には、「神である主は人に命じて仰せられた。『あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善惡の知識の木からは取つて食べてはならない。それを取つて食べるとき、あなたは必ず死ぬ』」(創世記二・16、17)と記されています。これは、被造物である人間には限界があることを示しています。人間は何でもできるわけではなく、また、何をしてもいいのではないのです。越えてはならない一線を引かれたことは意

味深いことです。そのうえ、この木を生えさせられたことによつて、人間の神への従順の約束のしるしとなるという真理が示されているのではないでしようか。ところが人間は、へびの姿をした悪魔の誘惑に引っかかり、神の戒めを破り、そむいたのですから、その責任を自分で負わなければならぬのは当然のことです。神に対して何ら文句を言うべき筋合いはないのです。

創世記の三章を子どものような純真な心でお読みになれば、人間がいかに罪深い者であり、その責任を他人に転嫁しているかがわかると思います。近ごろの世相は、如実にそれを示しているよう思います。神は、罪に汚れたこの世に御子を遣わされ、その方、すなわちイエス・キリストを信じるだけで罪人が救われる道を備えてくださいました。

私は、聖書は良い本であると思つていますし、暇を見て読んでいます。私なりにキリストのことを知つてゐるつもりです。現在、幸福な家庭生活を送つているので不満もなく、神に頼る気持ちにはなりません。教会に行く時間もないし、行つてまで一生懸命やるつもりはありません。いずれ必要に迫られれば行くことになるでしょう。人間は、別に人に迷惑をかけていなければそれでよいのではないか。また、何か問題が起これば自分で判断し、自分の責任において解決しなければならないのですから、神を信じても信じなくても結局は同じではないでしょうか。

あなたと同じような人生観を持つっている人は比較的多いように思います。あなたは現在幸せな生活を送つてているようで結構なことです。けれども、聖書を読んでおられるとのことですからおわかりのことと思ひますが、有名なキリストの山上の垂訓の終わりに記されているように、キリストを土台としている人生は、さながら砂上の楼閣に等しい人生ではないでしょうか。ある社会学者は言いました。幸福には、真正の幸福と擬似幸福の二つがあり、擬似幸福とは、客觀条件の変化により、もろくも失われてしまう幸福を言う、と。極端に言つて、人間は健康や富に恵まれているとき幸福感を味わいます。しかし、人のいのちについて聖書は何と教えているでしょうか。「はかない」ものであり（詩篇三九・4）、「しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧」にすぎない（ヤコブ四・14）と記されています。私たちは、今日幸福であると思っていても、明日のことはわからぬいし、誇ることはできないのです。

「あすのことを誇るな。一日のうちに何が起ころか、あなたは知らないからだ」（箴言二七・1）。

「恐れるな。人が富を得ても、その人の家の栄誉が増し加わつても。人は、死ぬとき、何一つ持つて行くことができず、その栄誉も彼に従つて下つては行かないのだ。……人はその栄華の中にあつ

トを土台としている人生は、さながら砂上の樓閣に等しい人生ではないでしょうか。ある社会学

ても、悟りがなければ、滅びうせる獸に等しい」
 (詩篇四九・16-20)。

これらのみことばをご自分に当てはめて熟思してみてください。ルカの福音書一二章一三一一二節にも、貪欲の限りを尽くして富を蓄え、「さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ」と言つてゐる金持ちに、神が「愚か者」と呼びかけ、「おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる」と、たとえ話で警告していることが記されています。

あなたは、人に迷惑をかけなければ、それでよいのではないかとのお考えですが、迷惑をかけないことは当たり前のことではないでしょうか。使徒パウロは自分を「罪人のかしらです」(Iテモテ一・15)と告白しました。孔子も、「不善改むる能わぬ、これがわが憂いなり」と言いました。聖書のみことばの光に照らして自らの心を見ると、自分がどんなに罪深く汚れた者であるかがわかり、心碎かれ、へりくだることができます。問題が生じたとき、完全に自分で解決できるほ

どの人が、はたして何人いるでしょうか。人間はみな迷いややすく弱い者です。神に感謝をせず、自分を正しい人間とみなして、自分の力で生きているとのむなしい誇りを持つて高ぶっていることは悪いことであり、神に対する罪であることを知つてください。

世の中にはクリスチャンでなくても高潔で立派な人々がいます。そのような人も罪人ですか。

「クリスチヤンでなくとも高潔で立派な人々がいます」——確かにそうです。しかし、聖書はそのような人たちも罪人であると語っています。普通、罪と言えば、殺人や盗みといった悪い行為を連想しますが、聖書の言う罪とは、どんなことであっても、神の完全さに及ばない不完全なことのすべてを指しています。

「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず……」(ローマ三・23)。

「神からの栄誉」ということは、神は絶対的に完全であるとの意味が含まれています。それで、罪とは、この目標に届かなかつたり、神の示してくれださつた目的を果たせないことなのです。この点で、ひとりの例外もなく、すべての人が有罪です。聖書には、さまざまな罪と根本的な罪が示されて

います。この区別がわかつたとき、初めてその人は罪とはどういうものかがわかり始めます。どんなに楽天的な人でも、この世にさまざまなりが満ちていることは否定できないと思います。それを、人はもつと悪い人と比べたり、自分の善行と比べて言い逃れているのが普通です。しかし、それは、やみ夜で電球の明るさを比べているようなもので、百ワット(比較的善人)も十ワット(比較的悪人)も太陽の光(神)の前では同じよう光のないものなのです。

聖書では、最初の人間アダムが罪を犯したとき、神の前に立つ正しさを失い、神との交わりをなくし、靈的に死んだ者となり、その子孫の全人類に罪が入ってきたことを教えています。ですから、すべての人は罪の性質を持って生まれてきます。これが根本的な罪で普通聖書の教理用語で原罪^{げんざい}と言っています。この根本的な罪(原罪)から種々の罪が出てきます。私たちは、この二つの罪、すなわち、生まれながら持つてある原罪と、

それから生じる種々の罪とを区別して考えなければなりません。

人間は隣人関係において、多くの賞賛に値する行為をすることができるでしょう。しかし、それが神の愛に基づかず、神に対する服従としてなされていないために、根本的には不完全です。原罪を持つているからです。

さまざまの罪は、表面に表れる行為だけでなく、心の思いや欲望や決意の罪も含んでいます。

「（イエスは）言われた。『人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え方、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです』（マルコ七・20—23）。

この中の一つでも犯せば、神の前に罪ある者です。したがつて、世界には罪を犯さない正しい人はひとりとしていないのです。

キリスト教会(教会)に行つて聖書の話を聞くたびに、「罪」とか「罪人」とかいうことばをよく耳にしますが、私自身、別に法律に触れるようなことも、他人様に迷惑をかけるようなこともしていません。聖書に記されている罪とは、どういう意味なのでしょうか。

あなたは確かにまじめな日常生活を送つておられるだけに、罪人呼ばわりされることは、自尊心を傷つけられる思いがすることでしょう。聖書に記されている罪ということばは「ハマルティア」というギリシャ語で、「的外れ」という意味です。罪人ということばには、的外れの生活をしている人すべてが含まれています。人間は神によつて造られ、生かされているのですから、神を信じ、神の教えに従うのが人間の正しい道です。神を信じず、自分勝手な生活をしている人は、たとえ今まで努力を惜しまない生活をしていても、「的外れ」——罪の中にいることになります。「すべての

人は、罪を犯したので、神からの榮誉を受けることができず……」(ローマ三・23)と書いてあります。「義人はいない。ひとりもいない」(同10節)とも書いてあります。また、自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスは次のようにたとえ話をされました。

「ふたりの人が、祈るために宮に上つた。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であつた。パリサイ人は、立つて、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します』。……ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向かふともせず、自分の胸をたたいて言つた。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください』。あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです』(ルカ

一八・10-14)。

このたとえ話でわかるることは、このパリサイ人は、自分を他人と比べて、自分には罪がないと考えていたことです。確かに私たちは、新聞に出るような犯罪者に比べれば、まともで善良な市民でしょう。別に法律に触れるようなことも、他人様に迷惑をかけるようなこともしていません。しかし、それが標準となるでしようか。マツチの光は暗やみの中ではたいへん明るく輝きますが、明るい陽光の下では輝きを失います。私たちの正しさも、暗い世間では光彩を放つかもしれませんが、

「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。……もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです」(ヨハネ一・8、10)。

神の御光の下では、輝きを失います。結局、罪を犯していないのではなく、罪を判定する標準が高いのです。

パリサイ人は、断食やささげ物などに関する法律をうわべだけ守ることに標準を置きました。しかし、神の標準はもつと高く、心や動機にまで及びます。たとえば、聖書には、人を憎む者を人殺しとみなすのです。確かに、憤りや憎しみは、心

聖書は心のX線です。みことばの光に照らして見ると、私たちの心がいかに罪にむしばまれ、腐れ果てているかがわかります。どうか、あなたも、この取税人のように、心から神さまに罪の赦しを求め、キリストを信じる信仰によって、神に義と認められますようにお勧めいたします。

世の中には悪い人もいますが、善い人もたくさんいます。その人たちは善や悪をわきまえ、善い人になる努力をしています。キリスト教はなぜ一方的に、人は罪人だと決めつけて「救い」を説くのですか。

確かにあなたの言うとおり、世の中には善人もたくさんいますが、それはあくまでも人間同士を相対的に見た場合です。しかし、聖書が啓示している神は、絶対的に「聖い」お方です。その神から人間をご覧になつた結果が、聖書に次のように書いてあります。

「義人はいない。ひとりもいない。……善を行ふ人はいない。ひとりもいない」（ローマ三・10、12）。

このことはちようど、真っ白な雪と、その他の白色のものとを比較したとき、雪のほうが、白さの度合いがまさつているのと同じです。聖い神と、人間的には善人と思われ、また自分自身でも

善人と思つている者とを比較したとき、神の前に自分の義を主張できる者はだれひとりいないのです。

人が善や悪をわきまえることができるのは、人に良心があるからです。良心のとがめを一度も味わつたことがないと言える人が、はたしているでしょうか。昔から聖人君子と称賛された人ほど、自分の心の過ちの責め苦を嘆いていたことが言い伝えられています。孔子は「不善改むる能わず、これわが憂いなり」と言い表し、王陽明は、「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」と言いました。

新約聖書の大半の手紙を書いた使徒パウロは、彼の傑作とも言われているローマ人への手紙に次のように書いています。

「私は、私のうち、すなわち、私の肉（單なる肉体のことではなく、罪の力と支配の人間性）のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、

それを実行する事がないからです。私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。……私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救いだしてくれるのでしょうか?」(七・18—24)。

このように徹底的に人間の生まれつきの性質のみじめさを経験したパウロが、ひとたびキリストの救いにあづかってまつたく新生させられ、使徒として殉教の死を遂げるまで、キリストの福音を宣べ伝えたのです。人間一人ひとり、自分の胸に手を当てて謙虚に反省してみると、惡の根が心の中にあることを認めざるを得ません。聖書は、罪に対する厳肅な神のさばきが、世の終わりにありますことを語っています。人間にとつて永遠のいのちか、それとも滅びがあるのみです。聖書は、この罪からの救いが、キリストの十字架の身代わりの死によつて完了していることを示しています。病気のいやしなど、一時的なご利益宗教が氾濫し

ている今日、罪からの救い、すなわち、罪の赦し、生きよめ、永遠のいのちにあづかることが、人間の修行によるのではなく、真心からキリストの十字架と復活を信じ受け入れることによって与えられるとは、何とすばらしいではありませんか。

7

キリストのみわざについて

イエス・キリストはどこの国の人で、いつ生まれましたか。十字架にかけられて殺された理由は何ですか。

毎日、新聞やテレビで報道されない日はないと
言つても過言ではない、イスラエルの人です。

次に、いつ生まれたかというご質問ですが、紀元前四年ごろと考えられています（これには諸説
があります）。また、その死は紀元三〇年ごろと推定されます。これらの年代決定のための資料は、シリヤの総督であったクレニオの人口調査（ルカ二・1、2参照）、ヘロデ王の治世（マタイ二・1参照）、ピラトによる処刑（マルコ一五・15参照）、処刑の日（ユダヤの暦で、ニサンの月の十四日が満月の金曜日に当たるのは、天文学の研究により、紀元三〇年ごろと推定されています）などです。また、キリストは家業を継いで、三十歳のころまで大工として働かれ（ルカ三・23）、その後、公に宣教活動を始められました。

さて、お尋ねの件で最も大切なことについてお答えします。十字架刑と言えば、当時は刑の中でも恐るべき刑と言われ、十字架を負うということとは、この上ない恥辱と汚名を被ることを意味しました。このような、口にするのも汚らわしい、憎むべき十字架に、神のひとり子イエス・キリストがつけられなければならなかつたのですが、これにはもちろん深い意味があります。

この十字架は、本来、人間が受けるべき刑罰だつたのです。人間は一人ひとり、自分の罪のために刑罰を受けなければならぬのです。とすれば、私たちにはまったく救いがない、ということになるでしょう。しかし、あわれみ深い神は、人間が滅んでしまうことを心によしとなさらず、これを救うために、人間が受けるべき刑罰を、代わりにひとり子イエス・キリストに負わせてくださいました。何の罪も汚れもないお方が、私たちの身代わりとなつて、十字架の刑を引き受けくださいましたのです。ここに救いがあるのです。

7. キリストのみわざについて

「神は、実に、そのひとり子をお与えになつたほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ三・16)。

私たちの罪は永遠の死に値します。私たちは、永遠の刑罰、ゲヘナ(地獄)での苦しみを受けなければならぬのです。イエス・キリストは、そのような私たちの身代わりとなつて、十字架の上で死んでくださつたのです。救いのみわざが成し遂げられたのは、「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によつたのです」(I.ペテロ一・19)。「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦^{ゆる}しはないのです」(ヘブル九・22)。血は「肉体のいのち」です。したがつて、キリストが私たち罪人の身代わりとなつて、ご自分のいのちをささげてくださつたことを示しています。

すべてのものを神が創造したとすれば、キリストもそうですか。

キリストも被造物として創造されたのかという

お尋ねですが、答えは「いいえ」です。確かに、キリストが肉体をもつてこの世に現れたのは約二千年前であり、西洋史にも記されています。しかし、キリストは、歴史上に現れた单なる聖人ではありません。世間一般では、三大聖人のひとり、あるいはキリスト教の開祖であると考えられていますが、聖書を謙虚な心で読むと、キリストがどういう方であるかがわかります。

キリストは完全な神であり、また完全な人である、すなわち、神性と人性の二つの性質を持つておられた方なのです。キリストの神性とは、キリストが神であるという意味ですが、聖書はこのことをはつきり記しています。弟子トマスはイエスに向かって、「私の主。私の神」(ヨハネ二〇・

28)と言いました。使徒ヨハネは自分の手紙に、「御子イエス・キリスト……この方こそ、まことの神、永遠のいのちです」(ヨハネ五・20)と記しました。キリスト「自身も自らを神であると言わされました。

「わたしと父(父なる神)とは一つ(同一)の本質」です(ヨハネ一〇・30)。

キリストは天地万物が造られる前から、神として存在しておられた創造者です。ヨハネは次のように記しました。

「初めに、ことば(キリスト)があつた(『初めに』はキリストの永遠的存在を意味する)。ことばは神とともにあつた。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によつて造られた」(同一・1-3)。

ヨハネはキリストによつて使徒として選ばれ、三年余り御側で交わり、教えを受け、ご人格に触れました。キリストが死人をよみがえらせたり、生まれつきの盲人の目を開けたりされた数々の奇

跡を目撃し、キリストご自身がよみがえられたことも知り、確信をもって福音書を書き、キリストの神たること、すなわち、神性を証しました。

パウロはクリスチヤンたちを迫害していましたが、ある日、突然、天からの光に打ち倒され、復活されたキリストに出会い、キリストの弟子となりました。彼も次のように記しています。

「万物は御子（キリスト）にあつて造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によつて造られたのです。万物は、御子によつて造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあつて成り立っています」（コロサイ一・16、17）。

神であるキリストが人となられて世に来られたことは歴史的事実ですが、その誕生は、すべての人と違っています。母マリヤは聖靈によつて身重になりました（マタイ一・18）。キリストは処女

からお生まれになつたのです。このことは、キリストが誕生される約七百年も前に、預言者イザヤによつて預言され（イザヤ七・14）、その預言が成就したのです。目に見えない神を示すために、神は全能の御力を働かせて、見える姿、すなわち、キリストをとおしてご自身を現されたのです（ヨハネ一・14、16、18）。キリストを信じ受け入れ、救いにあずかれますように。

キリストは神ですか。それとも人間ですか。

「ごろ、預言者イザヤによつて次のように預言されています。

キリストは、永遠の神の御子でありながら、人間をその罪から救つてくださるために、みずから人間イエスとなられたのです。この驚くべき出来事が起つたのが、あの最初のクリスマスの時でした。このことについては、マタイの福音書一章一八一二五節とルカの福音書一章二六節一二章二〇節に記されています。これは、聖靈によつて処女が身ごもり、定められた時（旧約聖書に預言された神の約束の時）に人性をとられてこの世にお生まれになつたのです。多くの人は、これを非科学的であると言つてあざけつたり、攻撃したりします。しかし、聖書には、このほかにも数々の奇跡が記されています。奇跡とは、神の超自然的な力によつて、自然法則に反するような方法で起こる出来事のことです。キリストの誕生について

「見よ。処女がみどりもつてゐる。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』（「神は私たちとともにおられる」という意味。キリストを指しています）と名づける」（イザヤ七・14）。

また、ほぼ同時代の預言者ミカによつては、ユダヤのベツレヘムでお生まれになることが預言されており、そのとおりベツレヘムでお生まれになつたことが、ルカの福音書二章一一七節（前掲）に記されています。まことに不思議な出来事ではないでしょうか。しかし、キリストは人間として通常の成長・発達段階をたどられたことが次のみことばによつてわかります。

「幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちていった」（ルカ一・40）。「イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人とに愛された」（同52節）。

処女降誕（このことばは聖書には出ません

7. キリストのみわざについて

が、救い主キリストが処女マリヤからお生まれになつたことを意味する)についてもう少し説明したいと思います。主イエスの出生は自然現象、すなわち自然的誕生(父母による)ではなく、創造主なる神が超自然の力をもつて介入された奇跡です。もしキリストが普通の人間と同じようにお生まれになつたとすれば、遺伝の法則により、原罪(人間が生まれながらに持つている罪)を持つていることになり、人を罪から救う救い主とはなり得ません。キリストは罪を犯したことがなく、罪を知らない方でした。この地上で生活しておられる間は、あるときは旅の疲れを覚え、またあるときは空腹を覚えられたように、人間としての性質を持つておられました。ですから、私たちの弱さに同情できない方ではありません。以上、キリストの人性の一端について説明しました。キリストの神性については、聖書の中に、数え切れないほどたくさん記されていますが、特にヨハネ福音書の中からいくつか記してみましよう。

「初めに、ことば(キリストのこと)があつた。ことばは神とともにあつた。ことばは神であつた。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によつて造られた」(一・1-4)。

「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神(キリスト)が、神を説き明かされたのである」(同18節)。

キリストの神性と人性とは決して混同されていませんが、分離できません。主イエスは、人間の性質をとつておられても、神という面では完全な神であられ、全知全能の神であられても、人間という面では完全な人間であられたのです。これはちょうど、百円銀貨の表と裏のような関係です。イエス・キリストの神性と人性は、一つの人格の中において結合されています。ですから、イエス・キリストは、神と人の間の仲介者となることができる唯一のお方なのです。

クリスチャンは、イエス・キリストは神さまだと言いますが、単なるひとりの人間なのではないでしょか。キリストが死んだ後、弟子たちが勝手に神さまに祭り上げたのであって、キリスト自身も自分のことを神さまだとは言つていません。

私たち人間は、生まれながらにして神の子どもなのではなく、「御怒りを受けるべき子ら」(エベソ二・3)にすぎません。人間の先祖アダムが罪を犯したことによつて、すべての人が生まれながら罪の性質を遺伝的に受け継いでいます。これを「原罪」と言います。罪は人間の避けられない、否定できない現実です。そのありのままの結果が聖書全巻を通じて記されています。恵み深い神は、そのひとり子(キリスト)を世に遣わし、このお方によつて救いのみわざを成就してくださいました。聖書には次のように記されています。

「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を

信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになつた」(ヨハネ一・12)。

イエス・キリストが神であること、すなわちキリストの神性について聖書に基づいて説明します。

1. イエス「自身の証し。

「わたしと父(父なる神)とは一つです」(ヨハネ一〇・30)。

「わたしを見た者は、父を見たのです」(ヨハネ一四・9)。

なお、マタイの福音書二八章一八一二〇節も参考してください。

2. 神の属性のすべてを持つておられた。

(1) 全知。弟子たちはイエスに向かつて次のよう

うに言いました。

「あなたがいっさいのことをご存じで、だれもあなたにお尋ねする必要がないことがわかりました。これで、私たちはあなたが神から来られたことを信じます」(ヨハネ

7. キリストのみわざについて

- (2) 全能。イエスは病気を支配する力を持つておられた（ルカ四・39参照）。神の子イエスには死をも支配する力があつた（同七・14、15、八・54、55参照）。イエスは風も海も支配する力、悪霊をも支配する力を持つておられた（マタイ八・26、27、ルカ四・35、36、41参照）。
- (3) 遍在。マタイの福音書一八章二〇節、二八章二〇節。
- (4) 不変性。ヘブル人への手紙一章一一、一二
- 一六・30）。イエスは人々の生涯や彼らの隠れた過去さえ知つておられ、また、人々の心の内にある隠れた思いも知つておられました（同一・48、二・24、25、四・16—18、マルコ二・8を参照）。

一六・30）。イエスは人々の生涯や彼らの

節、一三章八節。

(5) 永遠性。ヨハネの福音書一章一節、イザヤ書九章六節。

3. 神の大権を持つておられた。

(1) 罪の赦し。マルコの福音書二章一〇節。

(2) 復活。ヨハネの福音書六章三九、四〇節、四四節、五四節。

4. 神として礼拝がささげられている。マタイの福音書二章一節、一八章一七節、ピリピ人への手紙二章一〇節。

5. 神としての名前を持つておられた。マタイの福音書七章二一節、ヨハネの福音書一章一八節、ローマ人への手紙九章五節。

以下、キリストの属性と引照箇所のみを記しますから調べてみてください。イエス・キリストが単なる人間ではなく、まことの神であることがおわかりになると思います。

(3) 遍在。マタイの福音書一八章二〇節、二八章二〇節。

不変性。

ヘブル人への手紙一章一一、一二

問58

キリストは処女マリヤから生まれたと言われていますが、処女が懷妊し、子を産むということは、自然の法則に反しているようで信じられません。本當ですか。

まず結論から申します。聖書は、絶対者である真実な神が聖書記者に書かせた本ですから、真実を告げています。したがって、救い主イエスが処女マリヤからお生まれになつたということも本当であると、確信を持つてお答えします。

イエス・キリストは偶然この世に生まれて来られたのではありません。イエスがお生まれになる約七百年前に、ユダヤの預言者イザヤが、「主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもつてゐる。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける」(イザヤ七・14)と預言(予告)しています。「インマヌエル」とは「神は私たちとともにおられる」とい

う意味です。このみことばは明らかにキリストの処女降誕を示すものです。この預言のことばに注目してください。七百年も前に男の子を産むとはつきり言つているとは何と驚くべきことでしょう。現代の医学でさえ、受胎後、一定の期間を経ないと、男の子か女の子かはわかりません。

マタイの福音書にはヨセフとマリヤが婚約中で、まだいつしょにならないうちに、聖霊によつて身重になつたと記されています。夫ヨセフが離縁しようとしたとき、天使が夢に現れ、お告げを受けたので、マリヤを妻として迎え入れ、イエスが生まれるまで彼女に触れることがなかつたとも記されています(一・18-25参照)。イエスが生まれた後、弟たちや妹たちが生まれたことも聖書に記されています(マルコ六・3)。マリヤに受胎させたこの力は聖霊であつたことが、ルカの福音書一章三四、三五節にも記されています。イエスは、預言のとおりにユダヤのベツレヘムでお生まれになりました(マタイ二・1、ルカ二・1

処女降誕という世にも不思議な物語が、何ゆえ二つの福音書にはつきりと書かれているのでしょうか。科学的合理主義の挑戦を受けやすい記事が、なぜあえて書かれているのでしょうか。確かに起こった、否定できない歴史上の事実だからです。聖書が教え、実証している処女降誕の事実は、処女降誕に対する信仰を説明するために捏造されたものではなく、事実の結果として生じたもので

あらゆる時代のキリスト者は、確固とした不变の事実に基づいて、処女降誕に対する信仰を記してきました。キリストの処女降誕は、自然現象、すなわち自然的誕生（男女の結合）ではなく、創造主なる神が超自然の力をもつて介入された奇跡（神の力とその支配を示すし）です。もしイエスが、弟たちや妹たちのように、ヨセフとマリヤの結合によつて生まれたならば、罪ある人間と少しも変わることなく、生まれながら罪ある者と

してこの世に生まれて来たことになります。罪ある者がどうして、人を罪から救うみわざを成し遂げることができるでしょうか。それゆえ、全知全能の神は、超自然の方法によって、すなわち、聖霊の力によってみごもらせ、聖なるお方、神の御子として処女から生まれさせたのです。キリストの処女降誕は、キリスト信仰（聖書）の最も大切なものの一つです。

イエス・キリストが一つも罪を犯したことがなかつたことは知っていますが、罪の性質は持つておられたのでしょうか。私たちと同じようにサタン（悪魔）の試みに遭われたのですから、イエス・キリストにも罪の性質はあったのではないかと思うのですが。

キリストの無罪性（罪の性質がまったくないこと）についてですが、母マリヤからお生まれになると、御使いは、「生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます」（ルカ一・35）と言いました。

上生活の期間中、聖なる者、すなわち罪を犯さない方として歩まれました。イエスが公に伝道した

約三年半の期間、いつもイエスといつしょにいた使徒ペテロは、イエスの十字架と復活後、「キリストは罪を犯したことなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした」（I.ペテロ二・22）と言いました。

確かにイエスは私たち人間と同じ肉体を持って来られました。聖書には、「（キリストは）人としての性質をもって現れ……」（ピリピ二・7）とあります。しかし、人間が罪の性質を持つているので、イエスにもその性質がある、ということではありません。イエスは罪のない方でしたが、私たち人間と同じように、疲れることも、飢えることも、渴くこともある方としてこの世に現れてくださったということです。

他の箇所に、「私たちの大祭司（イエス）は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでしたが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです」（ヘブル四・15）とあるとおりです。

イエスはおよそ三十歳のときから公に活動されました。最初にサタンの試みを受けられました。四十日四十夜断食をして、大変衰弱なさつたのです。その間もその後も、サタンは、罪を犯すようにとイエスを誘惑しましたが、イエスは絶

救いのみわざを成し遂げることもできたのです。

対に罪を犯すことはありませんでした。実は、イエスがこの試みをお受けになつた目的は、このことをとおして、「ご自分に罪の性質がなく、したがつて罪を犯す可能性もないことを証明するためだつたのです。

イエスにとって一番苦しかつたときは、無実の罪で十字架にかけられたときでしたが、そのときもイエスの口から出たことばは、「父よ。彼らをお赦しください」(ルカ二三・34)という、自分を十字架にかけた者たちをとりなす愛のことばでした。どんなに苦しめられても、罪の性質がないイエスからは、のろいのことばは一言も出てこなかつたのです。

あるとき、イエスは大勢のユダヤ人の前で、「あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか」(ヨハネ八・46)と言われましたが、だれひとり罪を指摘できる者はいませんでした。罪の性質がまったくない方でしたから、罪を犯すこともなく、私たち罪人の身代わりとなつて

世界の三大聖人のひとりとも言われ、神の御子とも言われるキリストが、なぜ十字架につけられたのですか。

これはキリスト信仰に関する最も大切な質問です。世間の人は、キリストを三大聖人、すなわち、釈迦や孔子と同列で、そのうちのひとりと認識していますが、聖書は「神のひとり子（比類のない御子）である」と、はつきりと記しています。聖書はこの質問に答えるために書かれていると言つても過言ではないでしょ。歴史上に起る事柄は、それがどのようなものであっても、事実と意味の両方が必ず備わっています。つまり、意味のない事実などといったものはあり得ませんし、事実がないのに意味だけあるといったものもありません。いつでもこの両方が事柄の両面をなしているのです。さて、イエス・キリストが十字架上で死なれたことは、歴史上の事実です（中学や高校

の歴史の本にも記載されています）。この事実に意味があるのは当然です。

ところが、キリストの死について聖書に記されていない間違った教え（近代主義という思想）が、いくつかの学説として立てられたこともあるので、まずそれについて簡単に述べたあとで、聖書に基づいて正しく説明します。その一つは殉教説、すなわち殉教の死だと言うのです。キリストは、ご自分の教えに殉じられたと言います。教えを受け入れなかつた人によつて殺されたのだと言うわけです。また、ご自分はやがて人々から殺されると教えておられたとおりに殺されたのだといふ人もあります。これが殉教の死という解釈であり、意味づけです。また、別の説は、模範説、すなわち模範の死だと言うのです。愛とは、実に、いのちがけのものであり、自分を犠牲にすることにほかならないということを、身をもつて示されたのだと言うのです。この説を唱える人たち、それを裏づけるために、聖書のある箇所のみことば

を引用しますが、そのみことばはクリスチヤンの生涯の苦難と忍耐を意味しており、十字架上の御死を意味してはいません。また、別の説は、刑罰の死だと言うのです。ユダヤ人議会による裁判の席で、ご自分を神の子だと主張されました。そのため神を冒瀆した、神をけがすことばを吐いたと言われ、死刑の判決を受けて殺されたのだと言うのです。このほかにもいくつかの説が唱えられていますが、ご質問にはあまり関係がないので省略します。確かにキリストは、ご自分が教えられたとおりにおいて、模範という意味もありました。また、ユダヤ人議会から、神を冒瀆したという罪で死刑判決を受けていることも事実です。しかし、これらは決してキリストの十字架上の死の中心的な意味ではありません。この中心的な意味を知ることができるのは、ただ神がご自分のみことばである聖書をとおして明らかに啓示してくださいましたからです。

それでは、聖書が明白に主張しているキリスト

の十字架上の死という事実についての中心的な意味は何でしょうか。それは、私たちの罪の身代わりということです。このことについて、キリストは次のように言われました。

「多くの人のための、贖いの代価として、自分ののちを与えるためである」(マタイ二〇・28)。使徒たちも一貫してそのように教えています。キリストは、私たちの罪を背負われ私たちの身代わりとなつてさばかれたのです。罪の代価が払われたのです。

イエス・キリストは十字架の上で「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになつたのですか」と大声で叫ばれたそうですが、どんな意味があるのですか。

これは、キリスト信仰の核心に触れる重要な質問です。この質問に答えるには、もつと原点に立つて、キリストが神の子ならば、なぜ十字架につけられたのか、すなわち、十字架の意味から説明するのがよいと思いますが、ここではお尋ねの点に絞つて説明しましょう。

世の中のある人々、特にある宗教の信者たちは、こんな悲鳴を上げたキリストを救い主と信じるクリスチヤンをあざ笑いますが、この叫び声の中に、神の無限の愛を覚えるのです。というのは、キリストは神のひとり子でしたが、私たち罪人、罪に悩む人間を救うために、栄光に輝く神のあり方を捨てて、人間の姿、仕える者の姿をお取りになり、この地上にまでお降りになりました。そして

では、まったく罪を犯すことなく、愛に満ちた聖い完全なご生涯を送られました。それにもかかわらず、父なる神の御旨に従つて、すべての人の罪を負つて、私たち罪人の身代わりとして十字架にかかり、血を流して死んでくださつたのです。十字架につけられたとき、「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、何をしていいのか自分でわからないのです」(ルカ二三・34)と言われました。何という愛に満ちたおことばではありますか。キリストは地上におられたとき、神にお祈りされるときは、いつも「父よ」と言われ、神との親密な間柄を表されました。

ではなぜ、このとき、「わが神、わが神」と呼ばれたのでしょうか。それは、神のみこころのとおり、御子が全人類の罪をみずから進んで負つてくださつたので、御子はのろわるべき者となられ、神に見捨てられたのです。それゆえ、「父よ」と呼ばずに、「わが神、わが神」と繰り返し叫ばれ、御苦しみの極みを表されたのです。このことは、

キリストがこの世に現れる約七百年も前に、イザヤによって次のように預言されていました。

「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをなつた。……しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。……主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。……彼を碎いて、痛めることは主のみこころであつた。……主のみこころは彼によつて成し遂げられる。……彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする」(イザヤ五三・4-12の抜粋)。

この箇所に出てくる「彼」とはキリストのことであり、「主」とは父なる神のことです。ご自分のひとり子を犠牲にしてまで、私たち罪人を恐ろしいさばきから救おうとされた父なる神の愛を覚えることができるのではないでしょうか。また、何ら罪を犯したがないのに、みずから罪をお引き受けになつて、十字架の上で血を流し、私たちの身代わりとして死んでくださつたキリストの

絶大な愛を知ることができるのでないでしようか。もちろん、永久に見捨てられたのではありません。墓に葬られましたが、聖書に記されているとおり、神の全能の力によつて三日目によみがえらされ、今も、生けるキリストとしてとりなしをしておられるのです。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになつたほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ三・16)。

死んだ人が生き返るというのは信じがたいことです
が、キリストは本当に生き返ったのですか。

確かに常識では信じがたいことです。しかし、二千年近くもの長い間読まれている新約聖書の中の歴史的文書である四つの福音書には、イエスが神の御子としての力をもつて死人をよみがえらせた記事があります。やもめの息子のよみがえり（ルカ七・11－17）、ヤイロの娘のよみがえり（マルコ五・21－43）、ラザロのよみがえり（ヨハネ一一・1－46）をお読みください。これらの記事は、それを実際に自分の目で見た者か、あるいは目撃者から直接聞いた者でなければ書けない筆致で、事実を淡々と綴っています。クリスチヤンは、聖書はすべて神の靈感によつて書かれたものであると、その権威を認め、堅く信じています。ですから、聖書に記されている死人のよみがえりも歴史的事実であつたと信じています。

さて、キリストは本当に生き返ったのかということについて、聖書に基づいてお答えします。キリストのよみがえりは、聖書の中でも、その十字架、すなわちキリストが人間の罪のために死なれたこととあわせて、最も大切な教えです。四つの福音書に詳しく記されています。マタイの福音書二七章六二節－一八章二〇節、マルコの福音書一六章一－九節、ルカの福音書二三章五〇節－二四章五一節、ヨハネの福音書二〇章一一二九節をお読みください。

これほどの字数を用いて、キリストの復活のことが記されているということは、とりもなおさず、その教えがいかに大切であるかという証拠ではないでしょうか。もし「このことが事実ではない」とが記されているということは、とりもなおさず、その教えがいかに大切であるかという証拠ではないでしょうか。もしこのことが事実ではなく、単なる創作にすぎないとすれば、聖書ほど虚偽に満ちた本はありません。イエス・キリストは、ご自分が十字架につけられて殺され、三日目によみがえることを、弟子たちにはつきり語られました（マタイ一六・21、二〇・19、マルコ八・31、

一〇・34、ルカ一八・33)。また、ヨハネの福音書一章二五節には次のように記されています。「イエスは言われた。『わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるので』」。

何と権威のある、確信に満ちたことばではないでしょうか。もし、キリストが本当によみがえらなかつたなら、キリストほどのうそつきはないでしょう。しかし、事実、キリストは墓の中からよみがえられたのです。信者たちを迫害していたパウロは、よみがえられたキリストの声を聞いて回心し、殉教の死を遂げるまで、キリストを宣べ伝えることにその生涯をささげました。彼が書いた手紙の中から、キリストの復活について何と言つているか次に記します。「私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、……聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと」、「キリストは死者の中から復活された」、「眠った者の初穂として死者の中からよみがえられまし

た」(コリント一五・3、4、12-20)。

使徒たち、および彼らによつて信仰に導かれた初代教会の信者たちは、「神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です」(使徒三・15)とキリストを大胆に証あかし、今日に至るまで、キリストの復活(福音)が世界中に宣べ伝えられているのです。もし、キリストの復活が本当でなかつたら、だれがいのちがけで宣教するでしょうか。

復活（よみがえり）と生き返り（蘇生）とはどう違うのですか、わかりやすく説明してください。

国語辞典を調べると、両方とも同じような意味が書いてあり、わかりにくいと思います。聖書によつて説明しましょう。

キリストが在世中、さまざまな奇跡を行つたことが、福音書に記されています。奇跡とは、言うまでもなく、超自然的と思われる不思議な出来事を指します。三人の死んだ人間を生き返らせたことです。まず、マタイの福音書九章一八一二六節をお読みください。

「会堂管理者が来て、ひれ伏して言つた。『私の娘がいま死にました。……イエスは……少女の手を取られた。すると少女は起き上がつた』。」

マルコの福音書五章二二一四三節、ルカの福音書八章四〇一五六節もお読みください。会堂管理者ヤイロの十二歳になる娘が死にましたが、キリ

ストの奇跡のわざによつて生き返らされました。次に、ルカの福音書七章一一一七節をお読みください。そこには、やもめとなつた母親のひとり息子を生き返らせたことが書いてあります。最後に、ヨハネの福音書一一章一一四六節をお読みください。そこには、キリストが親しくしておられたラザロが、死んで四日もたつたにもかかわらず、墓（ほら穴）の中から生き返らされたことが書いてあります。

聖書は神の靈感によつて書かれ、眞実のことが書かれています。奇跡によつて生き返らされた彼らも、後には、その生涯を終えて死ななければなりませんでした。これに対して、復活は新しい永遠のいのちに生きることであり、そこにはもう死はありません。復活の事実は、キリストによつて証明されました。キリストはエルサレム郊外のゴルゴタの丘で十字架にかけられ、息絶えました。ローマの兵士がその死を確かめようと、槍（やり）でわき腹を突き刺しました。「ただちに血と水が出て来

た」と記されています(ヨハネ一九・34)。遺体は十字架から取り降ろされ、その日のうちに、丘のふものにある新しい墓に葬られました。当時の墓は横穴式で、その入り口を大きな石でふたをし、封印して、さらに番兵に墓を守らせました。弟子たちが遺体を盗みに来るのを警戒したからです(マタイ二七・57—66参照)。しかし、三日目の日曜日の朝、墓を訪れた女たちは、墓の石が取りのけられ、空っぽなのを見ました。マグダラのマリヤは弟子のペテロとヨハネに急いで知らせ、驚いて走つて来た彼らも、墓が空っぽで、遺体を巻いた白い布が置き捨てられているのを見ました。復活したキリストが、最初にその姿を現されたのはマグダラのマリヤに対してでした(ヨハネ二〇・11—16参照)。

以上は、福音書の記者が実際の出来事を神の靈感によって記した記事ですが、パウロは、もしキリストの復活が事実でなかつたら、私たちの信仰はどうなつてしまふのかということについて論証

しています。

「キリストが復活されなかつたのなら、私たちの宣教は実質のないものになります。あなたがたの信仰も実質のないものになります。……もし、私たちがこの世にあつてキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です」(Iコリント一五・14—19)。

こう言つてから、次のように力強く断言しています。

「今やキリストは、眠つた者の初穂として死者の中からよみがえられました」(同20節)。

キリストは死んだ後、復活したそうですが、その後はどうしているのでしょうか。私たちとどんなかかわりがあるのでしょうか。

新約聖書を偏見なしにお読みになれば、イエス・キリストが文字どおり肉体をもつて復活されたことがわかります。復活については、四つの福音書とも、それを目撃した者か、目撃者から詳しく聞いた者でなければ書けないような書き方をしています。神から特別の啓示を受けた使徒パウロは、コリントにある教会の信者たちにあてた手紙の中に次のように書きました。

「キリストが復活されなかつたのなら、私たちの宣教は実質（価値）のないものになり、あなたがたの信仰も実質（意味）のないものになるのです」（1コリント一五・14）。

また、彼が最も大切なこととして伝えたのは、十字架と復活であるとも書き送りました。

さて、キリストは復活された後、どうしておられるかについては、聖書に基づいて説明いたします。

「イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現れて、神の国のこと語り、数多くの確かな証拠をもつて、ご自分が生きていることを使徒たちに示された」（使徒一・3）。

このみことばによつて、キリストは十字架にかかるて死なれ、三日目に復活された後、四十日の間、復活したからだで使徒たちに現れ、神の国のこと語られたことがわかります。

「こう言つてから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた」（同一・9）。

「こう言つてから」とは、イエスが使徒たちにキリストの証人となるように命じてから、ということです。それからイエスは、彼らの見ている前で、オリーブ山から天に昇つて行かれたのです。では、キリストはそこでどんなことをしておら

7. キリストのみわざについて

れるのでしょうか。十字架にかかる前の前、キリストは愛する弟子たちに最後の教えを説かれました。その中で次のように言われました。

「あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。……わたしのいる所には、あなたがたをおもおらせるためです」(ヨハネ一四・2、3)。

つまり、キリストが天へ昇られたのは、地上にいる信者のために住む場所を備えるためです。キリストが迎えに来られる前に世を去った信者は、その靈がただちにキリストのみもとに行きますが、生きている信者は、やがてキリストが迎えに来られるとき、キリストの御力によって一挙に天に引き上げられ、いつまでもキリストとの幸いな交わりを楽しむことができるのです。

最後に、私たちとどんなかかわりがあるのでしようか。

「よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座につき、私たちのためにとりなしていってくださるのです」(ローマ八・34)。

このみことばは、まだ信じていない多くの人々のためにも適用できます。すなわち、神にそむき、滅び(地獄)に向かいつたましいが救われるようになると、キリストは常にとりなしておられるのです。今やキリストは、罪人を救うためのみわざを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれ、栄光、賛美を受けるにふさわしい方として、多くの御使いたちから礼拝を受けておられます。キリストの御力は、地上だけでなく、天にも及んでいます。今この瞬間も、あなたと私のために祈つておられるのです。キリストを信じ受け入れて、救いにあずかるように心からお勧めいたします。

イエス・キリストが三日目に墓からよみがえったのなら、なぜ自分で福音を全世界に伝えなかつたのですか。

あなたと同じような疑問を持つている方もきつとおられると思うので、紙面の許容範囲でお答えしましよう。

イエスさまは復活されてから四十日の間、弟子たちに現れて、神のことなどを語られ、彼らの見ている間に、天(神のお住みになるところ、第三の天のこと)へ昇って行かれました。昇って行かれたとき、弟子たちに次のように言われました。「聖靈があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたくしの証人となります」(使徒一・8)。

これは主イエスの弟子たちに対する約束であり、委任なのです。聖靈は、聖書の中では「助け

「主」とも呼ばれています。この約束が成就したことは、二章に詳しく記されています。また、マルコの福音書一六章一四節から二〇節までを読むと、主イエスの命令が次のように記されており、弟子たちはその命令を実行しました。

「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。……主イエスは、彼らにこう話されて後、天に上げられて神の右の座に着かれた。そこで、彼らは出て行つて、至る所で福音を宣べ伝えた。主(イエス)は彼らとともに働き……」。

このようにして、初代教会時代から今日に至るまで、福音は全世界に宣べ伝えられているのです。

なお、キリストが地上におられたとき、弟子たちに言わされたおことばの意味を考えてみましょう。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行うわざを行い、

またそれよりもさらに大きなわざを行います。
わたしが父のもとに行くからです」(ヨハネ一四

・12)。

「わたしの行うわざを行い」とは、主が使徒たちに、悪霊を追い出す力や、病気を治す力、すなわち奇跡を行う力をお与えになつたことを言い、「それよりもさらに大きなわざを行います」とは、前述のような奇跡を指しているのではなく、主が地上でなされた宣教活動よりも、その影響力の及ぶ範囲が、聖霊の力により、大きくなることを意味するのです。今、キリストは天の神の右の座におられ、弟子たちの祈りに答えて、弟子たちにキリストの力——聖霊を与えてくださつているからです。

結論として申し上げると、キリストはいつまでも地上におられるのではなく、神の栄光をお受けになるため、天に上げられ、神の右の座にお着きになり、ご自分の代わりとして聖霊を遣わし、全

世界にいる信者たちの心に内住させ、信者たちをとおして福音を伝えておられるのです。

8

救
い
に
つ
い
て

二千年前に十字架で死んだと言われるキリストが、なぜ現在の私たちと関係があるのでしようか。

このご質問は、聖書に示されている神の永遠性と、聖書の中心的主題であるイエス・キリストについておわかりにならないところに、問題があるのです。

まず、神の永遠性は、神の本質なのです。本質とは、そのものとして欠くことのできない最も大切な根本の性質・要素です。時間には過去・現在・未来がありますが、永遠にはそれがありません。永遠は、最初も最後もなく、全然制限のない無限の期間である常住的現在と言えましょう。ところが人間は、現在を起点として、過去あるいは未来の二方向に際限なく広がっている時間としてしか、永遠を考えることができません。あなたの疑問のもとはここにあるのです。神の永遠性について、聖書は次のように語っています。

「主よ。あなたは代々にわたって私たちの住まいです。山々が生まれる前から、あなたが地と世界とを生み出す前から、まことに、どこしえからとこしえまであなたは神です」(詩篇九〇・1、2)。
 「主は永遠の神、地の果てまで創造された方」(イザヤ四〇・28)。

補足的に説明しますと、神は時間の中に生きておられるのではなく、永遠の中に生きておられます。したがって、神にあつては、(過去・現在・未来といった)時間的な前後関係も、時間的隔たりというものもないのです。

さて、キリストが約二千年前に十字架の上で死なれたことは、歴史的事実です。さらに聖書は、キリストは死んで葬られ、三日目に復活されたと明記しています。この十字架と復活こそ、キリストによる救いの根拠となるのです。「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられた」(ローマ四・25)と聖書に記されています。

さて、まったく罪のない正しい人であったイエスが、なぜ十字架で死ななければならなかつたのでしょうか。それは、人間を罪と死（永遠の滅び）から救つてくださるためでした。そのようにして神のみこころが成就し、神の代々にわたるご計画の中で最も大切なことが実現したのです。キリストは、神のみこころに従順であられたがゆえに、十字架の上で死なれたのです。人間の罪について考えてみましょう。人間の不幸の根本原因は、心の中に住みついている罪であると、聖書は示しています。「すべての人は、罪を犯した」（ローマ三・23）とも記されています。自分の罪、そしてその結果である死の解決は本来、自分自身がすべきことですが、そのすべきであつてなし得ないとを、私たちに代わつてなし遂げ、身代わりとして死んでくださつたのが、イエスの十字架です。イエスの贖罪は、旧約聖書に数多く預言されており、イエスご自身も弟子たちに話しておられたことであり、偶發的な事件ではなかつたのです。

聖書を謙虚な心で読むとき、神の御靈みたまが働き、二千年の時の隔たりを超えて、イエスの十字架が自分の罪のためにあつたことを信じ受け入れることができるのです。「私たちがまだ罪人であつたとき、キリストが私たちのために死んでくださつたことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます」（同五・8）と聖書に記されています。

この真理のみことばを信じ受け入れて、たましいの救いを得られますようにお祈りいたします。

聖書に記されている「救い」について説明してください。

聖書が示す「救い」とは、端的に言えば、人間の罪による、死とさばき、永遠の滅びからの救いです。多くの宗教が教える救いは、普通一般には、貧乏や病気（ことに難病）などからの解放を意味します。伝統ある高級な信仰にしても、せいぜい心の「安らぎ」とか、安心立命の境地に達することを指しているのにすぎないのでしょう。

死とさばきについて説明します。聖書には次のとおり記されています。

「罪から来る報酬は死です」（ローマ六・23）。

「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」（ヘブル九・27）。

初めのみことばの意味は、罪の生活によって得られる結果は死であり、これは単に肉体的な死だけではなく、神から分離された靈的死、さらに最

後のさばきにおける永遠の死（第二の死）をも意味するのですが、この二つの死についてはかなり説明が必要ですので、紙面の都合もあり省略します。要約しますと罪の結果は神ののろいを受けることになるのです。

死後のさばきについて簡単に説明します。地上に生きていた間にキリストの救いを受け入れないで死んだ靈は、死の瞬間に「よみ」（ハデス）の苦しみという場所に行き、一方、肉体はどうなるかと言いますと、ご存じのとおり、墓に葬られ地に帰りますが、世の終わりに超自然的な神の力によりよみがえらされ、よみに入れられていた靈と結びつき、「大きな白い御座のさばき」を受けます。

現在の地球の大気圏が、高熱の火で焼け溶けて跡形もなくなった後、空中で厳肅なさばきが行われます。それはキリストの救いを受け入れなかつた歴代のすべての人間を対象としたものです。肉親家族や親しい友が永遠の火の池に入れられるることは、考えただけでも悲しいことです。

聖書に示されている救いは、前述したように、ただ単に難病からいやされるとか、極度の貧困から解放されるといったものではなく、罪と罪を犯した結果受けなければならない死とさばき、永遠の滅びからの救いであることを知つてください。愛なる神はその道を備えてくださいました。それは、神のひとり子であられるキリストの十字架の血による贖い^{あがな}、身代わりの犠牲による救いです。救いの確かな保証としてキリストは復活されました。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになつたほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ三・16)。

聖書の中に「贖い」ということばがよく出てきますが、わかりにくいで、説明してください。

国語辞典を調べると、「(罪などの)代わりをする」とあります。これだけではわかりにくいでしようから、聖書的観点から紙面の許容範囲で説明します。

もともと、贖いは、人々を奴隸の状態から解放して自由にするとか、あるいは、もともと自分の物であつたものを、代価を払つてもう一度買い戻すことを意味することばです。では、なぜ聖書の中にはこのようなことばが出てくるのでしょうか。それは次のようない理由からです。私たち人間はもともと神に創造された者で、神のものでした。ところが、人類の先祖アダムが神の命令にそむき、神に對して罪を犯し、エデンの園(楽園)から追放され、神から離れてしましました(創世記二、三)

(章参照)。その結果、アダムの罪は全人類に及ぶことになり、すべての人は、例外なく、罪の性質を持って生まれ、靈魂と肉体の死は避けることができなくなり、また、死後に神の公正なさばきを受けることも定められています(ヘブル九・27)。これらはすべて人間の墮落の結果であることが聖書に記されています。人類が、罪と死と永遠の刑罰から救われるには、だれか罪のない者が代わりに刑罰を受けて死ななければなりません。しかし、人類の中には、罪なき者はひとりもいません。「すべての人は、罪を犯したので、神からの榮誉を受けることができず……」(ローマ三・23)と記されていります。そこで、愛なる神は、罪のないご自分のひとり子、イエス・キリストをこの世に遣わし、彼が十字架上で死んで、全人類に代わつて刑罰を受けてくださることによつて、すべての人がその罪を赦され、死と永遠の刑罰から救い出される道をお開きになつたのです。つまり、聖書で言う贖いとは、神が、罪なき神のひと

り子、イエス・キリストの血の代価を払つて、人類を罪と永遠の刑罰から解放して、もう一度ご自分のもとされることを言うのです。

ところで、この「贖い」ということばは、今日ではあまり使われないことばです。自分で救うことのできない窮境にある人、あるいは、いのちの危険にさらされている人のために、他の人が代価または代わりになるものを払つてその人を救い出し、そのいのちを守り、全うさせるという意味でこのことばが使われています。実際に神にそむいているために神の怒りから逃れることのできない者のために、その罪を赦し、罪の束縛から解放してくださいるために、キリストが十字架についてくださり、逃れる道となつてくださった、そういうことを指してこの贖いということばが使われています。

「この方（イエス・キリスト）にあつて私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています」（エペソ一・7）。

キリストが十字架の上で流された血、すなわち、キリストのいのちという代価によつて贖いがなされたと言うのです。そのことは罪の赦しと同じ事実を指しています。贖いということばは、ただ最初に救いに入れられるということだけではなくて、救わされてから神の所有とされた者に与えられる安全も意味しています。イザヤ書四三章一節には次のように記されています。

「だが、今、ヤコブよ。

あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。

イスラエルよ。

あなたを形造つた方、主はこう仰せられる。

『恐れるな。わたしがあなたを贖つたのだ。

わたしはあなたの名を呼んだ。

あなたはわたしのもの。……』。

悔い改めについて説明してください。

「悔い改め」ということばは、聖書に何回も記されています。参考に、聖書語句辞典を調べると、旧約には二二回、新約には約五二回も記されています。これは悔い改めの教理が重要であることを意味していると思います。

悔い改めとは、文字どおりに理解すれば、心情あるいは心意の転回です。つまり、心の変化と方向の転換が含まれています。今まで行ってきたことを、もはや行わないと決心することです。このことは人生の方向と行状の変化を意味しています。キリストが話された放蕩息子のたとえ（ルカ一五・11—24 参照）は、この意味をよく表しています。

後悔の念、決心、告白（懺悔）^{さんげ}は、悔い改めそのものではありません。「悔い改め」と「後悔」を混同しないために、聖書にある実例によつて、その違いを説明しましょう。イスカリオテ・ユダはイエス・キリストを銀貨三十枚で売つてしまいまし
 た（マタイ二七・1—5 参照）。彼は、キリストが十字架の刑に処せられることを知つて、自分の罪の恐ろしさに悩み、良心の呵責にさいなまれ、断腸の思いで、罪をのろい、罪を悲しみました。この場合、ユダは後悔したのであって、悔い改めたのではありません。ですから、彼はもらった銀貨を神殿に投げ込んで、ついに首をつって死んでしまいました。聖書は言つています。

「神のみこころに添つた悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします」（Ⅱコリント七・10）。

このみことばは、ユダのように、どれほど深刻に後悔して自分の罪を悲しんでも、それは救いに至る悔い改めではないことを示しています。

悔い改めと罪の赦しが密接な関係を持つていることは、聖書がいつも明らかにしていることで

「主を求めよ。……惡者はおのれの道を捨て……主に帰れ。……私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいさるから」(イザヤ五五・6、7)。

ここには悔い改めということばは出できませんが、罪の生活を捨てて主に帰るということは、聖書が言う悔い改めにはかなりません。もう一つ、次のことばも密接な関係を持つてることを示しています。

「あなたがたの罪をぬぐい去つていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい」(使徒三・19)。

罪をぬぐい去つていただくとは、罪が赦されることです。また、ここで悔い改めるということばに加えて、悔い改めることをさらにはつきり示す「(神に)立ち返る」ということばが用いられています。悔い改めるというのは、一人ひとりがすることです。悔い改めは神がさせてくださることです。そのことは、聖書にはつきり示されています。「反対する人たちを柔軟な心で訓戒しなさい。

もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださいさるでしょう」(Ⅱテモテ二・25)。

「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになつたのだ」(使徒一一・18)。

ここで、悔い改めが神のみわざによることがはつきり言われています。悔い改める心をお与えになったのは、神なのです。

新生について説明してください。

国語辞典を調べると次のように書いてあります。「①新しく生まれ出ること。②生まれ変わった気持ちで人生に再出発すること。特に、信仰によつて心の一変したさま」。

聖書的意味では、罪ゆえに滅びに向かっていた人間、すなわち、神から離れて罪の中にあつた人間が、キリストに現された神の恵みによつて、聖靈の働きにより、靈的に新しい人、すなわち神の子どもとされることを言います。新生の觀念は、新約聖書の中に、多くの用語によつて表現されています。「神によつて生まれる」(ヨハネ一・13ほか)、「新しく生まれる」(同三・3、7ほか)、「御靈によって生まれる」(同三・5、6、8ほか)、「死からいのちに移つた」(同五・24ほか)。新生とは、一口に言えば、罪過と罪との中に死んでいる靈魂に、御靈によつて生命が伝達される

ことです。御靈によつて生まれるということは、人間には十分理解できませんが、ただ神によつてのみ、成し遂げられる事実なのです。新生はキリストを信じ受け入れる者の内側に生じる變化で、靈的誕生を意味します。

次に新生(生まれ変わり)の必要性について考えてみましょう。なぜ人間は新しく生まれる必要があるのでしようか。生まれながらの人間は、神に対して靈的に死んでおり、神と交わることはできません。神の国を見たり、神の国に入るためには新しく生まれることが必要です。見たり入つたりすることは、体験することです。神の国は靈的な領域で、新生によつて、初めて体験できる世界です。人間が持つていらない靈的な新しいのちを持つために、新しく生まれる必要があります。

次に、どのようにして新しく生まれるのか説明します。聖書は生まれ変わり(新生)の三つの原則を示しています。

(1) 神のことばを信じることによります。みことばは、まず、人に次のことを悟らせるのです。

①人は「失われた状態」(神を離れ迷い出た)にあること(ローマ三・10—19)。

②救いのために用意してくださった神の愛(ヨハネ三・16)。

③罪人の救われる道。「あなたがたが新しく生まれたのは……生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです」(Iペテロ一・23)。「父(神)はみこころのままに、真理のことばをもつて私たちをお生みになりました」(ヤコブ一・18)。

(2) 聖霊の内住によります。聖霊の働きは次のようにものです。

①神のことばを用いて、人々に罪を悟らせる。

②キリストを信じるように導く。

(3) 信じる者に聖なる性質を与え、靈的などと

を理解し、行う能力を授ける。

④新しく生まれた人々を、あらゆる真理に導く。新生は感情の問題ではなく、確信すべき事実です。

(3) 身代りとしてのキリストの犠牲を信じることによります。キリストは次のように言わされました。「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあつて永遠のいのちを持つためです」(ヨハネ三・14、15)。このように、旧約聖書(民数記二一・4—9)の出来事とおして、この新しい生命がどのようにして罪人に与えられるかを、きわめて明瞭にお示しになりました。生まれ変わりは、どんな罪深い者でも、キリストを救い主として信じ、受け入れた瞬間に起こります。

聖書に書いてある和解について説明してください。

「和解」は、新約聖書において、パウロの書簡に用いられていることばです。それは、第一に、「世に対する神の和解」の意味に用いられています（ローマ五・10、11、コロサイ一・20ほか）。第二には、「人と人との和解」についてもわずかに記されていますが、省略します。

(1) 世に対する神の和解のみわざ
この「世」とは、いわゆる世界という意味ではなく、神を離れ、神に敵対する私たち人間を意味するものです。

まず第一に考えるべきことは、和解は神と人の相互的な関係によって成り立つものとは考えられていない、ということです。和解はあくまでも、神の恵みのみわざです。コリント人への手紙第二の五章一八、一九節によると、「これらのことばすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちを「自分と和解させ……」とあります。されど、人に対する神の一方的な恵みのみわざが強調されており、したがつて、「和解させ」という能動態が用いられています。一方、ローマ人への手紙五章一〇節によると、「もし敵であつた私たちが、御子の死によつて神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが……」と述べ、みな受動態になつています。パウロは「(御子の)十字架の血によつて平和をつくり、御子によつて万物を、御子のために和解させてくださつたからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によつて和解させてくださつたのです」(コロサイ一・20)と述べています。

(2) 神との交わりの回復

神の和解のみわざによつて、神と人との交わりが回復されました。かつて、わたしたちは「敵」であり（ローマ五・10、コロサイ一・21）、した

がつて、人と人も、互いに「隔ての壁」(エペソ二・14)をもつて相対していました。

神に対する敵対ということは、人間の神への敵意であるとともに、神が人間の罪に対して、怒りをもつて臨んでおられることを意味しています(ローマ一・18)。人間はその罪の責めを負い、常に、不安と絶望と死の中に投げ込まれているのです。この神の怒りと人間との関係は、神の和解のみわざによって回復され、愛と平和が与えられるのです。それは、神のひとり子、イエス・キリストの死という代価を払うことによつてでありますた。

(3) キリストの死による和解

神の和解のみわざは、キリストの死(十字架の血)によつて与えられました(ローマ五・10、コロサイ一・20—22)。パウロはキリストの死を、神の愛のみわざととらえています。神の怒りの下にある人間が、自分のわざによつて神との和解

を求める道は閉ざされており、ただキリストの死をとおしてのみ、神の側からその道を開いてくださつたのです。「十字架の血」ということばは、旧約聖書(レビ記)からのいけにえの概念を受け継ぐものです。「神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によつて、あなたがたを『自分と和解させてくださいました』(コロサイ一・22)という表現は、死においてその頂点に達したキリストの人性、すなわち、死に至るまで神に従順であられた人としての神性質を強調するものです。神の和解を受け入れられますように。

モーセの十戒とキリストとはどんな関係があるので
すか。

十戒は大きく二つに分けることができます。第一

は、神に対する人のあり方で、それは第一戒から第四戒までの四つの戒めであり、出エジプト記二〇章二一一節に記されています。第二は、人に対する人のあり方で、それは第五戒から第十戒までの六つの戒めであり、同じ箇所の一二一一七節に記されています。

イエス・キリストは律法の専門家に答えていました（マタイ二二・37-40）。キリストの教えの中に十戒に基づくものが見られ、そこには律法の完成者としての姿が示されています。

マタイの福音書五章に、「いくつかその例が示されています。キリストは「律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません」（同五・18）

と言われましたが、真に律法を生かし、成就されたのはキリストご自身でした。

「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである」（ヨハネ一・17）。

ここでキリストはモーセと対照的に書かれていますが、十戒の精神は、新約において、キリストによつて生かされ、成就されたことが、聖書を学んでいくとわかつてきます。

モーセはシナイ山で神から十戒とその他の律法を受けられました。モーセの十戒とキリストとは深い関係のあることがおわかりになったでしょうか。

聖書が語つていてるように、人間は生まれながらの罪人であり、人性はまったく神の靈的な律法に敵対し、すべての人が律法を犯して有罪とされていますから、律法が私たちに神の義を示せば示す私たちの不義と咎とはすべて、律法の証言によつ

て有罪とされます。使徒パウロは次のように記しています。

「私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。なぜなら、律法を行うことによつては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によつては、かえつて罪の意識が生じるのです。しかし、今は、律法とは別に……神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であつて、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません」(ローマ三・19—22)。

神は、律法という手段によつて人間に弱さや汚れを覚えさせた後、神の力とあわれみに信頼させて、私たちを慰めてくださいます。それを明らかに示してくださいた方がキリストです。したがつて、律法はキリストに来る予備的な段階と言えましょう。信じて救いにあずかりますように。

なぜ、行いによらず、信じることにより救われるのですか。

聖書によれば、人間は神のかたちに、すなわち、人格を持つた完全な者として造られました。神と交わることができる自由な人格者として造られたのです。ところが、与えられた自由を乱用し、神の戒めを破り、不従順の罪を犯してしまいました。それゆえに、すべての人は生まれながらに、その性質が腐敗しており、善に対してもつたく無能力となつて、悪に傾いています。これを聖書の教理用語で「原罪」と言います。

このようなわけですから、人間は生まれてきてから何か罪を犯したから罪人であるというではなく、生まれながら罪人であり、この原罪がもとになつて、さまざまの罪の行為が出てくるのです。それは高慢、ねたみ、憎しみ、官能的欲望、悪い欲望といった内面的な罪と、詐欺、盗み、殺人、

姦淫といつた外面向的な罪です。

以上、聖書に示された罪について説明しましたが、要するに人間は生来罪人であり、だれひとりとして、聖い神の前に、自分は良心に一点のやましいところもないと、言うことのできる者はないことを知つてください。それほど人の心は悪にそまり、罪を宿しているものです。

全知全能の愛と恵みに富んでおられる神は、人間が完全に律法を守ることができないこと、罪を犯したまま死ぬと死後にさばきがあり、永遠に滅んでしまうことを知つておられますので、恵みのゆえに、滅び行く人間のため、救いの道を備えてくださつたのです。それは、ひとり子なるイエス・キリストをこの世に遣わし、キリストの上にすべての人の罪を負わせ、この方を、神の義をもつてさばくという方法でした。キリストはみずから十字架にかかるて血を流し、私たちの罪のために死んでくださいました。そして救いの確かな保証として、つまり、私たちが義と認められるた

8. 救いについて

めによみがえられました。キリストの十字架の御死と復活を信じるときに罪は赦^{ゆる}され、義なる者と認められ、永遠のいのちをいただくことができるのです。これ以外には救いの道はありません。

どんなに悪い人（たとえば殺人者）でも、イエスさまを信じるだけで救われるのですか。

聖書に示されている救いは、私たちが（難行苦行など）努力して達するものではなく、神がくださるものです。聖書に次のように記されています。

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によつて救われたのです。それは、自分自身から出たことはなく、神からの賜物です。行いによるのではありません。だれも誇ることのないためです」（エペソ二・8、9）。

「恵み」とは原語（ギリシャ語）で「カリス」ということばが使われています。これは、神の温かいみこころの中で、赦^{ゆる}すということに強調点が置かれており、また神のすばらしい救いを、私たちに無償の贈り物として与えてくださるということを表しています。私たちが神の恵みによつて救われ

たということは、その救いが神からの賜物であるということを表しています。しかも、その信仰さえも神の賜物なのであって、救いの源はただ神にあります。この恵み深い神は、特性として義（ひとかけらの不義も許さない厳しい義）と愛（けた外れの愛）であられるお方であることが聖書に明らかに示されています。

前置きが長くなりましたが、お尋ねに対して、次に記す聖書のみことばによつて説明します。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになつたほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」（ヨハネ三・16）。「ひとり子」というのは、特別な、他に類のない子という意味のことばで、イエス・キリストご自身のことを指しています。「世を愛された」とは、神が、ご自分にそむいている世の人々を愛されたということです。「滅びることなく」とありますのが、滅びると

は、存在がまつたくなくなってしまうというのではなく、神ののろいを受けて神から引き離され、永遠にもだえ苦しむことです。それは神の恐ろしい公正なさばきの結果なのです。「永遠のいのち」とは、キリストを信じる者に恵みとして与えられる靈的ないのちのことで、永遠に続く神の祝福です。救いの結果与えられるものです。ただ、御子、すなわちイエス・キリストを信じることによつて与えられるものです。「御子を信じる者は永遠のいのちを持つ」(同36節)と記されています。イエスは本来、神の御座である天におられたお方ですが、父なる神のみこころに従つて、この地上に人間の姿を取つてお降りになり、そのご一生は聖く、少しも罪を犯されたことがなく、旧約聖書に預言されているとおりに、すべての人の罪、咎をご自分の身に負われ、私たちの身代わりとして義なる神の正しいさばきをお受けになり、十字架の上で血を流し、犠牲の死を遂げてくださいました。その死を神が受け入れてくださった救いの保

証として、三日目に墓の中から、神の大能の力によつてよみがえられました。イエスの十字架の死と復活を信じることによつて、どんな罪人も救われるのです。救われるとは、罪が赦され、神の前に義と認められ、新しく生まれ変わり、永遠のいのちをいただくことです。イエスといつしょに十字架につけられた犯罪人のひとりは、イエスの神々しいお姿に心を打たれ、「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください」と言いました。そして、イエスさまとともにパラダイスに入る約束を与えられました。

殺人という大きな罪を犯し、法に従つて死刑に処せられたとしても、生前に、へりくだつた心をもつて真心から神に対し悔い改め、イエスを救い主として信じ受け入れるなら、その人は救われるのです。イエスの十字架の血による贖い、すなわち罪の赦しは完全ですから、どんな悪人をも救つてくださいます。神の恵みは豊かです。

イエス・キリストを信じる者は、罪から救われたとか、罪からきよめられたとよく言いますが、信じてからも罪を犯しているように思います。キリストの救いは、完全ではないのでしょうか。

まず結論を先に申し上げましよう。キリストの救いは完全です。このことは次に記す神のみことばによつて明らかです。「キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持つておられます。したがつて、『自分によつて神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります』（ヘブル七・24、25）。

「キリストは自分自身をささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられたからです」（同27節）。

また、イエス・キリストが十字架上で呼ばれた第六番目のおことばは「完了した」（ヨハネ一九・30）でした。何が完了したのでしょうか。これは、

彼が、罪深い人間を救うために、天（神の御座）から地上に降つて来られた目的と使命をすべて果たし終えられたことを意味します。永遠にわたる人類の救いが、彼の十字架の死によつて完全に成就したのです。これは歴史的事実です。完全であることを示すみことばがもっとありますが、紙面の関係で割愛します。

救いは過去、現在、未来にまたがっています。過去については、キリストは私たちの罪のために、身代わりとして十分な神の刑罰を受けてください出されています。現在は罪の力、すなわち、その支配から救われるのです。これは聖霊の内住（信じる者の心の中に住んでくださること）により、聖なる性質を受けることによつて、罪の支配から解放された生活を送ることができます。だからと言って、「信じる者は罪を犯す可能性がない」というではありません。というのは、信じる者もまだ「肉」（生まれながらの自我、古い性

質)と呼ばれる悪い性質を持つてゐるからです。しかし、次の三つのことを忠実に実行することによつて、現在の罪からの救いは、神の力によつて守られることがわかります。

- (1) 聖書を学び、神のみこころに従うこと。
- (2) 毎日、神に祈り、神と交わること。
- (3) 罪を犯したならば、すぐに神に告白して、罪から離れること。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は眞実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(ヨハネ一・9)。

未来については、罪の存在そのものから完全に、確実に救われるのです。その時はいつでしょうか。信者の死の時(IIコリント五・1-8参照)か、キリストの携挙(空中再臨)の時(信者を迎えてくださる時。Iコリント一五・50-52、Iテサロニケ四・15-17)。

余白に、「立場」と「状態」について簡単に説明

します。聖書が教えている立場と状態の区別をはつきり理解することが大切です。立場とは、神の御前に罪なく立つことができるることであり、状態とは、私たちのたましいの実際のありさまに関することです。立場は永遠かつ不变ですが、状態は変化し、信じる者がどのように神の前に敬虔に歩むかによります。信者はすでに神の子どもという幸いな立場を与えられていますが、この幸いな状態が完全に実現されるのはまだ未来のことです。キリストが再臨される時です。あなたもイエスの十字架を信じてこの幸いを得られますように。

9

救いの確信を持つために

私はキリスト教会(教会)に一年近くも通い、聖書の話を聞いています。信じたいと思っているのですが、なかなか信じられません。どうしたら信じられるでしょうか。

このようなお尋ねは多くの求道者からも尋ねられる質問です。「信じたいと思っている」と言つておられますか、心の底からそう思つておられますが、心の底からそう思つておられました。イエスは次のように言われました。「医者を必要とするのは……病人です。わたしは……罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです」(ルカ五・31、32)。

ここには、イエスのもとに来ることができるのは罪人であるという、はつきりした限定が下されています。ここで言う罪人は、自分の弱さ、無力さを知つて、その罪を自覚し、悲しんでいる人のことです。そのように自分の弱さを知り、自分の無力を自覚した人は、病人が医者のところに行く

ように、信仰の門をたたき、ついに信仰によつて救いを受ける者となるのです。

つまり、あなたは、ご自分の弱さや無力を本当に自覚なさらず、自分の理性や意志の力によつて信じようと努めてこられたのではないでしようか。では、自分の弱さや無力を本当に自覚するためにはどうすればよいでしょうか。聖書のみことばによつて、自分を顧みるのです。

「神よ。私を探り、私の心を知つてください。私を調べ、私の思い煩いを知つてください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください」(詩篇一三九・23、24)。

「あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは」(同八・3、4)。

なお、詩篇九〇篇を敬虔な心をもつて朗読して

みてください。そこには、神の永遠性、そして人の人生のはかなさが、実に莊厳な響きをもつて歌われているではありませんか。

「（イエスは）また言われた。『人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盜み、殺人、姦淫^{かんいん}、貪欲^{どんよく}、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです』（マルコ七・20—23）。

イエスが言われたこのみことばをもつて、あなたの心を透視してみてください。そうすれば、私たち人間の心はどんなに罪と汚れに満ちており、道徳的に弱い者であるかがわかります。ローマ人の手紙の七章一四節から二四節までをお読みください。そこに、使徒パウロの深刻かつ赤裸々な告白が記されています。これをご自分の問題として受け入れてください。そのとき、あなたは、ご自分の無力さ、弱さを知り、へりくだつた心を

もつて、全知全能の神が遣わされたイエス・キリストを受け入れるように導かれます。

結論的に言いますと、ご自分の理性や意志の力で信じようとはしないで、意志を明け渡し、心低く素直にみことばに聴き従い、それをとおして働く聖靈を信じ待ち望んでください。そうすれば、主は必ず聖靈を与える、すなわち、聖靈はあなたの心に宿つてくださり、救いの確信が与えられます。

キリストは、みんなの罪を背負つて、身代わりに罰を受けてくれたと、ずっと聞かされてきて、理解したけれど、正直言うと、自分とのかかわりをいまいち実感できないのですが。

人は、キリストについて聖書に記されている多くのことを知っていても、キリストを信じていなことがあります。つまり、ただの知識は本当の信仰ではないのです。頭でただ知つており、それが真理であると認めていても、それは信仰ではありません。したがつて、たましいの生まれ変わり、すなわち、新生を経験したとは言えません。

キリスト集会の日曜学校で福音を聞いてきたり、ミッショント・スクールで中学校、高校さらには大学で神学を学んだりして、聖書の知識は人並み以上に優れているとしても、たましいの救いを得ることはできません。ヨハネの福音書の三章一節から一六節をよく考えながら読んでみてください

い。ニコデモは指導者であり、イスラエルの教師であると、イエスさまから言われた人ですが（10節）、イエスさまの証しを受け入れませんでした。五節に記されているように、「水と御靈によつて生まれていなかつた、つまり、まだ新しく生まれておらず、靈の領域である神のご支配の下になかつたからです。

もう少し詳しく説明してみましよう。まず、聖書のみことば、特にイエスさまや使徒たちが言ったことばを心から信じ、信頼し、受け入れて従うときに、たましいが新生し、聖靈が内住なさいます。これを、約束の聖靈で証印を押されたとも言います（エペソー・13参照）。新生も聖靈の内住も、キリストを信じた瞬間に起こります。

聖靈はその人の心に真理を示して、自分が神の前に、失われた（神を離れて迷い出た）、罪深い者であることを悟らせてくださいます。神のみことばとともに働いて、「眞の悔い改め」と「キリストを救い主と信じる信仰」に導いてくださいます。

単に頭で理解しただけでは、新しく生まれることはできないことを知つてください。「自分とのかわり」と言つておられますかが、キリストが私たちのためにいのちを捨てられたことは、福音書にも新約の書簡にも記されているでしょう。私たちの中にあなた自身も含まれているのです。他人事のように思つていてはいけません。聖書はあなたの罪深さを示しています。救いと感情の問題と言つてよいでしょう。救われているという事実と、救われていることとは別のものです。

実際にあつた出来事だそうですが、ある人が溺れかかっていました。幸いその人は救命ボートに助けられましたが、まだ気を失つていました。ところが、病院に運ばれ、手当てを受けていましたが、徐々に意識が回復し始めました。すると急に、「助けてくれ！ 助けてくれ！」と大声で叫んで、もがき始めたというのです。この人は、まだ自分が水の中にいると思っていたのでしょう。し

かし事実は、救われて病院のベッドの上にいたのです。このことは靈の領域でも同じです。実感がわかないからといって、感情の面ばかり気にするのではなく、十字架上のキリストに目を注ぐことが大切です。そこでキリストは、あなたの罪を背負つて、身代わりに釘づけにされました。何という驚くべき愛でしよう。あなたの罪のために苦しめられ、血を流されたイエス・キリストの愛を思えば、感謝せずににはおれないのではないでしようか。

長い間求道している者です。自分ではイエス・キリストを救い主として信じているつもりです。しかし、自分の罪のために、イエス・キリストが十字架にかかる死んでくださったという実感がありません。どうしたら、救いの実感が自分のものとなるでしょうか。

続けて求道しておられる」とをうれしく思います。イエスさまを「救い主として信じているつもりです」とのことですが、もつとはつきりと、みことばによつて、信じ受け入れることが肝要です。「受け入れています」、「受け入れました」といつた確信に立たなければなりません。お尋ねの問題は、一口に言えど、「救いと感情の問題」と言つてよいでしょう。これは、まじめに救いを求めておられる人が、しばしば突き当たる問題です。

そこで、まず初めに申し上げたいことは、救わ

れているという事実と、救われていると感じる感情とは別のものであるということです。つまり、あなたが心から罪を悔い改め、イエス・キリストを救い主として受け入れておられるならば、罪が赦され、神の子どもとされていることは事実なのであります。この事実の確認は、神のことばである聖書によらなければなりません。

「この方（イエス・キリスト）を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特權をお与えになつた」（ヨハネ一・12）。「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださつたと信じるなら、あなたは救われるからです」（ローマ一〇・9）。

ほかにも、いくつか適當なみことばが記されています。これらのみことばを素直に信じ、みことばに堅く立つときに、救いの確信が与えられます。たとえ救われているという実感がなくとも、救われているという事実に変わりはないのです。

たとえ罪が赦されたという実感がわいてこなくとも、キリストを受け入れているかぎり、救われているという事実に変わりがないということを知ってください。クリスチヤンの信仰生活について、次のように言つた人がいます。

「私たちの信仰生活は、三人の人がそれぞれ『事実』『信仰』『感情』という札を背中につけて、高い堀の上を歩いているようなものだ。『信仰』が『事実』にしつかり目を留めて歩いている間は、『感情』も正しくついて来る。しかし、もし『信仰』が『事実』から目を離し、『感情』は、はたして正しくついて来ているだろうか、と後ろを振り向くなら、『信仰』は足を踏み外して落ちるし、同時に、『感情』も地に落ちてしまう」と。この三つのことば、すなわち、事実、信仰、感情は、いつもこの順序で並んでおり、この配列順が重要なのです。この順序を狂わせたり、その一つを省いたり、これに余計なものを加えたりすると、救いの確信を得られないまま、絶望へと落ち込んでしまいます。

あまり実感がわかないからといって、感情の面ばかり気にしておられると、せつかくの信仰も落ちてしまふ恐れがあります。「感情」をあまり気にせず、十字架上のキリストという「事実」にしつかり目を留めるよう、注意しなければなりません。

イザヤ書五三章に預言されているイエス・キリストのご苦難や、この預言の成就として四福音書に記されている主のご受難の歴史的事実を、あなたの罪のためであつたと信じ受け入れるときに、その驚くべきイエスの愛に、心は碎かれ、溶かれ、感涙にむせび、感謝をささげることでしょう。

「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいなければども信じており、ことばに尽くすことのできない、榮えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです」(Iペテロ一・8、9)。

聖霊の証しがあなたに与えられますようにお祈りいたします。

「救いの確信を得るには、どうすればよいのでしょうか。

「救いの確信」とは、救われていることについて、固く信じて疑わないこと、また、その信念であると言つてよいでしょう。「信じる」とは言つても、救いの確信を持つていない人と、信じて救いの確信を持つている人とは、大きな違いがあります。前者の場合は、自分が救われているという搖るぎない自覚がいつもあるわけではないので、苦しみに遭つたり困難に襲われたりすると、へこたれてしまい、天候や自分の気分などによつて左右されることもあるつたりして、いつも不安定な考え方をしてしまいます。後者の場合は、少しごらいのことでは揺らぐことはありません。はつきり自覚しているから、いつでも平安でいることができます。

それでは、お尋ねにお答えします。救いにあず

かる信仰は、まず真理との出会いから始まります。その真理とはイエス・キリストご自身である、と聖書は語っています（ヨハネ一四・6）。捕らえ所のない抽象的な真理では決してなく、イエス・キリストご自身に現れた具体的な真理です。キリストご自身との人格的な出会い——そこに、信仰による救いの確信が生まれるのであります。では、キリストと人格的な出会いをするには、どうすればよいのでしょうか。知・情・意という三つの面から、キリストと向かい合わなければなりません。どれ一つ欠けても、確信は崩れてしまいます。

1. 真理に対する知識

まず、何を信じるのかが、頭の中で明確になつていなければなりません。それは次のとおりです。

- (1) 神はあなたを造り、愛し、あなたに最良の人一生を用意しておられる。
- (2) しかし、罪のために切り離されている。

- (3) キリストは罪のために十字架にかかり、神との和解（救い）を成就してくださった。
- (4) キリストを信じる者は、だれでも救われる。
- (5) キリストは死んだ後、墓に葬られたが、三日目に復活された。
- 救われるために必要な知識は、これで十分です。

2. 真理に対する同意

次に、真理への心からの同意が必要です。真理を慕わしく思い、それを受け入れて救われたいという願いがないなら、神もそのような人を救おうとはなさいません。

主として受け入れます。私の罪をお赦ゆるしください」と自分の口で祈ります。このように祈ったとき、聖書のみことばの約束によつて、あなたはすでに救われているのです。「人は……ただキリスト・イエスを信じる信仰によつて義と認められる（救われる）」（ガラテヤ二・16）。

救いは体験や感情の有無によつて確信するではなく、神のことばに信頼する信仰によつて確信するのです（ヨハネ五・13参照）。

3. 真理を受け入れる決心

真理を知り、同意しても、それを信じ受け入れる決断をしなければ、救いには結びつきません。同意したことは行動に移さなければならぬのです。つまり、「主イエスさま。あなたを私の救い

聖書からキリストの救いについてわかつてきました。しかし、一生信仰を全うする自信がありません。やつていいけるでしょうか？

信仰を持つということは、決して私たちの意志だけの問題ではありません。信じるということが自分の意志だけで決まると思っている人は、信仰 자체を間違って理解しているのです。信仰とは、単に意志の事柄であるよりは、知性、感情、意志をも含めた全人格的な事柄であり、しかもそれは信頼なのです。ですから何かを意志で決めてするということではなく、むしろ神の救いのみわざに対する全幅的信頼です。ということは、私たちの意志の強さとは無関係であります。

信仰を持つということは、単に、自分の意志や決断力によってできることではありません。神が私たちのうちに働いてくださり、その結果、私たちが信仰を持つのです。聖霊（キリストの御霊）のお働きなのです。ご質問の冒頭に、「聖書からキリストの救いについてわかつてきました」とあります。これも聖霊の働きです。どんなに救い主についての知識を持ち、その理解を得ても、それに対する全幅的な信頼に至るには、神の助けが

信じるということは、私たちの意志によつて統けていくべきことなら、意志の弱い人には不向きなものです。信仰というものは、私たちの意志や決断力にかかっているのではなく、むしろ、神の

9. 救いの確信を持つために

なければなりません。神が私たちのうちに働いてください

くださって、初めて信じることができるのです。

そして、信じ続けるということも、私たちの意志によることではなく、信じ続けることができるようには、神が私たちのうちに働いてくださるのであります。神を信じるということは、私たちが神を捕らえていることではなく、神が私たちを捕らえてくださっていることです。私たちが神を捕らえているのなら、人生の旅路に疲れて弱つてくれば、手を離してしまいかもしれない、つまり、信仰生活から離れ、自分勝手な生活をするようになるかもしれません。特に、意志の弱い人は不安でしょう。しかし、信仰とは、前述のように、神が私たちを捕らえてくださっているということです。ですから、弱い自分を見つめないでください。勝利者として生きておられ、世の終わりまでいつも私たちとともにいてくださるキリストに全幅的信頼をもつて従つてください。

信仰生活を全うするために必要なことを申し上

げます。

1. 事情が許すかぎり、集会（教会）に出席すること。集会出席の励行。

2. 毎日、少しずつでも聖書を読むこと。聖書通読の励行。

3. お祈りをすること。

4. 信仰の成長に役立つ靈的な信仰良書を少しずつ読むこと（どの本がよいかは、先輩によく聞いてから）。

平凡なことですが、お勧めします。

10

そ
の
他

私はキリスト集会（教会）へ行き始めて約一年になります。聖書の根本的な真理もかなりわかつてきました。近いうちに信仰を告白し、バプテスマを受けたいと思っているのですが、どういうわけか、近ごろ父親が反対します。どうしたらよいでしょうか。

まじめに求道され、大切な聖書の真理についてかなりおわかりになつたことは本当に感謝なことです。近いうちに信仰を告白し、さらにバプテスマも受けたいとのこと、これらのことはずべて、聖靈のお働き、導きによることです。そのような折りに、お父さんが反対され、さぞかし心を痛めておられるこことでしよう。

反対されるわけは何でしようか。あなたのことを見つあまり、反対なさると思うのですが、キリスト信仰に対する誤解や偏見が理由である場合も多いのです。聖書に啓示された福音を知らないために反対なさるのでです。ですから、あなたは身を

もつて福音のすばらしさを証しすべきです。その際、決して、自分がだけが真理を知っているのだとか、家族の者たちは罪人で哀れな存在なのだとか、いつた傲慢さは禁物です。あくまでもへりくだつた心をもつて、家族の一員として慎み深く行動するように心掛けてください。家族の方たちは、あなたの行いを見ているのです。聖書の教えを聞いて少しも変わることがなく、相変わらずわがままで、自分勝手な行いを続いているならば、反対されるのがむしろ当然ではないでしようか。自分のことを棚に上げて、迫害されているなどと思い違いをしてはいけません。

しかし、本当の迫害もあることを覚悟してください。それはキリスト信仰に対する誤解や偏見に基づくものです。そのような場合、キリスト信仰を嫌う理由をよく聞き、誤解を解くようになければなりません。それには、集会の長老（牧者）たちに相談し、力添えをいたたくことが賢明であると思います。近ごろ、お父さんが反対するよう

になつたとのことです、ご自分の日々の行いをよく反省し、子どもとして改めるべきところがあることがわかつたならば、素直に改めるようにしてください。勉学中の身で、まだ親に扶養されている場合は、信仰と勉強とを両立させ、バランスの取れた生活を送るよう心掛けてください。集会出席や聖書を読むことに熱心なあまり、勉強をおろそかにすることは、家族の中にあつて証しにはならず、かえつて逆効果をもたらすものです。いつも神さまを第一にすることは大切なことですが、家族に対する真心のこもつた「気くばり」を心掛けることも大切です。バプテスマを受け、キリスト集会（教会）の一員となると、名実ともに信仰生活の第一歩を踏み出されるわけですが、主イエスが言われた次の二ことばを忘れないでください。

「イエスは弟子たちに言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来てなさい。

い』（マタイ一六・24）。

お父さんといくら話し合つても、理解されず、ますます激しく反対されるようになった場合は、どうしたらよいでしょうか。よく祈り、神の導きを求めることがあります。信じる者は迫害されると聖書に記されていますから（マタイ一〇・34—38、II テモテ三・12）、それに耐えることができる力を主イエスからいただくようにしましょう。必要な衝突は避けなければなりませんが、かといって、安易な妥協は禁物です。

「神は眞実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます」（Iコリント一〇・13）。

福音の話を聞いて半年ほどになりました。まことの神を恐れ敬うべきことが次第にわかつてきました。仏式の葬儀や法事における未信者との付き合いはどうすれば良いでしょうか。最近、この問題が身の周りに起こつて動搖してしまいました。まことの神でないものを拝むことは、恐ろしくてできませんが、相手にうまく説明できず、悔しい思いをしました。

そのような心境になられたことは、聖靈があなたの良心に働きかけておられる証拠です。日本では、仏教に由来する行事、つまり葬儀や法事が生活の中に深く染みこんでいて、家族との日常生活の中に（位牌^{いはい}に朝夕合掌することなど）、また、義理として、親戚^{しんけい}や知人・友人との付き合いの中に根強く食い込んでいます。

ところで、あなたはまだ公式にはクリスチヤンとは言えませんが、聖靈のお働きにより、近いうちに、信仰告白へと導かれ、眞の信仰者になられ

ると思いますので、クリスチャンの立場ではどのように対処したらよいか、お答えします。

まず、旗色を鮮明にすることです。つまり、クリスチヤンであることを公に証^{あか}しすることです。ただ、注意すべきことは、謙遜な態度で証^{あか}することです。出席するのを断つても差し支えない程度の付き合いなら、出席しないほうがよいと思いまます。もしどしても出席しなければならない事情があるならば、出席し、遺族を慰め、手伝うことがあれば積極的に引き受け、皆さんと悲しみをともにしているという事実を表すことを心がけるとよいと思います。

一方、偶像礼拝を意味する焼香や、靈前に合掌するといつた異教的な儀式は、たとえ形式的にせよ、絶対に避けるべきです。しかし、このようにほかの人と違った行動を取る時には目立ちますから、集まっている人たちに誤解を与えかねません。それで、当事者に前もってよく説明して、了解を得ておくことが望ましいと思います。何も

言わないでおいて、その場でそのような行動を取ると、相手方の誤解を招き、互いの付き合いを損なうことがありますから気をつけてください。一方、事前に了解を得る機会がなかつた場合は、ほのかの人たちと同じようにしたほうがよいでしょう。

それは、聖い神の御前にあなたの良心が傷つくことになります。ですから、焼香や合掌をしなくても済むように、あなたのほうから、受付とか下足番などを手伝うことを積極的に引き受けではいかがでしょうか。

とにかく、お尋ねの問題は、あなたがこれからキリスト者として信仰生活を歩んで行かれる中で、しばしば遭遇なさることと思いますが、キリスト者は聖書のみことばをとおして神のみこころを知り、みことばに従つて歩まなければなりません。それこそが、神に喜ばれる生活なのです。

「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかを

わきまえ知るために、心の一新によつて自分を変えなさい」(ローマ一一・2)。

なお、この問題は、現実にはさまざまな場合がありますから、よく祈つて神から力と知恵をいただき、賢く振る舞つてください。私も、祈ることによつて、今まで守られてきました。そのことを申し添えて説明を終わります。

「クリスチャンはお墓参りをしないそうですが、なぜでしようか。

世間では一般に、「クリスチャンは先祖を祭らない、粗末にする」と言われていますが、日本では古来どのように先祖祭りが行われているでしょうか。ご承知のとおり、春と秋の彼岸、お盆、故人の命日の年四回行わっています。家庭では、仏壇に線香や供え物をあげて拝み、先祖の墓に行つても同じようなことをします。これらの行事が先祖祭りをする唯一の方法であると考えられているようです。他の日は先祖祭りをしないようです。ただ、信心深い仏教の家では、毎日、仏壇に線香や供え物をあげ、位牌^{いはい}を拝んでいるようです。

クリスチャンは、このような先祖祭りは絶対にしません。また、してはならないのです。それに次のような理由があるからです。まず第一に、唯一まことの神の嚴かな戒めだからです。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。……それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない」(出エジプト二〇・三一五)。

クリスチャンは、生けるまことの神以外のものを拝むことはしません。神が、眞実の愛をもつて私たちを愛してくださったからです。次に、先祖祭りの風習は根本的に間違っているからです。昔から習慣的にやっている先祖祭りの意義を仏教関係の文献で調べてみると、なぜ誤っているかわかるのですが、要するに、前述の諸行事は、習慣やしきたりにすぎません。私たち日本人は、先祖を尊ぶ美しい心を持ちながら、聖書のすばらしい真理を知らないがために、実際には、昔からの習慣やしきたりを繰り返していくにすぎません。

クリスチャンには墓参りはありませんが、墓掃除はあります。「参り」ということばは偶像礼拝につながるからです。前述したように、お墓に行つて、仏壇に供えるような物を供えて拝むのが

墓参りです。クリスチヤンは、聖書が禁じていること、特に、神に対する罪を犯さないよう心掛けていますから、そのようなことは絶対にしません。しかし、旧約聖書を読むと、親しい者や愛する者の遺体を丁重に葬つてることがわかります。ですから、クリスチヤンも、死んだ人の遺骨はその人の記念として丁重に葬るのです。

北欧のある国々では、お墓を非常に美しくしているそうです。一年中、花が咲いているような花園にしている所もあるそうです。それに比較して、日本の墓はどうでしようか。手入れの行き届いていない不潔な墓を時々見受けることがあります。聖書から見ても、クリスチヤンは墓をきれいにすべきだと思います。仏教では、墓に供え物をしたり、お花を立てたりしますから、花が枯れてしまつて汚くなつたり、菓子や果物が腐つてアリがたかつたりしているのを見受けることがあります。クリスチヤンは、仏教の人以上に墓をきれいにすることを心掛けなければなりません。

求道を続いている者です。クリスチャンの家庭には、ひな祭りも端午の節句も関係ないでしょうが、わが家には、去年、私の実家で買つてもらったケース入りのおひなさまがあります。それを飾ることはいけないことでしょうか。

このようにご質問なさることから見て、あなたは救いに近いのではないかと思います。「ひな祭りが、聖書で禁じられている偶像礼拝にならないか」と疑いを持つまでに目が開かれつつあるからです。ひな祭りの由来を調べてみると、およそ次のとおりです。

古来中国では三月三日に水辺に出で「祓い」を行ふ風習があり、その際、川原で飲食をし、文人は詩を作つて楽しみました。日本にもこの風習が入り、平安時代に盛んに行われ、当時の天皇は献上された人形でからだをなで、これを川原に運んで祓いの式をした後、水に流しました。一般にも、

同様の行事があり、「源氏物語」には須磨の海上で人形を海に流すくだりがあります。後世に、祓いの感覺が次第にゆるんだ結果、人形を玩具として用いるようになり、室町末期ごろから、三月三日にひなを飾る行事が生まれた、と記されています。「祓い」ということばを国語辞典で調べると、「神に祈つて、罪やけがれを除き去つて身を清めること。また、その儀式や祈りのことば。おはらい」とあります。したがつて、ひな人形を飾ることには多分に宗教的な要素があり、特に神道の思想が根底をなしていると考えられます。一般的に言つて、飾られるおひなさまが正式な七段飾りのものであり、ひな段に白酒や菱餅などの供え物をしたり、灯明をあげるなどして飾るような規模のものであれば、これは完全に偶像礼拝になると思います。

ご質問には「ケース入り」とありますので、このような本格的なものとは違い、装飾品としての、いわゆる玩具のようなお人形ではないかと思われ

ます。美術愛好家がケース入りの人形を飾ることを、宗教的要素とか偶像礼拝に通じるとか言つて忌避する人が、一般の人やクリスチヤンの中におられるでしょうか。おられないと思います。このような観点に立つならば、飾つても、偶像礼拝の罪を犯したことにはならないと思います。ただ、最初に申し上げたとおり、このようにご質問なさるあなたご自身、福音を熱心に聞かれて、徐々に心が開かれつつあると想いますので、ご自分の良心の声に従つて決断なさることをお勧めします。あなたが、買ってくださつた実家のご両親や、いつしょに暮らしておられるご主人のことを考慮なさい、玩具や装飾品の一つとして飾り、それはまったく宗教的意義を持たないと確信できるならば、飾つても差し支えないのではないか。

ひな祭りに限らず、先祖伝來の数多くの伝統や風習に取り囲まれている私たち日本人が、その中にあってキリストによる救いの信仰に生きること

は、さまざまに困難や抵抗があります。どうか熱心に求道を続けられ、信仰告白、そしてバプテスマへと導かれますように心からお祈りいたします。

「ご承知のように、あなたがたが父祖伝來のむなし生き方から贖あがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようないいキリストの、尊い血によつたのです」(Iペテロ一・18、19)。

クリスチャンはなぜ、酒を飲んだり、タバコを吸つたりしないのですか。窮屈なように思うのですが……。

クリスチャンになりたいと思っている人々の中には、「信者になれば、酒もタバコもやめなければならなくなり、人生の楽しみがなくなってしまう」と考えている人もおられるようです。クリスチャンが酒もタバコも飲まないということは世間の常識となっているようです。けれども、「クリスチャンは酒を飲んではならない」、「タバコを吸ってはならない」といった戒律が聖書に書かれているわけではありません。こういった問題について考える際に必要な基本的な態度について、ご説明しましょう。

「何々してはいけない」という、いわゆる禁欲主義ではなく、積極的にイエス・キリストによる解決です。キリストを真心から信じ受け入れるとき、私たち自身が新しく生まれ変わり、悪い習

慣、悪い生活が変わるので。信仰によるたましい（心）の救いによって、心のうちにすばらしい喜びが与えられるのです。酒やタバコでからだを害してまで自分を喜ばせるのではなく、救われた結果、ことばに尽くすことのできないほどの喜びを経験し、生きがいを感じながら、有意義な人生を送ることができるようになるのです。確かに世の中には、意志が強く、ある動機から禁酒・禁煙に踏み切る人もいます。また、疾患のためにドクターストップがかかつたときには、死の恐ろしさから一時的にやめる人もいますが、病気が治つたり、何かの拍子に決意が崩れたりしたとき、以前に増して、酒やタバコのとりこになってしまうこともあります。

人間の生まれながらの古い性質のことを、聖書では「肉」という語で表しています。この肉の欲は人間に強く働きかけ、酒によるアルコール中毒、タバコによるニコチン中毒になることさえあります。ところがクリスチヤンは、意志が強いか

らやめられるのではなく、キリストを信じる信仰により、心の中に聖靈（キリストの御靈^{みたま}）が内住してくださり、眞の自由が与えられ、聖靈の力により、やめることができるのです。

「御靈によつて歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません」（ガラテヤ五・16）。

酒とタバコは、単に嗜好^{しゅこう}の問題として片づけられないのではないでしようか。それは、社会問題、健康問題として考える必要があると思います。その理由は、酒の性質上、初めは人が酒を飲み、ついには酒が人を飲んでしまうからです。聖書には、「酒に酔つてはいけません。そこには放蕩があるからです」（エペソ五・18）と記されています。酒のために、どれほど前途有為の人が失敗していることでしょう。また、家庭の平和を破壊していることでしょう。交通事故の原因も飲酒運転が多いことは知られています。最近、青少年の犯罪が大きな社会問題となっていますが、非行に走

る第一原因是酒とタバコであるとも言われています。タバコが健康に及ぼす害について、今日ほど医学的に解明され、また、公衆道德上からも禁煙が叫ばれていることは、いまだかつてなかったのではないかでしようか。健康に害があると気づいたら、断然おやめになるべきです。禁酒や禁煙によるやりにくさ、窮屈さを気にしておられるようですが、クリスチヤンの実業家として成功しておられる方も多いことを知つてください。私は、先輩たちが残してくれたこの貴重な遺産とも言うべきものを重んじ、継承していくたいと思つています。いかがでしようか。

あるクリスチヤンのご家庭に次から次へと不幸が訪れていました。なぜクリスチヤンも苦しみに会うのでしょうか。

簡単にお答えするのはむずかしいご質問ですが、クリスチヤンが毎日読んでいる聖書、特に旧約聖書の創世記とヨブ記に出てくるヨセフとヨブ（歴史上、実在した人物たち）の生涯がこの問題を取り扱っているので、ともに考えてみたいと思います。

まずヨセフについてですが、彼は父親の偏愛によって兄弟たちから憎まれ、ねたまれ、兄弟の手で国外に追放され、長年牢に入れられ、誤解され、見捨てられ、不幸、不運の連続を味わいましたが、後になって兄弟たちに次のように言いました。「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生

かしておいためでした」（創世記五〇・20）。彼のことばは、新約聖書の次のみことばと実によく符合していないでしょうか。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従つて召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちちは知っています」（ローマ八・28）。

次に、ヨブ記の主人公ヨブについて、一章一節に次のように記されています。「この人は潔白で正しく、神を恐れ、惡から遠ざかつていた」ところがヨブは、次々と恐ろしい不幸を経験させられました。わずかの間に全財産を奪われたり、使用者である若い者たち全部が殺されたかと思うと、自然災害によつて十人の子どもたち全部をいづれんに失つてしましました。そのうえ、自分自身も健康を損なわれ、悪性の腫物しわらわが足の裏から頭の頂まででき、難病にかかる苦しむ身となつてしましました。しかも、挙げ句の果てに妻にもそむかれ、友人にも責められるという、まことに気の毒

なほど、試練や苦難の連続でした。ヨブ自身、何ゆえこれほどまでに苦しみに遭わなければならぬのかと尋ね求めた疑問でした。ヨブは友人たちからは、「人間の苦しみは、過去に犯した罪の結果である」としか考えられなかつたからです。そこで、主に向かって、「なぜ私と争われるかを、知させてください」と声を上げました。こうして神に求め続けたヨブは、心碎かれ、疑問は消え去り、謙遜と服従の態度をもつて、いつさいを神の解決にお任せすることができたのです。

人間の苦しみは、自分が蒔いた種(罪)^まの結果であることもあります。「神は悔られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります」(ガラテヤ六・7)。

しかし聖書は、キリストを救い主として信じた者、すなわち、神に受け入れられている者が受けたる苦しみには、これとはまったく別のものがあることも教えています。

「主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられる」(ヘブル一二・6)。このみことばは、クリスチヤンの上に臨む苦しみが主の訓練であり、愛のむちであることを物語っています。

ヨブの受けた、あの恐ろしい苦難もまた、実は、この愛なる神の御手^{みづ}から受けたむちであり、訓練だったのです。ヨブが神の訓練を受け終つたとき、神が、彼の前の半生よりあと半生をもつと祝福されたことが記されています(ヨブ四一・12)。クリスチヤンは、試練や苦難に遭つても、神の恵みにより忍耐する力を与えられるのです。ヤコブの手紙五章一一節には次のように記されています。

「見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いであると、私たちは考えます。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いています。また、主が彼になさつたことの結末を見たのです。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです」。

キリスト教でいう摂理とは何ですか。運命や宿命とはどう違うのですか。

国語辞典には次のように記されています。【摂理】①(キリスト教で)神の創造世界において、すべてのものに対してあらかじめ神の配慮が行き渡っていること。②自然界すべてを治め支配するという理法」。【運命】人間の意志にかかりなくやつてくるめぐり合わせ」。【宿命】前世から定まっている、避けられない運命」。

聖書的視点に立つてさらに掘り下げて説明したいと思います。摂理とは、万物の創造者であられる神の間断なき主権的活動のことであつて、神は造られたすべてのものに対する慈しみのゆえに、全被造物を保持し、すべての出来事、状況、人間の行動を統治、支配し、自然界、道徳界、精神界のすべてのことを、神ご自身の目的達成のために導き、かつ用いられることを意味します。

聖書は、神の主権的な支配が次の領域や事柄に及んでいることを教えています。①宇宙全体、②自然界、③動物界、④国々・諸民族、⑤人間の誕生とその生涯、⑥この世における人間の栄枯盛衰、⑦外見上、偶発的に見える事象や事柄、⑧神を信じる正しい者たち、⑨信者の祈りに対する答え、等々。

簡単に言えば、摂理とは、神が広く、その造られたもののすべてを、とりわけ人間を、支え、治め、導いておられる、その神の働きのことです。これは自然界においては、自然法則として現れます。神はこれらをとおして「自身を、その愛と恵みを現しておられるのです。

「過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。とはいって、ご自身のことをあかししないでおられたのではありません。すなわち、恵みをもつて、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてください

たのです」(使徒一四・16、17)。

また、神はその摂理によつて、自然界だけでなく、精神界、道徳界に起ころるすべての事件をご自分的目的達成のためにお用いになります。すなわち、神の栄光のためです。この摂理は、神の立場から見ると、すべてあらかじめ定められているものですが、人間の立場から見ると、偶発的で、出来事は変えられるし、事情によつて、また人間の決定次第で、変わつてもいきます。

これに対して、運命論や宿命論は、その実体は不明であるが、この世界に、とにかく、起きる出来事を決定する必然的な何かがあつて、人間はこれによつて支配されると見ます。それで、人間の決定は、少しもこの出来事の解決に影響を与えないと考えるのであります。この見方では、この運命を定める力を神と呼んでも、それは聖書が教える神とはまったく次元が違い、非人格的かつ非道徳的なものです。人間と神との間の個人的関係などまったくありません。運命や宿命のような世界観や人

生観を持つなら、人間は盲目の運命に操られる人形にすぎなくなり、人生は結局なるようにしかならない、ということになります。そして、易や占いに走つたり、自暴自棄になつたりするのをよく見聞きするではありませんか。

摂理の信仰こそは、その摂理をもつて導かれる神は、聖であり、義であり、愛であられるお方であると信じていますから、いつさいをその神にゆだねることができます。そこには、あきらめではなく希望がわいてきます。ローマ人への手紙八章二八節には次のように記されています。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従つて召された人々のためには、神がすべてのことを行かせて益としてくださることを、私たちは知つています」。

10. その他

- 問81 私はキリスト集会（教会）へ行き始めて約1年になります。聖書の根本的な真理もかなりわかつてきました。近いうちに信仰を告白し、バプテスマを受けたいと思っているのですが、どういうわけか、近ごろ父親が反対します。どうしたらよいでしょうか。
- 問82 福音の話を聞いて半年ほどになりました。まことの神を恐れ敬うべきことが次第にわかつてきました。仏式の葬儀や法事における未信者との付き合いはどうすれば良いでしょうか。最近、この問題が身の周りに起こって動搖してしまいました。まことの神でないものを拝むことは、恐ろしくてできませんが、相手にうまく説明できず、悔しい思いをしました。
- 問83 クリスチャンはお墓参りをしないそうですが、なぜでしょうか。
- 問84 求道を続けている者です。クリスチャンの家庭には、ひな祭りも端午の節句も関係ないでしょうが、わが家には、去年、私の実家で買ってもらったケース入りのおひなさまがあります。それを飾ることはいけないことでしょうか。
- 問85 クリスチャンはなぜ、酒を飲んだり、タバコを吸ったりしないのですか。窮屈なように思うのですが……。
- 問86 あるクリスチャンのご家庭に次から次へと不幸が訪れています。なぜクリスチャンも苦しみに会うのでしょうか。
- 問87 キリスト教でいう摂理とは何ですか。運命や宿命とはどう違うのですか。

すか。

- 問73 なぜ、行いによらず、信じることにより救われるのですか。
- 問74 どんなに悪い人（たとえば殺人者）でも、イエスさまを信じるだけで救われるのですか。
- 問75 イエス・キリストを信じる者は、罪から救われたとか、罪からきよめられたとよく言いますが、信じてからも罪を犯しているように思います。キリストの救いは、完全ではないのでしょうか。

9. 救いの確信を持つために

- 問76 私はキリスト集会（教会）に1年近くも通い、聖書の話を聞いています。信じたいと思っているのですが、なかなか信じられません。どうしたら信じられるでしょうか。
- 問77 キリストは、みんなの罪を背負って、身代わりに罰を受けてくれたと、ずっと聞かされてきて、理解したけれど、正直言うと、自分とのかかわりをいまいち実感できないのですが。
- 問78 長い間求道している者です。自分ではイエス・キリストを救い主として信じているつもりです。しかし、自分の罪のために、イエス・キリストが十字架にかかつて死んでくださったという実感がありません。どうしたら、救いの実感が自分のものとなるでしょうか。
- 問79 救いの確信を得るには、どうすればよいのでしょうか。
- 問80 聖書からキリストの救いについてわかつてきました。しかし、一生信仰を全うする自信がありません。やつていけるでしょうか？

試みに遭われたのですから、イエス・キリストにも罪の性質はあったのではないかと思うのですが。

- 問60 世界の三大聖人のひとりとも言われ、神の御子とも言われるキリストが、なぜ十字架につけられたのですか。
- 問61 イエス・キリストは十字架の上で「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と大声で叫ばれたそうですが、どんな意味があるのですか。
- 問62 死んだ人が生き返るというのは信じがたいことですが、キリストは本当に生き返ったのですか。
- 問63 復活(よみがえり)と生き返り(蘇生)とはどう違うのですか。わかりやすく説明してください。
- 問64 キリストは死んだ後、復活したそうですが、その後はどうしているのでしょうか。私たちとどんなかかわりがあるのでしょうか。
- 問65 イエス・キリストが3日目に墓からよみがえったのなら、なぜ自分で福音を全世界に伝えなかつたのですか。

8. 救いについて

- 問66 2千年前に十字架で死んだと言われるキリストが、なぜ現在の私たちと関係があるのでしょうか。
- 問67 聖書に記されている「救い」について説明してください。
- 問68 聖書の中に「贖い」ということばがよく出てきますが、わかりにくいで、説明してください。
- 問69 悔い改めについて説明してください。
- 問70 新生について説明してください。
- 問71 聖書に書いてある和解について説明してください。
- 問72 モーセの十戒じっかいとキリストとはどんな関係があるので

じなくても結局は同じではないでしょうか。

- 問51 世の中にはクリスチヤンでなくとも高潔で立派な人々がいます。そのような人も罪人ですか。
- 問52 キリスト集会(教会)に行って聖書の話を聞くたびに、「罪」とか「罪人」とかいうことばをよく耳にしますが、私自身、別に法律に触れるようなことも、他人様に迷惑をかけるようなこともしていません。聖書に記されている罪とは、どういう意味なのでしょうか。
- 問53 世の中には悪い人もいますが、善い人もたくさんいます。その人たちは善や悪をわきまえ、善い人になる努力をしています。キリスト教はなぜ一方的に、人は罪人だと決めつけて「救い」を説くのですか。

7. キリストのみわざについて

- 問54 イエス・キリストはどこの国の人で、いつ生まれましたか。十字架にかけられて殺された理由は何ですか。
- 問55 すべてのものを神が創造したとすれば、キリストもそうですか。
- 問56 キリストは神ですか。それとも人間ですか。
- 問57 クリスチヤンは、イエス・キリストは神さまだと言いますが、単なるひとりの人間なのではないでしょうか。キリストが死んだ後、弟子たちが勝手に神さまに祭り上げたのであって、キリスト自身も自分のことを神さまだとは言っていません。
- 問58 キリストは処女マリヤから生まれたと言われていますが、処女が懷妊し、子を産むということは、自然の法則に反しているようで信じられません。本当ですか。
- 問59 イエス・キリストが一つも罪を犯したことがなかつたことは知っていますが、罪の性質は持っておられたのでしょうか。私たちと同じようにサタン(悪魔)の

- 問43 クリスチャンは死んだら天国に行くと言いますが、天国はどこにあるのですか。
- 問44 聖書が語る永遠のいのちについて教えてください。
- 問45 キリスト教の天国、仏教の極楽—これらのことばは、死後の世界についてまったく不明の人間の気休め、観念にすぎないと思うのですが。

6. 罪について

- 問46 聖書を読むと、あるいはキリスト集会(教会)に行くと、「罪」とか「罪人」とかいったことばを見たり聞いたりしますが、その意味を知りたいのですが。
- 問47 人間を罪人呼ぼわりしているのはキリスト教だけだと思いますが、人間をどうしてそんなに悪い者として見なければならないのですか。
- 問48 原罪について説明してください。
- 問49 全知全能の神なら人間が罪を犯すことは知っていたと思うのですが、それなのになぜ善惡の知識の木をエデンの園に置いたのでしょうか。それがなければ人間は罪を犯さないで済んだと思います。神さまの愛が矛盾しているように思うのですが。
- 問50 私は、聖書は良い本であると思っていますし、暇を見て読んでいます。私なりにキリストのことを知っているつもりです。現在、幸福な家庭生活を送っているので不満もなく、神に頼る気持ちにはなりません。教会に行く時間もないし、行ってまでも一生懸命やるつもりはありません。いずれ必要に迫られれば行くことになるでしょう。人間は、別に人に迷惑をかけていなければそれでよいのではないのでしょうか。また、何か問題が起これば自分で判断し、自分の責任において解決しなければならないのですから、神を信じても信

はそのようなものを感じたことがないのですが……。

- 問35 愛なる神が存在するなら、なぜこの世にたくさんの苦しみや悲しみがあるのでしょうか。
- 問36 キリスト教だけが救われるのですか。ほかの宗教も神さまを信じているのですから、救うべきだと思います。キリスト教しか救わないなら、キリスト教の神さまは愛がないと思いますが。

5. 死について

- 問37 聖書は死についてどのように教えていますか。
- 問38 人間は死んだらどうなるのですか。
- 問39 私は若いころは健康でしたが、年を取ってからは何度も入退院を繰り返しています。入院すると、死のことについて真剣に考えますが、退院すると考えなくなります。考えても答えがないためですが、聖書には答えがあるのでしょうか。
- 問40 新約聖書に記されている「よみがえり」、すなわち復活と、靈魂不滅説とはどう違うのですか。
- 問41 聖書にある「地獄」の教えを信じることができません。仏教にも地獄の教えがありますが、本当に実在するのですか。
- 問42 神は愛の神であり、全能の神なのですから、最終的には、すべての人をお救いになるのではないでしょか。聖書には、「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」とも、「小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではありません」とも記されています(I テモテ 2:4、マタイ 18:14)。ですから、永遠にわたる地獄の刑罰を下すとは考えられないのですが。

- 問22 聖書と科学は矛盾していないのでしょうか。
- 問23 聖書に書かれている奇跡物語は本当にあったことですか。非科学的なことに思われるのですが……。
- 問24 聖書に出てくる奇跡を、もし目の前で見せられたら、私も神を信じようと思うのですが……。

4. 神について

- 問25 神さまは本当にいるのですか。
- 問26 神が存在しているということが、どうしてわかるのですか。
- 問27 聖書には神が宇宙を造ったと書いてあるそうですが、その神はだれが造ったのでしょうか。
- 問28 進化論があるのに、なぜ「人間は神によって創造された」と言うのですか。
- 問29 神は何のために人間を創造され、自然を造られたのですか。
- 問30 私は、神が（人間も含めて）すべてのものを創造したということは信じることができるようになりましたが、その神が、今の私とどのようなかかわりがあるのかわかりません。それを知りたいのですが……。
- 問31 「キリスト教では、神はただひとりである」と聞いていますが、私たち日本人の神々とかなり違います。説明してください。
- 問32 キリスト教では神はただひとり（いわゆる唯一神）であり、また、三位一体の神であるとの教えであると聞いています。三位一体の神についてわかりやすく説明してください。
- 問33 聖書には「主」ということばがたくさん出ていますが、どんな意味があるのですか。
- 問34 神は愛だとよく言いますが、神の愛とは何ですか。私

ですが。

- 問9 聖書は、いつごろ、だれによって書かれたのですか。
- 問10 聖書はなぜ旧約聖書と新約聖書に分かれているのですか。
- 問11 聖書を買い求めて少しづつ読んでいますが、書いてあることは、すべて真実なのでしょうか。誤りはないのでしょうか。
- 問12 聖書はすべて人間の手によって書かれたのに、神のことばであると、どうしてわかるのですか。
- 問13 聖書が神の靈感によって書かれたとは、どういうことですか。
- 問14 聖書にある啓示について説明してください。
- 問15 マタイの福音書を読み始めましたが、無味乾燥に感じるこの系図には、どんな意味があるのですか。

3. キリスト信仰への疑問について

- 問16 キリスト教、ユダヤ教、イスラム教は旧約聖書でつながっていると聞いたことがあります、説明してください。
- 問17 私は法華経の信者です。聖書の話を聞くと、法華経の教えと同じように思うのですが、どう違うのですか。
- 問18 私は若いころから仏教やキリスト教に関心を持っていますが、人間の救いということについては結局同じように思えるのですが、違うとすればどう違うのでしょうか。
- 問19 クリスチヤンでなければ救われないのでしょうか。
- 問20 純粹で汚れのない人でないとクリスチヤンになれませんか。
- 問21 キリスト教に関心を持っています。キリスト教信仰かキリスト信仰か、どちらが正しい言い方ですか。

質問一覧

1. 人生、苦しみ、宗教、キリスト信仰について

- 問1 むなしさを感じながら毎日を過ごしています。人は何のために生きているのでしょうか。
- 問2 「生きがい」とは何でしょうか。その日その日を大切に過ごすことでしょうか。
- 問3 物欲にとらわれ、快樂を追い求めるこの時代の中で、時々むなしさを感じます。でも、宗教にも抵抗を感じます。クリスチャンの友人は「いつも平安だ」と言っていますが、キリスト教に入ると本当に平安な心になれますか。
- 問4 長い間、不治の病に悩まされていますが、キリスト信仰によって病が治る望みはありますか。
- 問5 キリスト信仰のことを考えると、クリスチャンのような「弱い者」にはなりたくない、という思いが先に立つてしまうのですが……。

2. 聖書への疑問について

- 問6 私は聖書に興味を持ち、旧新約聖書を買い求めましたが、どこから読み始めようかと迷っています。
- 問7 聖書を初めて手にしました。「聖書を読む心得」といったものは、あるのでしょうか。
- 問8 私はたまにキリスト集会(教会)の伝道の集まりに行ったり、家で少しづつ聖書を読んだりしていますが、ほとんど意味がわかりません。また、興味もわいてきません。聖書を楽しく読むことができれば、また、自分の人生にとって有益なものにできればと願っているの

◆この選集の発行に際しまして、木野田信道兄には、企画の段階から多大なご協力をいただきました。心より感謝いたします。

問い合わせ

2006年 10月 20日 初版発行 1000部

著 者 塩田 多三郎

発行者 J. B. カリー

発行所 伝道出版社

〒183-0056 東京都府中市寿町 2-8-9

TEL 042-366-7760

FAX 042-366-7790

郵便振替 00140-9-27336

印刷所 (株) 平河工業社

* 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
ISBN 4-901415-19-0

ISBN4-901415-19-0

C0016 ¥600E



伝道出版社

定価630円(本体600円+税)